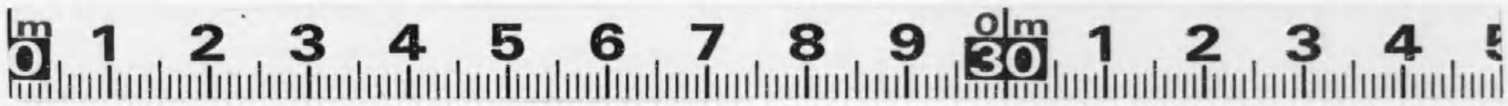
品



522-63

# 小さい國文學史

植松安著

大正
12年8月1日
購求
廣文堂書店

## はしがきの一

此の間電車のなかで若い婦人の話を聞くともなく聞いて居ると

あの人の顔は隨分映えない顔ですね

えゝ羽織もかなり古代ものネ

などゝいふ會話が耳に入つた。驚いた。けれども自分達友人同志が集つても、談話は大概下らない事ばかり、考へてみると、人の噂が多い樣です。私の所にたまに女客があつても、話題がすぐ盡きてしまつて、相手も此方も困つてしまう事がある。所がたまに西洋人のうちへ遊びにゆくと、一家中が出て來て二三時間は瞬く間に過ぎてしまう。あとで考へてみると、別に何を話したといふ事はないのですが、お互に默り込んでしまう事もなく、愉快に歸つて來たのであります。道德は喋る事を惡いと敎へました。ものいへば唇寒し秋の風。默つて居る方が安全であり、無益な多辯は身をあやまる事もありませう。然し日本人が話の材料を持つ事は、西洋人に比して、確かに少い樣であります。

話題といふとなんでもない事のやうですが、さて考へ

てみれば、やはり修養が無ければ、相當な話の受答は出來ません。修養はなんでもかまはない。趣味は如何なる方面のものでもよい。高尚なものを一つねらつて、それに近づかんとすれば、自然に養はるゝものであります。實務上の話は萬人向きでなく、藝術上の話は誰にでも通用します。美術　文學　なんでもよいから、一つぐらゐは心掛て居る方がよくはありませんか。これは話題の上からばかりではありませんが、特に着物を品評したり、顏のおつくりを上下する一部の風習は、まことに見つともないものです。

私はこの醜さを除かうと思うて、日本文學がどんなものか、どんな經路をとつて、發達して來たかを、極く平易に極く入り易く、書いた積であります。文明は、汽車や電車がいくら發達したからつて、圓滿な發達をするものではありません。人間が出來なくては駄目です。日本がたつた五六十年で、教養ある國民を得ようと云ふのは、無理な話でありますが、その心掛は常に持つて居らねばなりますまい。學校を卒業すれば、それでおしまいの教育修養は、惜しい事です。折角字が讀めるやうになつた





少年少女を、あとの事は知りませんと手放してしまうのは罪です。大にしては國家の損失です。

出でゝ働く夫が、修養の暇の無い世の中。內に働く主婦が、讀書などの暇がない忙しい今日。仕方が無いと云へばそれ迄ですが、家庭の讀物に適當した書物が少いといふのも、否まれません。私はその一面——この頃の詞でいふと、成人教育——の爲にも、此の本を書いてみました。

植　松　生

## はしがきの二

1. かぎられた紙數に、限られた時間を以て、國文學史を纒めるのは、甚だ難事でありました。思ふにまかせぬ節も多々ありますが、他日の訂正を豫期して、今日この原稿を書肆にわたします。

2. この小さい國文學史を草するに當つて、芳賀矢一先生、故藤岡作太郎先生、そのほか先輩同學の方々の著述に學んだ所が、尠くありません。こゝに記して厚く御禮を申述べます。

3. 多忙な公務の餘暇、思を凝らす時もなく、平素の考を書きなぐつた、これが、印刷になると思ふと、穴にも入りたい氣がしますが、扨幾分の努力を拂つた跡を眺めては、また愛惜の感があります。





# 小さい國文學史

## 目　次


第一章　總論……1
1　文學と文學史……1
2　我が國の文學史……6
3　國文學の種類……12
第二章　奈良朝以前……15
1　時代の概觀……15
2　神代文字……16
3　漢字の傳來……18
4　我國の文字……18
5　歌謠……21
6　祝詞　壽詞……26
第三章　奈良朝時代……28
1　時代の概觀……28
2　歌謠……35
3　萬葉集……36
4　柿本人麿……38
5　山上憶良……42
6　山部赤人……43
7　大伴家持……45
8　其他の歌人……46

9 散文……49
10 宣命……49
11 國史　古事記……52
12 風土記と氏文……56
13 當時の漢文……59
第四章　平安朝時代……60
1 時代の概觀……60
2 文事偏重と藤原氏……62
3 貴族社會……64
4 女流文學者……65
5 平安朝の文學……66
6 歌謠……67
7 古今集……72
8 在原業平……75
9 紀貫之……77
10 他の諸家……79
11 古今集以後……82
12 公任　俊賴　俊成……84
13 女流歌人……86
14 西行法師……87
15 散文……90
16 物語……92
17 歌序……98





18 日記　紀行……100
19 隨筆　枕草子……103
20 雜史……105
第五章　鎌倉室町時代……110
1 時代の概觀……116
2 和歌……115
3 新古今集……117
4 源實朝……120
5 他の諸家……121
6 連歌……122
7 隨筆……125
8 物語お伽草子……132
9 日記　紀行……137
10 戰記文……139
11 謠曲　狂言……148
12 雜史……150
第六章　江戸時代……152
1 時代の概觀……152
2 漢學……156
3 歌謠……159
4 俳諧　發句……164
5 芭蕉……166
6 淨瑠璃脚本……173

7 散文　和漢混和文……181
8 新井白石　室鳩巣……183
9 國學……189
10 古典の研究……195
11 雅文……198
12 小說……199
13 井原西鶴……201
14 山東京傳……202
15 瀧澤馬琴……204
16 滑稽文……207
第七章　明治、大正時代……212
1 明治維新……212
2 新文學……215
3 和歌　俳句　新躰詩……217
4 戲曲……219
5 小說……221

——(終)——





# 小さい國文學史

植　松　安　著

## 第一章　總　論

**1. 文學と文學史**　文學とは高尚な嗜好を基として、人の思想感情想像を文字に叙ぶるものであります。が然し、この高尚な嗜好を基とするといふ事が、頗る大切な事で、如何なる、文字、文章、歌謠、も悉く文學であるといふ譯ではない。卽ち此所に藝術的の價値といふものが必要になるのであります。藝術的の價値とは何ぞ、といふ問題になると、頗るむつかしいのですが、古來

偉大なる藝術は多數の人に最も永久的な悅樂を與ふるものである。

といふ詞がありまするから、先づこれを根本として、文學を見てゆけば差支はあるまいと思ひます。これを他の一面から言ひ換へて見ると「低級な文學は到底永い生命のないものである」といふ事に歸します。然し、この藝術的價値といふものが、多數の人に認められたものばかりであるといふ事も、實は危險な事で、低級な人ばかりに

認められたとしても、それは結局文學では無いのですから、文學を解する、文學を味ふといふ方面からは、これを讀み、これを了解して行く、知識を養ふといふ事が、頗る大切になつて來ます。高遠な藝術に近かづかんとするには、夫れ相當な準備が必要であるといふ事になるのであります。文學の鑑賞も、結局は興味そのものでありますけれども、その興味は必ず修養を經た興味でなければならぬのは、誰も異論のない所でありませう。

**人生にとつて・藝術——文學——** といふものが缺くべからざる要素である事は、申す迄もないのですが、その文學を味ふ爲には、先づ準備として文學を知らねばなりません。その知る方法にもいろいろありませうが、一國の文學が古代から近代に、どんな具合に變遷し發達し增加して來たか、といふ事を見るのが大切です。

この一國の文學が、どんなものであるかといふ問に對して、こんなものがありますと答へるのが、とりも直さず、文學史の一面の任務です。けれども、文學史といふものは、こればかりのものではありません。文學鑑賞の準備として、曩に述べた知識を修養するといふ以外に、





更に人間の理想感情といふものが、どんな具合に變遷し、發達し來るかといふ事も窺ひ知る事が出來ます。人々は個人個人にその各の思想感情を有して居る事は勿論で、譬へば小兒の時から、齡を終ふる迄には、修養境遇などによつて、常に思想や感情が發達變遷するものである事は、誰も認める事ですが、その思想感情が、それならば或個人について、どんなに變つたか、どんなに發達したか——中には低下した場合もありませう——といふ事を具體的に知りたいと思ふ時には、何が材料になるでせうか。勿論その人の境遇、周圍——これを普通にいふと所謂傳記といふものになりますが——といふものが、その個人の面影を傳へますけれども、なほ一層その人の眞面目——卽ち心の奥——を知りたいと思ふ時には、どうしてもその人の文學——或は藝術——が、その人自身を最も明白に語るものである、といふ事に、誰も異論はありますまい。

個人に就いては、上に述べたやうに、文學乃至藝術といふものが、その人の心の奥、卽ち最も意義ある人生を明白に語るものであるとすれば、これを個人の集團——

國民――に引直して見ても、同じ事が云ひ得るのは當然です。

一の國民には一の固有な思想感情が存するもので、その國民の文學は、最もよくその特質を發輝するものであります。なほ小さく考へて見れば、一時代にはその時代の特長があり、個人（文學者）には個人の特長があるといふ事になりますから、これを殘された文學から窺ひ知るといふ事は、最も當を得た方法となるのであります。

或個人と個人との交際でも、「あの人はこんな事を云うたが、どうしてあんな事を云ふのだらう」と不思議に思ふ場合がいくらもありませう。それです、それは、その對者の思想や感情がわからない爲に起る不思議です。個人の場合には、比較的無難に事も濟みませうが、これが國と國との間となるとなかなかむづかしい問題となります。例へば支那と日本、英國と日本、その他の國々と日本との關係、交際といふ事に、若し理解出來ない場合が起つたら、さう易々と事は片附きません。事件の經過を調査して見ても、最初から交換した文書を讀なほして見ても、双方が理解出來ぬ事は、曩の個人の場合と同樣に





なります。それは多く對手の國民の思想感情――國民性――といふもののわからない所から起る問題で、此に於ても更に、その國民性を最もよく窺ひ得る文學とその歴史――文學史――とが大切なものであるといふ事がわかりませう。

英國なら英國といふ國を知るには、財政上、軍備上、教育上などから、統計上の調査で現況を窺ひ知つただけでは、英國といふ國はわかりません。その國民の思想感情までを究めて、そこではじめて英國の今日の設備、狀態といふものが、わかるのであります。それには度々繰返していうた通り、英國國民の文學と文學史――これは藝術方面のこと全部を含めても勿論よろしい――といふものゝ研究が、大切になつて、それから英國の國民性とか國民精神とかを窺ひ知る事が出來るやうになるのです。

これを日本の場合に考へたのが、日本文學とその文學史とであります。文學と申せば、直ちに懦弱な事、舊い思想で云へば、婦女子の文學として貶し去る一面の考もあつて、剛健の風には、文學などは全く不必要であると

いふ事も聞きますが、吾々は上來述べ來つた立場に立つて、わが光輝ある帝國の文學が、どんな風に變遷發達し來つたかを見たいと思ひます。

**2. 我が國の文學史** わが國を建設して、今日まで隆昌に趣かしめた民族の、發生地やその經過に就いては、從來いろいろの學者が熱心に研究をしてゐる所ですが、何分古い事で、その確實な材料が乏しい爲、議論は多く結着する所が未だ不明瞭のやうです。たゞ、比較言語學の上から日本語はウラルアルタイック語族に屬して、朝鮮から滿州の一部、それから北西に一の語系をなして居るといふ事が云へるやうであり、また、考古學上や人種學上から南洋にも關係を有するものであるといふ事は間違ないと、今日見られて居ります。ともかくも、この細長い島々の國に、何處からか——それは一方面からばかりでなく——人が來て、住居を定め、子孫を殘し、所謂國家を形成したものに違ひありません。昔は神樣の事や神代の事を論じたり研究したりする事は、もつたい無い畏れ多い、そんな事は云はない方がよい、「太古は漠たり」といふだけで十分だ、といふ考へがあつたのですけれど





も、今日の世の中では、それは到底滿足される考ではないので、研究は研究、尊敬は尊敬、而もこの兩者が、決して兩立しないものではありません。今代の學者は、尊敬せんが爲に、研究を進めるのであります。

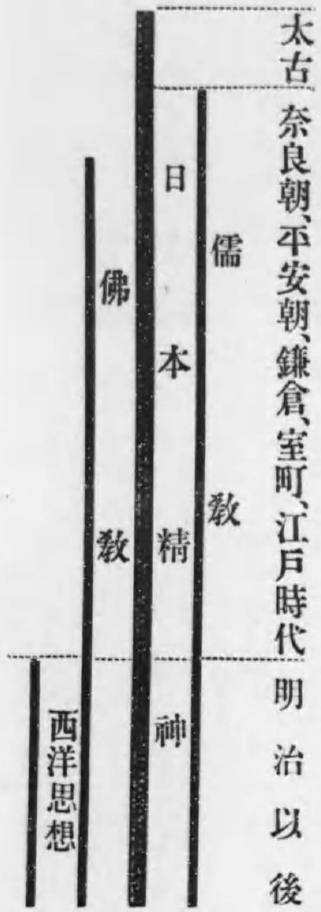
かくの如くして、その結論に達するのは、さて何日の事かわかりませんが、研究は日に日に進んで居ります。吾々日本人といふものの祖先、卽ち一體どうして日本人といふものが出來たのであらうといふ事は、曩に述べたやうに、明瞭にはわかりませんが、日本人といふものが出來、隨つて日本國が出來た事と、その以後今日までに進んで來た經過は、實際事實に現はれて居るのであります。然らばその事實が、どんなものであるか。それを知るには、先づ殘つたものゝ中、書いたものが、よい資料を與へてくれます。その殘されたものを讀んだり見たりして行くと、日本人——日本國——とは、こんなものであるかといふ事が、ほゞ見當が付けられるのであります。その中の文學を取扱つて、日本人と日本國とを知らうといふのが、卽ち日本文學の研究であつて、その一面の秩序的準備が文學史であります。

扨、曩に說いた通り、日本民族發生の經過は、今日の所まだ漠然として居りますが、この民族が世界の大勢と共に、たとへはじめの中は少さいながらも、或種の運動を起して——夫れには刺戟もあつたでせう——民族の生活を內的にも外的にも、段々と豐富にさせて行つたに違いありません。或個人が、全く孤獨の境遇では、全然人間生活を續けて行く事が出來ないと同樣に、苟も一の民族とか一國家とかいふものが形成せられゝば、その集團は他の集團と交涉が始つて、其所に交互の影響があり、その爲に發達もし墮落もして行く事になります。わが國は幸にして今日まで、惡い意味の影響卽ち墮落や低下をした事は無く、常に外國の文明を程よく取り入れて、而も國粹の純を失はずに進んで來ました。

その影響の中、最も著しく吾々の眼に映ずるのは、支那に發生した儒敎と、印度に發生した佛敎とで、更に最近は西洋の思想が、著しく我國民の生活及思想に及んで來て居ります。なんでこんな事が云へるかと申すと、それは我が國の過去に殘された文學を通覽して見ると、日本人の書いた文學中に儒敎や佛敎の思想が、日本人その








ものゝ思想と化せられて、顯はれて來るからであります。右の圖に示した通り、日本の在來の精神といふものが、中央にあつて、それに或時代から、儒敎や佛敎や西洋思想などが、中央の心棒を太くする爲、培ふ爲に附加へられたのであります。ですから、古い時代には思想の內容が單純であつたのですけれども、時代を下るに隨つて國民の思想は段々と色彩を添へて、內容が複雜になり、今日に於ては、在來の日本思想に儒敎佛敎西洋思想を加へたものが、日本の國民精神といふ形になつて居ると、見る事も出來ると、私は思ひます。儒敎も佛敎も東洋に發達したものですから、日本から見れば相影響した思想の範圍が東洋のみに限られて居たのですが、最近に至つて、これが西洋にまで及び、東西兩洋を合せて所謂世界的に文明を進めて行く事になりました。であ

るから、又日本の思想を語る日本文學も、漸次世界的になる筈であります。日本の文學史を見る人は、常にこの大きな眼を離れてはなりません。

氣候風土から人の心が、或影響を受けるといふ事は、否まれない事實であります。寒國に育つた人、暖國に育つた人、或は又實の兩親に育てられた人、さうでない境遇に育つた人、などを比べて見れば、どうしても其所に何等かの違が發見されます。卽ちその人の思想、性質、氣風といふものは、外界の影響によつて、幾分か支配せられるのが自然であります。されば一國民の思想、それを書き表はした文學、それが風土から、或影響を受けるのも當然で、我が國文學を見るにも、我が國の氣候や風土を無視する事は出來ません。

古來、我が國は氣候溫和にして地味豐饒と傳へられて來ましたが、世界の各地と比較して果して如何でせう。地震のある國と、無い國とでは、國民の思想に影響は無いでせうか。少くとも、今、日本人が住んで居る土地よりも、もつとよい土地が、世界中に無いといふ事は云へますまい。或る英國人は「日本人は神經質だ」といふ事





を申しました。そしてこの詞は、たゞ一時的に一個人が云うた詞とは、認められて居ないのであります。英國人と比べれば、日本人は確に神經質です。この英人が見る、日本人の神經質は、何處から來るのでありませう。

私は熱い日には、どうも身體がだらけて何事もしたくないやうになり、寒い日にはなんだか身體も心も緊張します。これは、私一個の經驗でありますが、これを一國民にとつて考へて見る時にも、年中いらいらしてる國民と、ゆつたりして居る國民とは、大體論から申して、氣候風土の影響もあるといふ事が申せはしないか。日本が氣候溫和地味豐饒でない土地に居るからというて、決して恥ではない。獨乙や露國のやうに、地味或は日本より豐饒でない土地に國をなしても、隨分立派な事はやり得ます。從來、氣候溫和地味豐饒の土地に日本人は住んで居るのであるから、安心である、平靜である、といふやうな思想がもし日本人間にあるとすれば、それは戒める心要があると思ひます。この見方からしても、日本文學の裏面にあらはるゝ、國民の思想といふものを洞察して見たいのであります。

**3. 國文學の種類** どこの國の文學を見ても、これを大別すれば、散文と韻文とになります。日本の文學もその通りでありますが、概していふと、國文學には散文にも韻文にも小さな形——短文や發句——であらはされるのが、一の傾向であるらしい。歌謠或は詩篇の如きは、この傾向を明に語るもので、西洋の Shakespeare, Byron, Göthe, Schiller の詩篇や戲曲に比敵する國文の韻文は見當りません。支那のもの、印度のものと比べても、我邦の韻文は、小さい所に特長を有するといふ事がいへます。

散文韻文の定義意義といふものも、極めて、むづかしいもので、支那や西洋の定義を持つて來ても、語の性質そのものが違ふのでありますから、全然當嵌るといふ事は出來ません。律とか metre とかいふものは、各その國の詞に存するもので、我邦の詞には存しない。我邦の韻文といふものは、或る定つた規律のもとに言語を配列した文學であつて、特別の配列がない文學が散文であるといふより他に、仕方がないのであります。この意味於にて、國文學中の





韻文とは長歌、短歌、連歌、俳諧、俳句、淨瑠璃などをいひ

散文とは物語、戰記文、小說などを

指す事となります。二千年の久しき間、この二種の文學がいつも中絕する事なく、次第に發達し來つた事は事實で、これを時代順に、もう少し詳しく述べると次のやうになります。

**奈良朝時代以前** これは神代から崇峻天皇の御代までを指していふのですが、この間は祝詞と和歌とがその今日に殘された全部で、兩方とも、まだ外國思想の影響を受けない時代の文學である爲に、文質が素朴ではありますが、內容から論ずれば幼稚といふ事は避けられません。これは當然の事です。

**奈良朝時代** 推古天皇から桓武天皇の平安奠都頃までをいひます。この時代は、漢學や佛敎の影響が、既に多くの文學上に見えるので、文學は和歌が最も多く行はれた時代であります。その他、宣命(せんめう)や二三の叙事文もあります。

**平安朝時代** 桓武天皇の平安奠部から後鳥羽天皇の御

代に賴朝が幕府を鎌倉に開いた頃まで。此の時代は男子の文學もありましたが、その特長としては、女流の文學者が輩出して物語に不朽の文字を後世に殘したことであります。和歌も、また前の時代を受ついで隆盛を極めたのであります。要するに時代は貴族の手にありました。

**鎌倉室町時代**　鎌倉時代とは鎌倉の開幕から後醍醐天皇の建武中興頃まで。室町時代とはそれから後陽成天皇の御世、德川家康が征夷大將軍となつた頃まで。文學には、佛教の影響が殊に著しくあらはれて、和歌にも散文にも厭世的の傾向があつたといふ事がいへます。戰記文。隨筆。謠曲。連歌。などが、その重なるものでありますが、この時代を作つたものは、武士であつて、その後(うしろ)に、文筆に優れて居た立場から、僧侶が大きな位置を占めて居りました。

**江戸時代**　江戸に幕府が置かれてから、明治維新まで。この時代には、京阪を中心とする上方文學と、江戸を中心とする江戸文學とがあります。淨瑠璃は前者で草紙類は後者。なほ國學も興隆しましたが、平民

太安麿　舍人親王　稗田阿禮像

文學が盛になつた事は、この時代の特長です。

**明治大正時代**　西洋文物の輸入によつて、國民はめざめました。文學の形式も內容も幾分か變化しつゝあります。

## 第二章　奈良朝　以前

**1. 時代の概觀**　神代から崇峻天皇の御代までといふと、神代の年代は全くわからないものとして、推古天皇の御卽位が紀元一千二百五十二年でありますから、神武天皇御卽位から數へても今日に至る迄の間の、ざつと、半分に近い年代となります。それに神代を加へれば、日本帝國の後半期よりも、もつと永い期間となりませう。この間は果してどんな狀態であつたでせう。

神代の事は

古事記

日本書紀

の兩書が吾々に、その有樣を傳へてくれます。古事記に就いては

本居宣長の古事記傳

が最も研究の行屆いた書物でありますが、簡明なものには

池邊義象　古事記通解

があります。日本書紀については

飯田武郷　日本書紀通釋

がよろしい。これらの書物に叙述され説明された神代とはどんなものでありませう。

神代以來、奈良朝に至るまでの國民生活、これを一言にして云へば、簡單素樸といふ以外に出ないのは申すまでもありません。その住居の形式——穴居などといふ事も考へられます——食物の有樣——現今內地の各所から石器や土器が發堀せられます——衣服の狀態——これは今日に殘されたものは極めて少い——ほゝ想像はつきますが、要するに比較的寒氣の烈しくない九州から、中國本土にかけて、今日では想像も及ばぬ簡單な生活を營んで居たに相違ありません。曰はゞ、わが日本の搖籃時代でありますから、隨つて思想は頗る簡單。一面から云へば貧弱といふ事も出來ます。

**2. 神代文字** 世に或は、神代に既に文字が存して居





たといふ說を稱へて、平田篤胤の如きは、それに關する著述まで致しましたが、今日北海道小樽の手宮に殘されたほりものなども、神代の文字として見る事は、穩當な說であるまいといふ事に一致して居ります。ですから、この時代に書き殘されたもの、或は刻して殘された文字といふものは、今日絕對にないといふ事になります。然らば、神代の事は、事實に遠くても近くても、一體どうして吾々に傳はつたのであらうと申しますと、それは語部（かたりべ）といふ役人が宮中にあつて、文字の無い時代に、すべての出來事を暗記して、代々語り傳へたものであらうといはれて居ります。この語部についても、果して代々さういふ職掌があつて、事細に十分語りつぎ言ひついだものであらうか！ 或は單に宮廷の儀式として、或種の歷史を語つた役人を指すのでは無からうか、といふ說もありますが、古事記の序文によつても、ともかくも、何か出來事卽ち歷史を語り傳へた事實があるに相違ありません，この語部の語り繼いだ話が、元明天皇の御代に古事記となつて、はじめて文字にあらはされたのは事實です。

文字の無い時代。記錄のない時代。それが神代から奈良朝以前なのですから、こゝにその時代の文學を說くのも、曩に申した語り傳への文學である事を忘れてはなりません。

**3. 漢字の傳來**　我が國の初に文字は無かつた。そこへ支那との交通が開けて、應神天皇の御代に朝鮮の使者たる阿直岐（アチキ）と博士王仁（ワニ）とが來朝して、天皇の皇子稚郎子（ワカイラツコ）に經書を献つた。それが日本に外國書——外國文學——の入つた最初とせられて居ります。尤もこの以前にも、私に漢文學が入つた事はあるに違ないのですが、宏く流布する事はなかつたので、この献書以來宮廷を中心に、日本人は支那の文字を借りて、その思想を發表した事になるのであります。

**4. 我國の文字**　こゝに序を以て我國の文字の事を申します。今述べたやうに、神代文字の存在は、信じられない。漢文字は輸入によつて、日本人が常用するに至りました。所が、現在吾々が日常用ゐて居る文字の種類を考へて見ると、かなり多樣にあります。その種類は





漢　字

片假名　　平假名

ローマ字

と先づこれだけです。平假名や片假名は、どうして我邦人の常用となつたのでありませう。漢字渡來の當時は、勿論假字がなかつたから、日本人が其思想を書きあらはすにも漢字を以て漢文を綴つて居ました。けれども、それでは隨分不自由な事が多い。止むを得ずいろいろの事を案出して、文體には後に示す古事記の文のやうな音と訓とを合せ用ゐるやうな事となりました。これが段々進んで、支那の草書といふものに關係して、平假名が出來、畫を略して片假名といふものが生れました。いろは四十八文字は僧空海卽ち弘法大師が發明したといひ、片假名は吉備の眞備が作つたなどゝ、古い時代には一時信じられた向もありますけれども、今日の所では、もはやこれらを信ずるものはなく、假字そのものゝ研究をして見ると——古文書に付けられた假字によつて——平假字も片假字も、或一時に或一人に依つて完成せられたものと見るよりは、或時代を通じ、國民の多數によつて、漸次に發

達、今日に至つたものと見る方が、穩當と考へらるるやうになりました。

ローマ字は和蘭語の研究——維新前——以來、我邦に入り來つたもので、今日では、鐵道の停車場の名には、必ずこれを併用するのが常習となり、其他にも多く用ゐられてあります。一面から見れば、國語をあらはす爲に我邦固有の文字と、最近輸入のローマ字とを併用するのは、おかしな事の樣に思はれますが、我邦が東洋だけの交際をやめて、世界各國と交通するやうになつた以上、その方面の影響を受けるのも當然であると見れば、見えない事もありますまい。支那の鐵道停車場名も、日本と同樣に二ケ國字で書いてあります。和蘭、白耳義も二ケ國字又は二ケ國語で掲示してあります。たゞ日本の將來の文字は、東洋式と西洋式とが、あまりにその形狀及成立を異にして居ります點から、果してどんな事になるだらうかは、わからないと同時に、大に注意すべき事であらうと思ひます。

文字が以上の有樣であると同じやうに、文體も樣々であるのは、當然で、曩に申した通り、漢字乃至漢文が輸入





せられた當時まで、日本の文字も文章も出來ない時には支那そのまゝの文體を用ゐて居ましたが、假名の發見があり、こゝに日本の詞を、そのまゝうつし出さうとする文學上の努力があつた爲に、雅文とか、漢文直譯體とか遂には漢字交り文とか、言文一致文とか、いふものを生ずるに至りました。これらの事實は、次々に述べる各時代の文學及其の標本（文例）などで一々明かになる筈でありますが、一先づ大體の傾向と範圍とは、知つて置く事が必要であります。

扨、この時代の文學——文字と文章——とはどんなものか。勿論それは、我邦の文學中最も外來の思想を受ける事が尠く、申さば、純日本の思想をそのまゝにいひ出したものであると見て差支はない筈です。たゞ注意すべきは、その書きあらはされた文字と文章とは、後の奈良朝のものである事を思はねばなりません。

**5. 歌謠**　何れの國の文學も、どうも韻文の方が散文に先達つて居るやうです。これは何れも、文字の無い時代に、所謂口ずさむといふ上から、調子のあるものが、先に生れかつ殘されるのでせう。我邦に於ける場合も、

同じく歌謠が散文に先達つて居ります。

夜久毛多都　伊豆毛夜幣賀岐　都麻碁微爾　夜幣賀岐都久流　曾能夜幣賀岐袁

八重たつ　出雲八重垣　妻ごみに　八重垣つくる　その八重垣を

これは有名な歌で、須佐之男命が、その妃櫛名田姫の爲に、出雲の國、簸の川上の須賀、といふ所に宮をお作りになつた時、雲のたち騰る有樣を見て、歌はれたものであります。

この他、大國主命、沼河姫、下照姫、須勢理姫、豐玉姫などの作歌もあります。豐玉姫命には、その妹の玉依姫に託して、彦火々出見命に奉られた歌に、

赤玉は　緒さへ光れど　白玉の　君がよそひし　たふとくありけり」

といふのがあります。これらの歌を見て、感ずる事は、第一に、それが、五七の調である事で、これは日本二千五百年の永い間を通じて、變化しない調子であります。

神代から人皇の世に入りましては、天皇をはじめ奉つて、皇后及び群臣の歌を作つた事は、記紀——古事記と





日本紀——に多く載せられてある通りで、神武、景行、應神、仁德、允恭、雄略の諸帝をはじめ、菟道稚郎子（ウヂノワカイラツコ）、磐之姫、衣通姫（ソトホリヒメ）、影姫、勾大兄皇子（マガリノオホエノミコ）など、澤山にあります。

神武天皇

みつみつし　久米の子等が　粟生（アハフ）には　韮（カラミ）一本（モト）　其根（ソネ）がもと　其根芽（ソネメ）つなぎて　擊ちてしやまむ。

みつみつし　久米の子等が　垣下（カキモト）に　植ゑし薑（ハジカミ）　口ひびく　我は忘れじ　擊ちてしやまむ。

神風の　伊勢の海の　大石に　はひもとほろふ　細螺（シタタミ）の　いはひもとほり　擊ちてしやまむ。

これは、天皇が長髓彦を擊ち給はんとせられた時の御詠で、如何にも勇氣凛凛、今度こそは是非勝たねばならぬぞ、賊を殲滅せねばならぬぞ、との御意は、恰も明治時代にあつた日本海の海戰に「皇國の興廢此の一戰に在り各員一層奮勵努力せよ」と旗艦三笠の檣上に高く揭げられたのと、同じ意氣が見えます。

雄略天皇

やまとの　小村（ルムラ）の岳（タケ）に　猪（ヰ）子すと　たれかこの事　大前（オホマヘ）にまを

す。大君は　そこを聞かして　玉纏の　胡床に立たし　倭文纏の胡床に立たし　猪待つと　わが居ませば　猪待つと　わが立たせば　手腓に　虻かきつきつ。その虻を　蜻蛉はや咋ひ　昆虫も　大君にまつらふ　汝が形は置かむ　蜻蛉島やまと

これは、天皇が吉野に狩をし給うた時、虻が飛んで來て、天皇の御手に吸ひついた。所がそこへ蜻蛉が飛んで來て、その虻を咋つてしまつた。天皇はその蜻蛉の功を賞する歌を、左右にもとめ給ひましたが、誰も詠み進むものがないので、自ら詠じ給うたものであります。

巻向の　日代の宮は　朝日の　日照る宮　夕日の　日かげる宮　竹の根の　根足る宮　木の根の　根ばふ宮　八百土よし　い杵築の宮　眞木さく　檜の御門　新嘗屋に　生ひ立てる　百足る　槻か枝は　秀枝は　天を覆へり　中つ枝は　東を覆へり　下枝は　鄙を覆へり　秀枝の　枝の末葉は　中つ枝に　落ちふらばへ　中つ枝の　枝の末葉は　下枝に　落ちふらばへ　下枝の　枝の末葉は　あり衣の　三重の子が　捧がせる　瑞玉盃に　浮き脂　落ちなづさひ　水こほろこほろに　此しも　あやに畏し　高光る　日の御子　事の　語事も　こをば

これは、やはり雄略天皇の御代に、天皇が長谷の百枝槻の下で、豐樂(とよのあかり)を聞しめす時に、三重の采女





が御盞を献つた。所がその御盞の中に、何時の間にか、槻の葉が落ち浮かんで居たのを、采女は氣づかずに捧げました。天皇はそれを御覽遊ばして、いたく御立腹、采女をその場に斬り給はんとなされた。采女は、おのれが粗忽を悔い、先づ陛下の御猶豫を乞うて詠んだものであります。

韓國の　城の邊に立ちて　大葉子は　領布振らすも　日本へ向きて

これは、有名な伊企儺が、新羅の軍に虜にせられた時、新羅の將は彼を殺さんとして臀を日本に向けしめ、「日本の將我がしりの肉を嚙へ」と呼べと命じました。伊企儺は勇猛の人でありましたから、反對に「新羅王わがしりの肉をくらへ」と叫んで遂に殺されてしまひました。この時その妻の大葉子も、また捕へられて居たのでしたが、夫の殺さるゝのを見て詠んだのがこの歌であります。この歌を大葉子が歌うたのを聞いて、日本軍の或人が

韓國の　城のへに立ちし　大葉子は　領巾振らす見ゆ　難波へ向きて

と和しました。

これらの和歌は古事記と日本紀に出て居るのですが、兩書の歌ばかりを集めたものに

林諸鳥の記紀歌集

があり、それを解釋したものに

橘守部の稜威言別（イヅノコトワキ）

があります。

**6. 祝詞（ノリト） 壽詞（ヨゴト）** この二は、いづれもこの時代の末に出來た散文であつて、共に神前に祭祀の所以を陳じ、事物を讃して、神德をたゝへ或は神代の舊事、遠祖の事蹟を述べて、御代を祝する詞であります。でありますから、この祝詞や壽詞を、神前に列する群臣はもとより、地方田舍の庶民も、漸次にこれを傳聞して、建國の基本を明かにし、また一方には人心をして公明ならしむる間接の傳播があつたに違ありません。

祝詞も壽詞も、共に句節を整へ、枕詞を冠し、對句と疊語とを用ゐて、行文頗る流麗、自ら誦するに便、傳ふるに易く出來て居ります。壽詞には

出雲國造神壽詞（カムヨゴト）

祝詞には





祈年祭、大祓、大殿祭の詞

などが、最も古いもので、詞もうるはしく、調も高雄であります。これらは「延喜式」といふ書物の中に記されて、今日に殘され傳へられました。

祝詞の起源は、天照大神が天の窟戸に籠りました際、天兒根命（ムメノコヤネ）が奏し給うた太諄辭（フドノリト）に發するのでせうが、これは今日に傳はりません。賀茂眞淵は、出雲國造神賀詞は舒明天皇の朝に作られたものであり、大祓詞は天智天皇か天武天皇の頃かに作られたのであらう、と說いて居りますが、要するに確かな年代はわかりません。

文體は、漢字の正訓と正音とを併用して、用言の語尾と助辭とを細く書き、すべて國語のまゝに、うつし出したものであります。

出雲國造神賀詞（イヅモノクニノミヤツコノカムヨゴト）

八十日日（ヤソカヒ）はあれども　今日（ケフ）の生日（イクヒ）の足日（タルヒ）に　出雲國國造姓名（ナニガシ）
畏（カシ）み畏（カシ）みも白（マヲ）し賜はく　掛卷（カケマク）も畏き　現神（アキツミカミ）と大八島國所（シロ）
知（シ）めす　天皇（スメラミコト）の大御代を　手長（タナガ）の大御代と齋（イハ）ふとして　出
雲國の　青垣山內（ヤマヌチ）に　下岩根（シタツイハネ）に　宮柱太しく立て　高天原に
千木高知ります　伊邪那岐の日眞名子（ヒマナコ）　加夫呂伎熊野大（カブロキクマヌノオホ）

神櫛御毛野命（カミクシミケヌノ）　國作りましゝ大穴持命　二柱（フタハシラ）神を始めて百八十六（モヽヤソマリムヤシロマ）社に坐す皇神等を　某甲が弱肩（ソレガシヨワヅタ）に　太襁（フトダスキ）取りかけて　伊都幣（イツヌサ）の緒結び　天（アメ）の御翳（ミカゲ）と冠（カブ）りて　伊都（イツ）の眞屋（マヤ）に麗草（アラグサ）を　伊都（イツ）の席（ムシロ）と　苅り敷きて　伊都閉黑（イツヘクロ）まし　天の甕和（ミカワ）に　齋（イ）みこもりて　志都宮（シヅミヤ）に　鎭め仕へ奉りて　朝日の　豐さかのぼりに　祝（イハヒ）の返事（カヘリコト）の　神賀（カムホギ）の吉詞（ヨゴト）　奏（マヲ）し賜はくと白す。（下略）

これは一例でありますが、祝詞壽詞に就いて注意すべき事は、この時代に作られた純なるものが、どれ程殘つて居るかといふ問題であります。後世まで度々同じ種類の祝詞が、神前に奏された爲に、後人の潤色した部分が多いに違ありません。

祝詞に就て、從來研究せられた書物には

加茂眞淵　祝詞考

平田篤胤　祝詞正訓

などがあます。

## 第三章　奈良朝時代

**1. 時代の概觀**　推古天皇から桓武天皇まで、十





八代二百年ばかりの間。要するに前代から漸々輸入勃興の氣運にあつた、漢學と佛教とが、此の期間に深く日本人の間に侵入して、政治に文教に、影響を受けないものは一つもない有樣です。その爛熟した結果は、實に大化の新政でありまして、恰も德川幕府の末、西洋の文物切りに輸入せられて、攘夷の大論も何のその、自然の勢を以て、明治の維新が成立したと同樣の有樣であります。今日各地に鐵道がひかれ、大きな港から西洋行の汽船が出て行く有樣と等しく、奈良地方には、佛寺の建立が讀經の聲と共に起り、一方漢學の教養所も建設せられ、秀才は選ばれて留學生となつて支那に渡つたのであります。遣唐使は、正式に支那と我邦との交際を結んで、彼の國から渡來する學者技術者も、なかなかの多數にのぼつたのであります。

殊に、元明天皇が都を奈良に遷したまうた後は、それ迄は皇居が一世一代であつたのが、永久の帝都といふ事になり、青土よし奈良の都は咲く花のにほふが如く、前代未聞の繁華を呈したのであります。その規模はもとより、後の桓武天皇の平安京と比べては、小さかつたでせ

うが、設計は唐の長安の制に則とられ、新都の面目、國運と共に新たなものがあつたのであります。聖武天皇の天平時代は、これまた百花繚亂といふ有樣で、なかにも佛敎の隆盛は一時その極に達したといふほどであります。

なほ特に、この時代に就て注意せねばならぬ事は、當事に興つた美術——佛敎美術——彫刻——であります。今日一度奈良の地に遊んだ人は、何人も法隆寺藥師寺の佛像の如何にも美術的であるのに驚くでせう。其のほか、正倉院の御物に殘る美術品の各種。もとよりこれらは輸入品そのまゝのものもありませう。或は彼國から渡來した佛師などの手になつたものも多くありませう。けれども日本人が、此等の大藝術を受入れて、これを理解——多少なりとも——し得る迄に、進んで居たといふ事は否まれません。記錄文字に殘された、所謂文献の側から窺ふ奈良朝時代の文明文化は、一方この美術方面の探究を待つて更に啓發せらるゝ所が大きいのであります。

扨、然らば、かくの如く外來の思想が多く輸入せられ、隨つて、その文物彼も此も模倣を第一とした時代の、わが國文學は果してどんな風でしたらうか。





今、此の期に出來た重な作品を擧げてみれば

散文に　古事記、風土記、氏文、祝詞、宮命

歌謠に　萬葉集

があります。これに就ては、後になほ詳しく述べるのですが、概して一言すれば、漢文學や佛敎の、かほど盛であつた時代——美術上などには、ほとんど日本人の美術心を彼の國のものに引込まれてしまつた樣にも見える時代——にも係らず、わが文學の上に於ては、やはり純然たる固有の思想を持つて居たやうで、流石に外來の文物思想もまだ、わが國民の內的生活——心の奧——までには入つて居らなかつた有樣に見えます。奧情は不用意に吐露さるゝものであるとすれば、この時代の文學、特に歌謠を通じて窺ふ國民の心裡には、まだ外敎の影響が甚だ少く、國文學を一貫する純然たる一の思想は、儒佛二敎の主義と熟合するに至らなかつたものと、云ひ得るでせう。

次に、この時代の言語と文章とは、どんなであつたでせう。前の時代に擧げた數例は、此の期に書きあらはされたものでありまするから、大體の見當は既について居

る筈でありますが、言語（はなしことば）としても、漢學佛敎の流行につれて、その方面のことばが澤山、日常の使用語に入つた事は疑ありません。今日、吾々がランプ、テンプラ、カツパ、プロペラーなどゝ云ふ詞を、平氣で用ゐて居る樣に、當時では、一寸めづらしかつた塔とか詩とかいふ詞を、或はハイカラがつて用ゐたかも知れません。然しながら、もと漢音梵音といふものは、我邦のそれと全然異るものでありますから、よくはわかりませんが、今日に殘つた書き物の上から調べて見ると、外國音そのまゝではなく、多少音韻を變化させて、我邦の音に不調和がないやうにしたのであらうと、思はれる節があります。これは、今日の外國音を取入れる有樣から考へて、さもあるべき事と信じられるでせう。文章の方は、漢文そのものを綴るといふ事が、盛になりました。これを平たく說明すれば、漢字がはじめて入つた頃にはその字を借りて、日本語を寫すといふ傾向——ローマ字で日本語を綴ると同樣なやり方——があつたのですが、この時代卽ち漢學が隆盛になつた時代には、日本人がその思想を表はすに、漢文そのものを用ゐるやうな傾向が

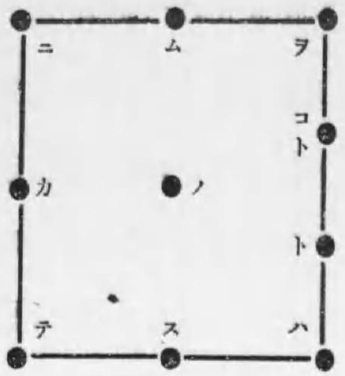




增したのであります——例へば全然あちらの文字で、英語で綴るやうなもの——古事記の文章は、大體漢字を借りて、日本語で書いたものでありますが、日本書紀の文章は漢字と漢文とであります。ですから、古事記の方は、支那人には讀めません、日本書紀の方は支那人にも意味がわかります。そして、日本書紀の方は、無理に——かへり點をつけて——日本讀にすれば、出來ない事もないといふ次第です。

この傾向が、言文不一致の源でありまして、詞が異ふ所へ、同じ語系でない國の文字を借用したといふ點に、無理があつたのでありませうが、日本は今日まで、とかく文章語と口語とに、大きな隔りがあるのであります。

漢字の借用といふ事は、どうしても無理を生ずるので、日本詞の爲に、假字が生れた事は、旣に前章にも說きましたが、此の期の末に、片假字が用ひられるやうになりました。なほ假字がまだ生れない時分、漢文を讀みかつこれを敎へる、又これを廣く傳へるには、どんな方法をとつたか。それには「點」といふものがあります。この點の事は、普通にヲコト點と稱へまして、一例をいへば




圖の如く漢字の一字の上下左右に點を打つて、その點の所在によつて、日本語日本音のヲとかテとかを示して讀めるやうにしたものであります。

この「點」は、假名が出來てからは、無用のものゝやうに思はれますが、平安朝、鎌倉、德川時代までもなほ、漢學者に多く用ひられて、この點を心得る事が、大きな資格になつて居たものです。點と假字と、どちらが早く生れ、全く假字の無い時代は點ばかりで、漢文を讀む資としたかといふ事になりますと、今明瞭に、點の方が早く生れたとか、假字はその後に起つて一般的になつたとか、答へかねるのでありますが、暫くの間、これが兩用せられて居た事だけは確で、文字としての假字と性質こそ全然違ひますが、此所に點といふものもあつたといふ事は、知つて居らねばなりません。

今一つ重要な事は、印刷術の事です。孝謙天皇の頃に漢土から、印刷術が傳來したらしいのですが、その後日





本でこれが大に發達した譯ではありません。今日に殘つて居る印刷物で一番古いものは、彼の百萬塔の中の陀羅尼四種でありますが——法隆寺に現存する——、これは百萬といふ數を、實際印刷したものでせうから、隨分發達した術が既にあつたのでありませう。印刷の事が、文明の增進に大きな關係のある事は、今日の狀態から見ても、直ぐにわかる事でありますが、我邦の此の當時の印刷術は、どういふ譯か、一般に及ばず、書物の印行されたものは、今日に殘つて居りません。

**2. 歌謠**　歌は自然の聲であります。自然の聲とは、天性の眞と、敎化せられたる純との、交りであります。日本人が、この風土に住し、多く植物性の食物をとつて、外國の壓迫が激しくなく、比較的安穩に生活して行つた、太古の時代は、既に見ましたが、儒佛二敎が入つて、やゝ生活上の複雜を來たしたこの期の歌謠は、どんなものでありましたらう。

儒佛二敎の影響が、人の心の奥までは、まだ浸み込んで居ないとは曩に申しましたが、人智は前期に比して甚しく進んで居ります。漢詩はどしどし輸入されます、來朝

の支那及韓人は詩を賦して示めしました。今迄は、他と交渉がなかつたものゝ、一度外國の發達を見て、これと知識を交換すれば、誰でも奮發競爭の念の起るのは當然でせう。前期に見えなかつた複雜な感想も、微細な觀察も、この期の歌謠にあらはれ、詞形もまた大に整うて來た事は、一々その例が示します。持統天皇の朝に柿本人麿、山部赤人等の出づるに及んで、和歌は極盛の運に達しました。殊にその長歌に至つては、後代に比を見ない有樣で、卒直な感情を、そのまゝに現はした點、歌調の莊重正大な點、何れも古今無類といひ得るでせう。

**3. 萬葉集** 萬葉集の出來た時代と、その撰者とについては、古來いろいろ議論の多い所でありますが、要するに、聖武孝謙の兩朝に、大伴家持(ヤカモチ)が、私に撰んだものであるといふのが穩當な說です。

載錄せられた歌は、仁德天皇の御宇から、淳仁天皇の朝に至るまで、凡そ四百年間に亘りますが、大部分は天武天皇以後九十年間ばかりのもので、歌の數はすべて四千四百九十六首。二十卷あります。歌の形體に從つて

長歌　短歌　旋頭歌　連歌





空蟬之命乎惜歎浪小所湿伊良虞能嶋

之玉藻苅食

うせみのいのちをしまれなみたち

いらごのしまにたまもかりくる

右案日本紀曰天皇四年乙亥夏四月

—元暦校本萬葉集の一部—

などの名目を立て、別に反歌と稱して、長歌の末に、一二首添へたものがあります。これは、舒明天皇の頃から出來たものですが、通常の短歌と同形で、本歌である長歌の意の足らない所を補ひ、または長歌の大意を約言したものであります。この集はまた、歌の內容によつて、部類を立てました。雜歌　相聞　挽歌　譬喩歌　四季相聞　四季雜歌　などがそれです。東歌　防人の歌などゝいふのもありますが、これは、今日で申せば、地方の俗謠のやうなもので、詞はやゝ鄙びて居ります。

萬葉集の歌の書き方——文字の使用法——は凡て漢字ばかりを用ひてありますが、これは一種獨特の用法で、音訓相交へて、これを讀むには、非常に骨が折れます。この書方を稱して今は「萬葉書」といひ、これらの漢字を總稱して「萬葉假字」というて居ります。山上復有山と書いて「出」(いで)と讀ませたり、十六と書いて「猪」(しゝ)と讀ませたり、滑稽戲謔に類したものもあります。

**4. 柿本人麿**　歌聖人麿の傳記は詳でありませんが、持統天武の二朝に仕へて、官位は餘り高くなく、後





に石見國に住んで、其所に終つたといふ事であります。傳記はこれだけしかわからないけれども、その殘した歌は短歌長歌頗る多く、短歌も山川の風物から羇旅、戀愛の情を歌ひ出でゝ、雄渾雅趣のあるものが多いのです。けれども人麿の人麿たる所は、長歌にあるので、文辭の端正、格調の雄大、萬葉集中、人麿の右に出づるものは恐らくありますまい。

高市(タケチ)皇子の薨去を悲んだ歌の如きは、集中の最大長篇で、而も最大雄篇といふ事が出來ませう。

高市皇子殯宮の時

かけまくも忌々(ユユ)しきかも　言はまくも綾にかしこき　明日香の眞神(マガミ)の原に　久堅の天津御門を　かしこくも定め給ひて　神さぶと磐(イハ)かくります　八隅し吾大王の　きこしめす背友(ソトモ)の國の　眞木(マキ)立つ不破山(フハヤマ)こえて　狛劍(コマツルギ)和射見(ワザミ)が原の　行宮(カリミヤ)に　くもりいまして　天下治め給ひ　食國(ヲスクニ)を定め給ふと　鳥が鳴く吾妻の國の　御軍(ミイクサ)を召し給ひて　千はやふる人をやはせと　まつろはぬ國を治めと　皇子ながら任(マ)け給へば　大御身に　大刀取帶ばし　大御手に弓取持たし　御軍士をあともひたまひ　齊(トトノ)ふる鼓の音は　雷の聲と聞くまで　吹きなせる小角(ダ)の音も　敵見たる虎か吼ゆると　諸人のおびゆるまでに

さゝげたる幡の靡きは　冬木成春去りくれば　野毎(ヌベ)につきてある火の　風のむた靡ける如く　取持てる弓弭(ユハズ)の騷ぎ　三雪ふる冬の林に　嵐かもい卷きわたると　念(オモ)ふまで聞きのかしこく　引放つ箭(ヤ)の繁(シゲ)けく　大雪の亂れて來(キタ)れ　まつろはず立向ひしも　露霜の消なば消ぬべく　ゆく鳥のあらそふはしに渡會(ワタラヒ)の齋(イハヒ)の宮ゆ　神風にいぶき惑はし　天雲を日の目もみせず　常闇に覆ひ給ひて　定めてし瑞穗の國を　神ながらふとしきまして　八隅しゝ吾大王の　天下申し給へば　萬代にしかしもあらんと　木綿花(ユフバナ)の榮ゆる時に　吾大王皇子の御門を神宮によそひ奉りて　遣はしゝ御門の人も　白妙の麻衣(アサコロモ)著て　埴安の御門の原に　赤根刺す日の盡(コトゴト)　鹿自物いはひ伏しつゝ　烏玉の夕になれば　大殿をふりさけ見つゝ　鶉なすいはひもとほり　さもらへどさもらひえねば　春鳥のさまよひぬれば　歎もいまだすぎぬに　おもひもいまだ盡ねば　言さへぐ百濟の原ゆ　神葬葬(カムハカリハフリ)いまして　朝もよし木上(キノベ)の宮を常宮と高く奉りて　神ながらしづまりましぬ　しかれども吾大王の　萬代とおもほしめして　作らしゝ香來山の宮　萬代に過ぎむとおもへや　天の如(ゴト)ふりさけみつゝ　玉だすきかけてしぬばむ　かしこかれども

短歌二首





久堅の　天しらしぬる君故に　月日も知らに　戀ひわたるかも

埴安の　池の堤の　隱沼(コモリヌ)の　ゆくへもしらに　舍人はまどふ

人磨は、この他に哀死の詠が頗る多く、貴人では日並皇子、河島皇子、明日香皇女を悲んだ歌があり、なほ自分の妻を悼み、吉備津采女の死を悲んだ長歌をはじめ、短歌にも數多くのものがあります。免れがたい人世の悲運に同情を寄せて、熱涙をそゝいだ人磨の多涙多恨。而も文辭嫋々として人の胸を射ずんば止まないといふ歌詞。彼が近江の荒都を過ぎた時の詠の如きは、天地山川の變に感じて、惆恨低徊遂に千古の絶唱をなさしめました。

過近江荒都時作歌

玉だすき　畝火の山の　橿原の　日しりの御代ゆ　あれましゝ　神のことごと　樛(ツガ)の木の　いやつきつぎに　天の下　しろしめしゝを　そらみつ　やまとをおきて　青土よし　平山(ヒラヤマ)越えて　いかさまに　思ほしけめか　天さかる　夷(ヒナ)にはあらねど　石走(イシバシ)る　淡海の國のさゞなみの　大津の宮に　天の下しろしめしけむ　すめろぎの　神のみことの　大宮は　此所と聞けども　大殿は　こゝといへども　霞立つ　春日(ハルヒ)かきれる夏草(ナツクサカ)香　繁ぐなりぬる　もゝしきの　大宮處　見ればか

なしも

反歌

さゞなみの　思賀(シカ)のから崎　幸(サキ)くあれど　大宮人の　船まちかねつ

さゞなみの　志賀の大わだ　よどむとも　昔の人に　またもあはめやも

**5. 山上憶良(ヤマノウヘノオクラ)**　憶良は、天平五年齢七十四才で終つたといひ傳へます。遣唐少錄、伯耆守等を經て、神龜三年に筑前守に任ぜられた事がわかつて居ります。此の人は、頗る漢學の素養のあつた人で、佛教も信じたのですが、漢學が最も得意であつたと見えて、詠歌の上にもその影響があらはれて居ります。敬神忠君の想を叙べたものも、多々ありますが、憶良の歌は遒强の姿あるものと賞揚する事は出來ても、その詞形には稍粗雜といふ點があります。憶良はかつて、「類聚歌林」といふ歌集を作つたと傳へられて居りますが、今日には傳はりません。

令反(レニー)感情歌

父母を見れば尊し　妻子(メコ)を見れば愛(メグ)し愛(ウツツ)し　世のなかはかくぞことわり　もちどりの拘(カカラ)はしもよ　早川の行方知らねば　穿履(ウケグツ)を脱きつる如く　踏み脱ぎて行くちふ人は　岩木より生(ナ)





りでし人か　汝(ナ)が名告(ノ)らさね　天へ行かば　汝がまにまに　地(ツチ)ならば大君います　此照す日月の下は　天雲の向伏(ムカフ)す極み　谷蟆(タニグク)のさ渡る極み　きこし食(ラ)す國のまほらぞ　かにかくにほしきまにまに　然(シカ)にはあらじか

反歌

久堅の　天路(アマヂ)は遠し　なほなほに　家に歸りて　家業(ナリ)を爲(シ)まさに

○

士(ラノコ)やも　空しかるべき　萬代に　語りつぐべき　名は立たずして

**6. 山部赤人**　人麿と名を同じくした歌聖であつて、同樣傳記が詳でありませんが、聖武天皇の御代に盛りの齡であつたらしいのです。官は極く低い人で、舍人くらゐであつたでせう。聖駕に從ひまつって紀伊、大和、伊豫などに遊んだ事があり、また東國にも下つた事もあります。赤人の特長は、自然の美を詠ずるにあつて、聲調は閑雅、想像は穩健といへます。人麿は長歌に得意ですが、赤人は短歌に優れたものが多く、何れ劣らぬ古今獨歩の歌聖であります。後世「山柿の門」などと歌道の事をいふに至つたくらゐであります。

望不盡山歌

天地の分れし時ゆ　神さびて高く貴き　駿河なる富士の高嶺を　天の原振さけ見れば　渡る日の影もかくろひ　照る月の光も見えず　白雲もい行き憚り　時じくぞ雪はふりける　語りつぎ言ひつぎ行かむ　富士の高根は

反歌

田兒の浦ゆ　打出でゝ見れば　眞白にぞ　富士の高嶺に　雪はふりける

○

吾も見つ　人にも告げむ　葛飾の　眞間の手兒名が　奥つ城どころ

葛飾の　眞間の入江に　打なびく　玉藻かつけむ　手兒名しおもほゆ

○

春の野に　すみれつみにと　來し我ぞ　野をなつかしみ　一夜ねにける

わがせこに　見せんと思ひし　梅の花　それとも見えず　雪のふれゝば

秋風の　寒き朝けを　さぬの崗　越ゆらむ君に　衣かさましを





**7. 大伴家持**　家持は旅人の子。聖武天皇から光仁天皇に至る五朝に歴仕して、從三位中納言、持節征東將軍に進み、桓武天皇の延暦四年に薨去しました。家持の家は代々軍職にあつた爲に、ひたすら誠忠をぬきんでゝ、父祖の名を辱めざらんとした事は、その詠に見えます。儒佛の思想があらはれて居る事は、人麿赤人などよりも多いのでありますが、彼の感情は燃ゆるが如く、痛切なものが澤山にあります。

海行かば　水づく屍　山行かば　草むす屍　大君の　へにこそ死なめ　顧みはせじ

の如き、また

ちゝのみの　父のみこと　はゝそばの　母のみこと　おほろかに　心つくして　思ふらむ　その子なれやも　ますらをやむなしくあるべき　梓弓　すゑ振りおこし　投矢もち　千尋射わたし　刀劍　腰にとりはき　足びきの　七峯ふみこえ　さしまくる　心さやらず　後の世の　語りつぐべく　名を立つべしも

反歌

ますらをは　名をしたつべし　後の世に　きゝつぐ人も　かたりつぐがね

○

時はしも　いつもあらむを　心いたく　去にし吾味(ワガモ)か　若子(ワクコ)をおきて

妹が見し　宿に花咲く　時は經ぬ　吾がなく涙　いまだひなくに

かくのみに　ありけるものを　妹も吾も　千歳のごとも　たのみたりけり

**8. 其他の歌人**　以上四家の他に、名歌は澤山あります。今その五六を擧げて見ますれば

天武天皇

よき人の　良しとよく見て　よしと云ひし　吉野よく見よ　よき人よく見つ

額田女王（春秋競の歌）

冬ごもり春さり來れば　鳴かざりし鳥も來なきぬ　咲かざりし花も咲けれど　山を茂(シ)み入りても取らず　草深み取りても見ず　秋山の木の葉を見ては　紅葉をば取りてぞしぬぶ　青きをば措きてぞ歎く　そこしうらめし　秋山われは

持統天皇

春過ぎて　夏きたるらし　しろたへの　衣ほしたり　天の香具山





大伯(オホク)皇女

わがせこを　倭へやると　小夜ふけて　あかとき露に　我が立ぬれし

二人行けど　行すぎがたき　秋山を　いかでか君が　一人越ゆらむ

元明天皇

ますらをの　鞆(トモ)のおとすなり　もの〻ふの　大前君(オホマヘツギミ)　楯立つらしも

大伴旅人（酒を讃する歌）

古の　七の賢き　人どもも　ほりするものは　酒にしあるらし

あな見にく　さかしらを爲(セ)と　酒のまぬ　人をよく見れば　猿にかも似る

夜光る　珠といふとも　酒飲みて　心をやるに　豈しかめやも

笠金持

萬代に　見とも飽かめや　三吉野の　瀧つ河内の　大宮所

人皆の　命も我も　みよし野の　瀧の常磐(トコハ)の　常ならぬかも

作者知れざる歌

勝間田の　池は我知る　蓮なし　しかいふ君の　鬚なきが如

（上一首——新田部親王に献れる）

足乳根の　母がかふ子の　眉ごもり　こもれる妹を　みるよしもかも

旅人の　宿りせむ野に　霜ふらば　吾子はぐくめ　あめの鶴群

東　歌

霞居る　富士の山間に　わが來なば　いづち向きてか　妹がなけかむ

足柄の　箱根の山に　粟まきて　實とはなれるを　逢はなくも怪し

玉川に　さらす調布　さらさらに　何ぞこの女の　こゝだ愛しき

以上は、極く簡單に、代表的と思はるゝ歌を數首擧げたに過ぎません。皆萬葉集のなかにある歌ばかりですが、曩にも述べた四千餘の歌は、今日もなほ吾々の心琴に觸れて、此の時代を憧憬せしむるものが多いのです。萬葉集の研究には

鹿持雅澄　萬葉集古義

が最も大成せられたものですが、これは非常に大部なもので、一寸讀むには





佐々木信綱　萬葉集選釋

土岐哀果　作者別萬葉全集

などが手頃でありませう。

**9. 散文**　奈良朝時代の散文は、前記の歌謠に比ぶれば、甚だ發達しない觀があります。これは、當時漢文が流行して、朝廷の記錄制令の類はいふまでもなく、庶民に告示する詔勅の類さへ、全然漢文を以て書かるゝ傾向でありましたから、特に國文を用ゐねばならぬ必要以外、大低のものは漢文が用ひられ、自然國文が等閑になつたのでありませう。此の時代の散文と申せば、

祝　詞

宣　命

國　史

風土記

氏　文

の類でありまして、祝詞は前時代と大差がありませんから、その他のものに就いて、次々に述べませう。

**10. 宣命**　當時漢文を以て綴つた詔勅に對して、國語を以て綴つた詔勅を宣命といふのであります。「續日本

紀」のなかに多く見えて居りますが、持統天皇の朝以後に用ひられたものであります。上代の詔勅は國文のものが殊に多かつたのでありませうが、日本書紀を編む際に、皆漢文に綴り直されたのは殘念な事です。

祝詞は神前に告白するの文、これは庶民に告布するの文、何れも對者をして感動せしむるを要するものでありまするから、對句、疊句、枕詞、などを用ゐて、流麗雄大の風をなした點は、兩者ともよく相似た所があります。

元明天皇卽位の宣命

現つ神と　大八洲國知ろしめす　倭根子天皇大命らまと（ヤマトネコスメラガオホミコト）
詔り給ふ大命を　うごなはれる親王（ミコ）たち　諸王（オホキミタチ）　諸臣（オミタチ）　百
の官人（ツカサ）たち　天の下の公民（オホミタカラ）　もろもろ聞しめさへと　詔（ノ）
る

かけまくも畏き藤原の宮に　天下しろしめしゝ　倭根子天皇
丁酉（ヒノトノトリ）の八月（ハツキ）に　この食國（ヲスクニ）天下の業を　日並知皇太子（ヒナメシノミコノミコトノムカヒ）嫡
子（メバラノミコ）　今天下知しめしつる　天皇（スメラミコト）に授け給ひて　並（ナラ）び居まし
て　この天下を治め給ひ　とゝのへ給ひき。是は掛卷も畏き
近江の大津の宮に　天下知しめし　大倭根子天皇の　天





地と共に長く　日月と共に遠く　變るまじき常典（ツネノノリ）と立て給
ひ　布きたまへる法を　受けたまはりまして　行ひ給ふ事を
諸承りて　畏み仕へ奉らく　と宣り給ふ大命を　諸聞しめ
さへと宣る。

かく仕へ奉り侍るに　去年の十一月（ソモツキ）に　畏きかも　我王（オホキミ）
朕天皇（アガスメラミコト）の詔り給はく　朕御身勞（ワレミミツカ）らしますが故に　暇得（イトマ）て御
病治め給はむとす。此天津日嗣の位は　大命にませおほまし
まして治め給ふべしと　讓り給ふ大命をうけたまはりて　答
へ申しつらく　朕は堪へじと辭び申し受けまさずある間に
たびまねく日重ねて　讓りたまへば　いとほしみ畏み　今月
六月十五日に　大命は受け給ふと申しながら　此重位（イカシクラヰ）に繼
ぎます事をなも　天地の心を勞（イトホ）しみ　重（イカ）しみ　畏み　まさく
とのり給ふ　大命を　諸聞しめさへと宣る

故（カレ）こゝをもて　親王（ミコ）等をはじめて　王（オホキミタチ）　臣（オミタチ）　百の官人
等の淨き明き心もちて　いやつとめに　やしまりにあななひ
奉り　輔け奉らむ事に依りてし　此食國天下の政は　平けく
長くあらむとなもおもほしめす。又天地のむた　長く遠く變
るまじき常典（ツネノノリ）と　立て給へる食國の法も　傾く事なく動く
事なく　渡り行かむとなも　おもほしまさくと　宣り給ふ大
命を　諸聞しめさへとのる

遠皇祖(トホスメロギ)の御代を始めて　天皇が御世御世　天つ日嗣と高御坐にまして　此食國天下を撫で給ひ　慈み給ふ事は　事だつにあらず。人の祖(オヤ)のおのが弱兒(ワクコ)を養ひ治(ヒタ)す事の如く　治め給ひいつくしみ給ひ　來る業となも神ながらおもほしめす　こゝを以て先づまづ　天下の公民の上を　いつくしみ給はくと詔り給ふ　大命を諸聞しめさへとのる

**11. 國史—古事記**　わが國、修史の事業は、推古天皇の二十八年に聖德太子が蘇我馬子等と議つて、天皇紀、國紀及臣、連、伴造、百八十部並に公民等の本紀を、錄し給うた事があるのですが、今は全く亡佚してわかりません。

今日に傳へられたものは、まさに「古事記」で、天武天皇御卽位の十年に稗田阿禮をして皇位の繼承及び先代の舊事を口授せしめましたが、途中天武帝が崩ぜられた爲に、一時中止せられ、後、太安麿が阿禮の口授に基き元明天皇の和銅五年に、勅に依つて撰進したものであります。

その後八年を經て、養老四年に舍人親王は「日本書紀」





を編まれましたが、これは、全くの漢文で、その當時は「古事記」が純漢文でなかつた事を憾んで、特に漢文を用ひられたのであります。勿論、修史の體裁、記事の正確などに至つては、日本書紀の方がその體をなして居るのではありますが、國文學といふ合場から見る時は、古事記の價値は非常に重大なものとなります。日本書紀が歷史であるとすれば、古事記は文學であるといひたいのです。尠くとも古事記には、文學的要素が十分に含まれて居ります。

特に最も注意せねばならぬのは、古事記にある神話であります。神話は神話で、歷史ではありません。文學です。日本の神話は、もとより太陽神話が中心になつて、それに英雄神話が附隨して居りますが、この神話に殺慘とか、凡て殘忍性の事が少ないのは一の特長といへませう。神話の事は、太古の時代にいふべきでありましたが、それが文字に綴られて文學となつてあらはれたのが、此の時代ですから、特にこゝに注意を促したのであります。古事記は、曩にも度々說いた通り、安麿阿禮の力になつたとは、申すものゝ、その語りつぎいひ傳へた所は

實に國民全體のものでありますから、特に神代の部分は一の國民詩——國民的作品——とも申すべきで、今日現存する我邦の最古の書物であるといふ點、主として國語を以て綴られた點、記事最も卒直である點、などから、私はこの「古事記」が今日も國民的讀物として、廣く一般に讀まれる事を希望して止みません。詞は日本語です、文字を除き去れば、吾々に最も親しい、わかり易い文章であるのは、一旦古事記を手にした人の必ず感ずる所でありませう。こゝに須佐男命の一段を抄錄します。

こゝに速須佐之男命　白し給はく　然らば天照大神に白して　罷りなむと白し給ひて　乃ち天に參上(マキ)ります時に　山川ことごとに動み　國土みな震りき。

こゝに　天照大御神　聞き驚かして　あが那勢(ナセ)の命の上り來ます故は　必ず善(ウル)はしき心ならじ　我が國をうばはんと思ほすにこそと　のり給ひて　卽ち御髮(ミカミ)を解き　みみづらに纏かして　左右のみみづらにも　御髮(カヅラ)にも　左右の御手にも　みな八尺の曲玉の　五百津(イホツ)の御統(ミスマル)の珠を　纏き持たして　背(ソビラ)には　千入(チノリ)の靫(ユキ)を負ひ　五百入(イホイリ)の靫(ユキ)を附け　又いつの高鞆を取り佩(オ)ばして　弓腹(ユバラ)振り立てゝ　堅庭は　向股(ムカモモ)に踏みなづみ　沫雪なす　蹴(ク)ゑはらゝかして　いつの男たけび　踏みたけび





て　待ち問ひ給はく　など上り來ませると　問ひ給ひき

有名な傳說「稻羽の白菟」の段は

八十神各稻羽の八上比賣を婚はんの心ありて　共に稻羽に行きける時に　大穴牟遲の神に俗(フクロ)を負せ　從者(トモビト)として率て往きき。こゝに氣多の前(サキ)に到りける時に　裸(アカハダカ)なる菟伏せり。八十神その菟に云ひけらく　汝爲(イマシセ)せむは　この海水(ウシホ)を浴(ア)み風の吹くに當りて　高山の尾の上に伏してよといふ。かれ其の菟　八十神の敎ふるまゝにして伏しき。こゝにその鹽の乾くまにまに　其身の皮　ことごとに風に吹き烈かえしからに　痛みて泣伏せれば　最後(イヤハテ)に來ませる大穴牟遲神　其菟を見てなぞもいまし泣き伏せると問ひ給ふに　菟白さく　あれ隱岐の島にありて　此國に渡らまく欲りつれども　渡らむよし無かりし故に　海の鰐を欺きて言ひけらく　吾といましと族(トモガラ)の多き少きを比べてむ。かれ汝は　其族のありのことごと率て來て　此島より氣多の前まで　みな並(ナ)み伏しわたれ。われ　その上を踏みて走りつゝ數(ヨ)み渡らん。こゝに我族と何れ多きといふことを知らむ。かくいひかしかば　欺かえて列(ナ)み伏せりし時に　吾其上を踏みて　數み渡り來て　今地(ツチ)に下りむとする時に　吾　汝は吾に欺かえつと言ひをはれば　卽いやはしに伏せる鰐　我を捕へて　ことごとに我衣服(キモノ)を剝ぎ

き。此に因りて泣き患ひしかば　先だちていでましゝ八十神の命もちて　潮を浴みて風にあたり　伏せれと教へたまひき。かれ教のごとせしかば　我身ことごとにそこなはえつと白す。こゝに大穴牟遲神　その菟に教へ給はく　今疾(ト)くこの水門(シナト)に往きて　水もて汝(ナ)が身を洗ひて　卽ち其水門(ミナト)の蒲(カマ)の花をとりて　敷き散して　其上につい轉(マロ)びてば　汝が身もとの肌のごと　必ずいえなむものぞと　教へ給ひき。かれ教のごとせしかば　其身もとの如くになりき。これ稻羽の素菟といふ者なり。

この二例に就いても、古事記は決して難讀なものとは云へません。寧ろ、今日の國民に親しみ易い文章でありませう。

**12. 風土記と氏文**　風土記は、元明天皇の和銅六年、卽ち古事記が奉られた翌年、畿內及び七道に令して、各地の地誌と由來とを募られた事があります。その令に應じて、各地から產物の品目、土地の沃堉、山川原野の名稱の由來、古來相傳の舊聞異事などを記して、献じたものが各地の風土記であります。古事記が中央政府を中心にした、中央史であると見れば、これは各地方の地





方志といふ事が出來ませう。

これは、各國から奉つた筈ですから、數多くあつたに相違ありませんが、今はその多くが散逸してしまつて

播磨風土記

が最も古いもの、次いでは常陸出雲の風土記が殘されました。丹後、肥前、豐後のものなども、ほゞ同時代の作でありませうが、皆一部分が殘されたのみで、完全なものは、前記の出雲風土記一つであります。

文體は各地各樣ですが、大體は漢文で、そのうち古記の舊文などを記した所は、國語そのまゝを寫したものがあります。これは古事記の文體と同樣のやり方です。

出雲風土記國引の段

意(オウ)字と名づくる故は　國引きませる　八束水臣津野(アツカミヅオミツヌ)の命ののり給はく　八雲たつ出雲の國は　狹布(サフ)の稚國(ワカクニ)なるかも　初(ハツ)國少さく作らせり　かれ作り縫はんと　詔り給ひて　たくぶすま新羅のみ崎を　國の餘ありやと見れば　國のあまりありと詔りたまひて　童女(オトメ)の胸鉏(ムナスキ)とらして　大魚(オフナ)のきだ衝(ツ)き別けて　はたすすきほふり分けて　三(ミツ)よりの綱うちかけて　霜(シモ)葛(ツヅラ)くるやくるやに　河船のもそろもそろに　國來國來(クニコクニコ)と　引

き來縫へぬ國は　去豆(コヅ)の打絶(ウチタエ)より　八穂爾杵築(ヤホニキツキ)のみ崎なり。かくて　かため立てし加志は　石見國と出雲國との堺なる名は佐比賣(サヒメ)山是なり。又持ち引ける綱は　園の長崎なり（中略）今は國引き訖へぬと　詔り給ひて　意宇(オウ)の杜に　御枝(ミフエ)立てゝ　意惠(オエ)と詔りたまひき。かれ意宇といふ。

この國引の一段は、見やうによつては、神功皇后が三韓征伐、豐臣秀吉が朝鮮征伐、近くは日清日露日獨の諸戰爭によつて、我邦の領土が漸々に增加して行く事にもとれます。國を引寄せるといふ事は、餘つた土地を貰ふ事で、今日南洋の一部にさへ、旭の御旗が輝く有樣は、やはりこの古の國引の精神を體して、吾々が努力——國家の爲に——して居るのではありますまいか。

**氏文**　とは、一家族の歷史ともいふべきもので、祖先の功業から、家系を錄したものであります。その書き方は、漢文のなかに、まゝ國語を寫した假字を交へ、別に助辭を細書にした方法で、恰も「古事記」の文と宣命祝詞の書き方とを兼用した趣があります。この氏文も數多くあつたものに相違ありませんが、今は高橋氏文といふものゝほか悉く散佚してしまひました。





**13. 當時の漢文**　こゝに當時の漢文も、また日本の常用文學となつて居りましたものですから、所謂廣い意味の國文學史からは、全く除き去る事の出來ないものであらうと思ひます。

日本書記と懷風藻とは、文と詩とを代表する二編で、如何に日本人が、漢文を自由に使用したかを知る爲に、その文例を次に掲げませう。

日本書紀

日本書紀（現存最古の寫本）

日本紀　神代

古　天地未レ剖。陰陽不レ分。渾沌如二鷄子一。溟涬而含レ牙。及下其清陽者薄靡而爲レ天。重濁者淹滯而爲レ地。精妙之合搏易。

重濁之凝場難。故元先成而後定。然後神聖生二其中焉一。

懐風藻。

淡海朝大友皇子　五言　侍宴　一絶

皇明光日月　帝德載天地　三才並泰昌　萬國表臣義

大宰大貳正四位下紀朝臣男人　七言　遊吉野川

萬丈崇巖削成秀　千尋素濤逆折流　欲訪鐘池越潭跡　留連美稻逢槎洲　美稻一作茅渟

從三位中納言兼中務卿石上朝臣乙麻呂

五言　怨夜閨情

他鄕頻夜夢　談與麗人同　寢裏歡如實　驚前恨泣寒　空思向桂影　獨坐聽怨鳳　山川嶮易路　展轉憶閨中

## 第四章　平安朝時代

**1. 時代の概觀**　平安の奠都は、紀元千四百五十四年——桓武天皇の延曆十三年。——賴朝が總追捕使となつたのが、紀元千八百四十六年——後鳥羽天皇の文治二年。——此の間凡そ四百年——四世紀——の事となります。政治上には、奠都或は開幕を以て、時代の變遷に區劃を立つる事が出來ませうけれども、文藝の事は明か





に政治上の區劃と同一の變化をして行くわけでは無いのであります。奈良の都を去つて、山城平安の京が創められたからと申して、文藝界の萬事が、土地と共に直ちに變動したのではありません。但し、國民が周圍の所謂雰圍氣に依つて、政治上の變化と共に、趣味上感情上の變動を、漸次に進めたには相違ないのです。ですから、平安朝時代の文學として、その特長を發輝しはじめたのは、桓武平城の二帝を過ぎた、嵯峨天皇の弘仁時代からはじまるものと見たいのであります。

一言にして平安朝をいへば、これ泰平無事の時代。時に兵を動かす事が無かつたでもありませんが、それはほんの小さい事で、世は滔々として安逸遊墮に耽つたと、云へませう。然し、四百年間安逸の最後は、源平二氏の爭鬪といふ事になつて、世は修羅の巷と化し流石に時めいた貴族の影は極めて薄いものとなりました。蓋し國初建國の當時、大帝神武天皇に從つて辛苦艱難、西九州の果から、中央の好位置大和を占むる迄に、國民は幾多の辛い經驗を味つたのであります。前に見た奈良朝以前及奈良朝の時代は、まだ、この苦心爭鬪の影が消えませんでし

た。大伴建部の兩氏といはず、こぞつて武を練り刀を磨いたのであります。それが、この期平安朝となりますと、悉く遠祖の武功は、昔の思出とのみなりまして、劍はあれども金銀に輝き、鎧はあれども赤に青に色彩られたものとなりました。恰も家康が千軍萬馬のうちに得た天下は、幕末に至つて或は犬公方を生み、或は腰拔武士が町人に辱かしめらるゝと、同じ經過をとつて居ります。歴史は繰返す。寄せては返す磯の波。さればこそ將來の爲に、過去を知る必要が起るのであります。

圓滿なる人格は、理性と感情との平靜調和になり立ちます。これと同じく、國民の理性と感情とが整正調和した時が、最も圓滿なる一國文化の發達を見る時でなければなりません。これは、或は文武兩道の均等といふ事にもなりませう。これを以て平安朝を通觀する時には、果してどんな感がありませうか。

**2. 文事偏重と藤原氏**　平安朝四百年の政治を左右し、國民を率ゐて、日本國を肩に立つたものは、申す迄もなく藤原氏の一家一門であります。仰、藤原氏といふ家は如何なる家でありませう。奈良朝時代の初期に





は、まだ少しの勢力もない家門が、鎌足に至つて頓に名聲を擧げ、一たび皇室との姻戚關係を生ずるに至つて、その威望旭日の昇るが如く、遂には人もなげに打振舞ふ有樣に至つたのであります。御堂關白道長をして

このよをば　わがよとぞ思ふ　望月の　かけたる事も　なしと思へば

と叫ばしめました。而もこの藤原氏は、代々武を以て朝廷に仕へたのではなく、古來文臣の家門であります。かくの如き勢望を以て、自由に天下に臨んだ一門が、文臣の出であつて、而も世は泰平無事時つ風枝を鳴らさぬといふ有樣である以上、世俗は勿論風流風雅の文事に走るは、勢の當然たる所でありましたらう。大伴建部の二氏は既に哀へ、源平兩氏の如きも、遠く都を去つて、地方にその勢を養うて居たのも、無理のない事であります。

文事を後にし、武事を先んじた風習は、建國以來武を以て起つた我が日本國の方針でありまして、上下二千五百年、武事偏重の國家と稱してもよいくらゐの國柄でありますが、こゝ平安朝の世の中のみは、反對に文事を重んじて、理性は其影をひそめ、感情いたづらに高ぶつて

歌文をよくせざる者は、貴族の交をゆるさず、管絃を解せざるは、宮廷に近よるべからずといふ有樣でありました。これには新都新政の、執つて以て則とした、支那唐朝の文化といふものも、また影響して居るに相違ありません。唐時代の人材登用は、一に詩文にあつたのは申すに及ばず、全朝を通じて詩文萬能の時代と申しても差支はないのであります。されば、此の期に興隆した漢詩文の如きは、實に立派なもので、この漢文學と相並んで國文學も、また燦爛たる花を咲かせたのであります。

**3. 貴族社會** 平安朝の社會は、鎌倉、室町、江戸、の各時代を通じて、それが武士の社會であつた如く、全く宮廷を中心とする貴族の社會でありました。江戸時代に至つて町人——庶民——も、また文藝に遊び、文化の光に浴したのでありますが、此の期間の地方庶民は、あれども無きが如き有樣で、政治も文敎も、貴族を離れては無かつたと申せます。この勢力を有した貴族は、それなら果してどんな生活を續けたものでありませうか。

財政上には、地方に莊園を占有して、收入の增加を計り、宮廷に入つては、初のうちこそ他の部族もありま





たが、後には、誰爭ふものもなくなつた爲に、同族相伐つ事を、これ事として、遂には叔姪相敵視し、兄弟檣に鬩ぐ有樣とさへなつたのであります。大臣攝政關白は人臣榮達の最上であります。而もこれを得るには、皇室の外戚となるより、他に途がありませんから、女兒を產む事が第一の要件で、これを後宮に入るゝのが榮達の手段となるのであります。娘を持つ親は爭うて女御更衣に進め、なんとかして官位を得んものと競ふ心は、あからさまに當時の物語小說乃至歷史にさへ描かれて居ります。

人力を以て盡すべからざるを願ふからには、勢ひ神佛の加護へと進むのは人情の常でありますから、三世因果の宿命說にかられて、こゝに又加持祈禱といふ事が流行しました。これを以ても、如何にその日常生活が優柔墮弱であつて、少しも剛健勇壯の風が無かつた事が了解出來ませう。

**4. 女流文學者** 前述の次第に依つて、後宮の勢力といふものは、此の世の中に非常な位置を占めた事は、想像に難くありますまい。一方、文事を以て人材の計器としたのでありますから、才媛は殿上に走つて、己

が仕ふる女御に光彩を放たしめんとしました。紫式部と清少納言とは、既に誰も知る所で、世はたゞ花やかな櫻花の滿開に醉うて、その散るの早き夕を知らなかつた狀態です。女子は一般に情にもろく、涙に早く、感情に走つて、思ふまゝの一圖に進まんとする缺點がありますが、かく女流文學者の榮えた、平安朝の世の中は、貴族社會をこぞつて、恰もこの風潮に乘せられた觀があります。

國文學史を通じて、平安朝の前後に、男子をして後に瞠若たらしめた才媛が無いでもありませんが、特に此の期に注目すべきは、これら後宮にあつた婦人の文學であります。蓋しこれらの文學が、持囃されたといふものは、前に述べた時代風潮の然らしむる所で、一世は擧げて婦人の文學を觀迎したのでありませう。

**5. 平安朝の文學** 漢文の隆盛は、前期から此の期に及びましたが、醍醐天皇の朝に遣唐使が廢せられて、唐土心醉の熱がさめかかつて、國文學は非常な勢力と發達とを見るに至つたのであります。散文には

物語　隨筆　日記　紀行





の如きもの、韻文には和歌はもとより

今樣　神樂　催馬樂

のやうなものも生れました。その內容に至つては、儒佛二敎の主義が、よく融合調和されて、在來の思想とともに外國語の輸入によつて、豐富になつた文學に、面白くあらはれて居ります。外國語の影響は、自然國語の音韻或は組織の上に、多少の變化を及ぼして、これを奈良朝に比すれば、更に複雜の度を高めたものがあります。片假名は前期の末に發明せられたのでありますが、こゝにまた平假名が生れて、益國文の上に便宜を重ねたのであります。卽ち、此の時代、既に、全く假名のみを以て綴つた、純粹の日本文學が生れた事は、特別の注意を拂はねばなりません。平假名の發明は「かながき」の美を生んで、平安朝若くはそれに近い「假名書き」の名手を澤山今日から見る事が出來ます。

**6. 歌謠** 嵯峨天皇の弘仁年間を中心にして、漢文學は我邦に最も盛になりまして、國文はその爲に影をひそめたやうに見えますが、淸和天皇の頃から、韻文に於ては特に和歌の復興を見るに至りました。此の時に出た

歌人は

僧遍照　文屋康秀　僧喜撰　小野小町　在原業平　大伴黒主

などが有名で、所謂六歌仙と稱せらるゝ人々であります。

宇多天皇の寛平頃からは、益和歌の道が興隆しまして、貴族の子弟、後宮の才媛、競うて短歌を詠じ、月雪の詠を樂んだものであります。されば、これらの人々の間に、遊戯的の諷詠が行はるゝに至つて、題詠——題を出して、その題のもとに歌を詠ずること——が流行し、轉じて歌會——當時は歌合というたやうです——が催されて遂には「判」——優劣を決すること——が起り、上古の歌謠のやうに、事物に觸れてその實感を詠ずる——自然の——といふ分子が尠くなりました、古歌の雄壯質實は、やはりその生活から來るので、此の時代の歌が、何となく纖弱華麗に見ゆるのは、生活と社會から及ぼしたものである事は申す迄もありせん。

題詠といふ事は、萬葉集時代には極めて、尠かつた事でありますが、此時代以後の風習は、今日にまで及んで





居ります。歌人等が相集つて題を出し、こゝに即興の歌を詠ずるといふ事は、必ずしも名吟を得ないといふ事ではありませんが、風物に接して、其所に情緒のあらはれるものに比して、文學的價値は、果してどれだけありませうか。後には「歌人は居ながらにして、名所を知る」と誇つた事さへありますが、實感と、想像空想の感覺とは到底全然別固のものでありませう。

さて、醍醐天皇の延喜頃からは、益和歌が盛になりまして、天皇も此の道に深く心を傾けさせられ、こゝに勅撰集といふものが、はじめて出來たのであります。「古今和歌集」がそれです。次で、村上天皇は「和歌所」といふものを、禁中の梨壺に設けさせられて、時の歌人を集められ萬葉集の研究をせしめられました。また同時に同じく勅命を以て「後撰和歌集」を撰ばしめられまして、宮廷と和歌とは離るべからざる關係となり、この以後この期に勅撰集の編まれたもの五部を數ふるに至りました。このほか、私人が撰んだ歌集も多くありますが

紀貫之　新撰和歌集

藤原清輔　續詞華集

藤原公任　金玉集

などは有名なものです。

かくの如く、和歌は非常な勢を以て、平安朝の貴族社會に流行したのでありますが、その流行は一面同時に範疇と束縛とを招いて、自然に歌の方式といふものが、やかましく曰はれるやうになりました。これは一方から申せば、所謂「歌學」「歌論」であります。上古は人も詞も素樸でありますから、其所に方式の必要がありませんでしたが、世の中が複雜になり、人智が多樣に亘るに從つて、段々或意味の束縛が加へられるのは自然です。平安朝の貴族が、その勢力爭の爲に黨同伐異を事としたと同樣に、和歌の上にも、また各、門戸を立てゝ、他人の入るを好まない風を生じたのであります。これが甚しきに至つては、遂に和歌は、或一種の模型に從つて作り出される機械的技術に、近いものとなつてしまつたと申せば申せぬ事もありません。

藤原公任　新撰髓腦

源俊頼　無名抄

藤原基俊　悅目抄





藤原清輔　奥儀抄　袋草子

などは、和歌の形式を論じたものであります。

なほ、この隆盛を極めた和歌——短歌——三十一文字——のほかに、異體の歌が生れました。

旋頭歌　連歌　今樣

神樂歌　催馬樂　朗詠

などゝいふもので、旋頭歌は五七七五七七の調子からなり、連歌は短歌一首の上下句いづれかを或人が詠めば、次の句を他の人が添へ加へたもので、今樣は、七五音の聯句四節からなるものであります。今樣と申すのでありますから、その名からも、舊樣を破つて新しい試をなしたといふ事でせう。

神樂歌は、神祇を祝ふ爲に歌うたもの。催馬樂は、俗謠を唐樂の譜節に合せて謠うたもの。朗詠は、詩賦に曲節をつけて吟じたものです。これらは音樂を主としたもので、たまたまその文字が殘つたものでありますから、所謂歌曲といふもので、催馬樂、朗詠、今樣は當時これを總稱して郢曲とも唱歌とも申しました。

今その數例を示せば、

神樂歌催馬樂歌

飛鳥井に　飛鳥井に　宿りはすべし　影もよし　影もよし　御水(ミモヒ)も清し　御馬秣(ミマクサ)もよし

伊勢の海の　伊勢の海の　清き渚の　潮干(シホガヒ)に　莫告藻や摘まむ　貝や捨はむ　玉や拾はむ

我家(ワイヘン)は　幄帳(トバリチヤウ)をも垂れたるを　大君來ませ聟にせむ　御肴(ミサカナ)に何善けむ　鰒(アハビ)　榮螺　甲羸(カセ)　善けむ　鰒　榮螺甲羸よけむ

今　樣

蓬來山には　千歳ふる　萬歳千秋　重なれり　松の枝には　鶴巣くひ　巖の上には　龜遊ぶ。

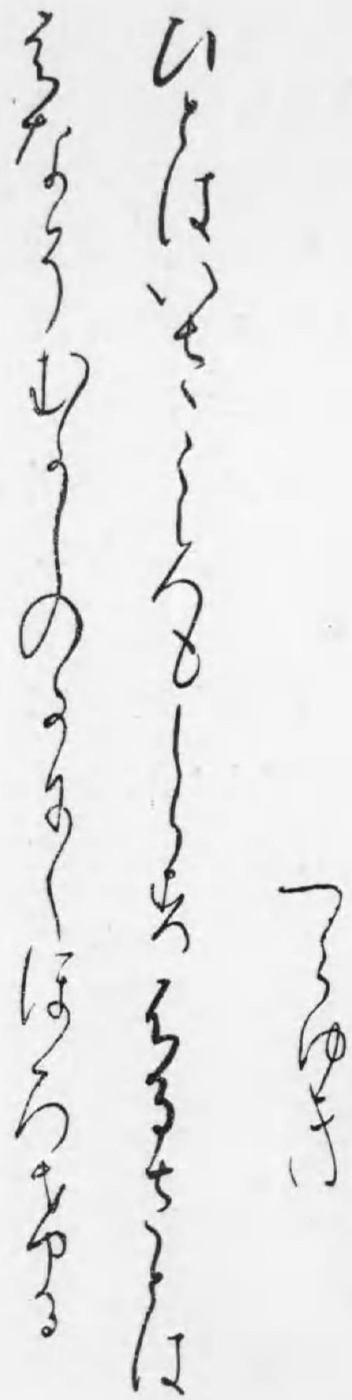
古き都を　來てみれば　淺茅が原どぞ　なれりける　月の光は　くまなくて　あき風のみぞ　身にはしむ。

**7. 古今集**　醍醐天皇の延喜五年（紀元一五六五）勅を奉じて　紀貫之　紀友則　凡河内躬恒(オホシカウチミツネ)　壬生忠岑等が撰んだのが古今和歌集であつて、萬葉集に入らなかつた古歌と、その以後の名歌及び編者等の自詠などが載せられてあります。全部二十卷。四季　賀　離別　羇旅　物名　戀　哀傷　長歌　旋頭歌　俳諧歌　などに分類せられ。歌の總數千百首あります。

集を通じていふべき事は、萬葉集に比して儒佛二敎の







傳貫之筆高野切（古今集）

思想がよく融合せられて、恰どそれが日本化した風にあらはれ出て居る事と、雪月花の風物を主とし、若しくは男女間の戀愛を抒べたものゝ多い事とで有ます。

花を見てその散り易きを感じ、月を見て無常を歎くといふのは、まさに佛敎から來た因果宿命の感念に生れたもので、これは今日までも、わが國民性のなかに深く入り込んで居るのであります。戀歌は、當時貴族の男子が、自由奔放な生活をした當然の産物で、當時の男女間の關係は、到底今日のやうに整然たるものではありません。理性より來

る人間生活の節制、社會の制裁は、發達も致して居りませんでしたらうし、またそんなものは、所謂權力のもとに、しいたげられて居たのであります。婚姻の形式などが、今日と甚しく異つて居る點、女子の男子に對して持つ感想信念の相違。いづれも、女子をして戀の切なきを喞たしめるに十分であつたやうであります。

古今集中の歌人は、その數非常に多いのですが、中に有名な人々を擧ぐれば、かの六歌仙をはじめとして、

在原行平　素性法師　伊勢

などが出色の人物であり、なほ古今集四人の撰者もまた名歌の作者たるに疑ありません。然し乍ら、これらの中で、最も傑出した人をもとむれば、それは在原業平と紀貫之との二人であります。

古今集を讀むには

加茂眞淵　古今集打聽

本居宣長　古今集遠鏡

近代のものでは

中村秋香　古今集詳解

などがあります。





**8. 在原業平**　業平は平城天皇の皇子、阿呆親王の第五子、母は桓武天皇の皇女、兄行平と共に在原の姓を賜つて人臣の列に降つたのであります。官に仕へて近衞權中將に進みましたから、世に呼んで在五中將とも申します。當時藤原の一門は榮えに榮えて、自餘の門族はみなその後塵を拜するといふ有樣でしたから、王家の出たる業平兄弟すら、常に轗軻不遇に過したのであります。殊に業平は、その妻女の姻戚にあたる惟喬親王が文德天皇の第一皇子であらせられるにも係らず、皇儲の位にも立ち給はずして、洛北小野の山莊にわび住をして居られるのを見ては、業平の性質として、同情の念やみがたく心はいつも鬱々として居たに相違ありません。業平としいへば、容姿閑雅、操行放縱。のつぺりとした色白の美男子を想像させるやうにもなつて居りますが、彼の心中は決してそんなものではなく、寧ろ一世が浮華輕佻に流れてゆくのを慨して、皮肉の行動に出たものであらうとさへ思はれます。

業平の歌は、全く天成の麗句でありまして、苦心もいらず練磨もなく、天眞の流露にまかせて、感ずるまゝに

歌となつたものであります。ですから、一面「心餘りて詞足らず」と評さるゝ點もありませう。然し、餘韻深く艶麗の想は、實に何人も大詩人を以て許すに異論はありますまい。

伊勢物語は、その名、物語といふにとらはれて、小說とのみ思はるゝ向もありますが、實は歌物語でありまして、業平が世相に感じて吟じた數首は、自然物語の體をなしたといふ事が出來ます。業平の歌を知らんとする人は、先づ伊勢物語を讀む必要があります。

藤井高尙　伊勢物語新釋

は德川時代の產物。近世のものでは

今泉定介　伊勢物語講義

などがあります。こゝに業平の歌數首を揭げます。

月やあらぬ　春や昔の　春ならぬ　我身ひとつを　もとの身にして

飽かなくに　まだきも月の　かくるゝか　山の端にげて　入れずもあらなむ

人知れぬ　我通路の　關守は　よひよひごとに　うちもねななむ





世の中に　たえて櫻の　なかりせば　春の心は　のどけからまし

思ふ事　いはでぞたゞに　やみぬべき　我とひとしき　人としなければ

いとゞしく　過ぎにしかたの　戀しきに　うらやましくもかへる波かな

忘れては　夢かとぞ思ふ　思ひきや　雪ふみわけて　君を見んとは（惟喬親王を小野にたづねて）

**9. 紀貫之**　父は望行、祖父は長谷雄。歌人と學者との家に生れて、延喜中、御書所頭となり、後土佐守に進んだ事は、その著「土佐日記」に見えて居ります。木工權頭に昇つて從四位下に叙せられ、天慶九年に生を卒りました。

貫之の性質は、才氣煥發といふよりは、孜々として止まずといふ方であつたらしく思はれます。その作歌の態度は、一句一語も推敲熟慮を經なければ發表出來ないといふ有樣で、つとめて想と詞とを合致せしめた跡が見えます。これらは、業平の自由奔放なのと全く正反對で、貫之は穩健雅正を特長とし、業平には天眞爛漫を大とせね

ばなりますまい。

貫之の歌道に對する抱負は、有名な古今集の序文に十分あらはれて居ります。

今の世の中、色につき、人の心の花になりにけるより、あだなる歌、はかなきことのみ出でくれば色好みの家に埋木の人知れぬこと丶なりて、まめなる所には、花薄ほに出すべきことにもあらずなりにけり、その始を思へば、か丶るべくなむあらぬ。

というて、歌の本旨をほのめかし、當代の墮落を慨して歌とのみ思ひて、そのさま知らぬなるべし。

というて居るのは、深重謹嚴の態度を以て、滿全の歌道興隆を希うたものであります。なほこの序文は、後にこれを抄錄するとして、こゝには彼の作歌數首を見ませう。

ひとはいさ　心も知らず　ふるさとは　花ぞむかしの　香ににほひける

逢坂の　關の清水に　かけ見えて　今や曳くらむ　望月の駒

青柳の　糸よりかくる　春しもぞ　亂れて花の　ほころびにける

川風の　涼しくもあるか　打ちよする　なみと共にや　秋はたつらむ





結ぶ手の　雫に濁る　山の井の　あかでも人に　別れぬるかな

あふ事は　雲井はるかに　なる神の　音にきゝつゝ　戀ひわたるかな

明日知らぬ　我身と思へど　暮れぬ間の　けふは人こそ　かなしかりけれ

問ふ人も　なき宿なれど　來る春は　八重葎にも　さはらざりけり

櫻ちる　木の下風は　寒からで　空にしられぬ　雪ぞふりける

これを讀めば、直ちに業平と貫之との性格の相違が感得せられるでせう。又、前期奈良朝の詠に比べて、歌詞が頗る優美になつた事も考へられます。

**10. 他の諸家**　業平と貫之とのみを以て、古今集時代の歌人を代表せしむるのは、餘りに當を得ませんから、なほ數首をあげて、當時の作風を窺ひませう。

僧遍照

花の色は　霞にこめて　見えずとも　香をだにぬすめ　春の山風

淺みどり　糸よりかけて　白露を　玉にもぬける　春のやなぎか

はちすばの　濁にしまぬ　心もて　何かは露を　玉とあざむく

小野小町

花の色は　うつりにけりな　いたづらに　我身世に經る　ながめせしまに

うたゝねに　戀しき人を　見てしより　夢てふものは　たのみそめてき

色見えで　移ろふものは　世の中の　人の心の　花にぞありける

在業行平

立わかれ　いなばの山の　みねに生ふる　まつとしきかば　今かへりこむ

わくらはに　とふ人あらば　須磨の浦に　藻しほたれつゝ　わぶと答へよ

菅原道實

東風吹かば　にほひおこせよ　梅の花　あるじなしとて　春を忘るな

君が住む　宿の梢を　行くゆくも　かくるゝまでに　かへり





見しはや

海ならず　たゞよふ水の　底までも　清き心は　月ぞ照らさむ

大河内躬恒

憂きことを　思ひつらねて　かりがねの　なきこそわたれ　秋の夜な夜な

いも安く　ねられざりけり　春の夜は　花のちるのみ　夢に見えつゝ

壬生忠岑

久方の　月のかつらも　秋はなほ　紅葉すればや　てりまさるらむ

山里は　秋こそ　ことにわびしけれ　鹿のなくねに　目をさましつゝ

松の音に　風の調を　まかせては　龍田姫こそ　秋はひくらし

紀友則

君ならで　誰にか見せむ　梅の花　色をも香をも　知る人ぞしる

久方の　光のどけき　春の日に　しづ心なく　花の散るらむ

五月雨に　もの思ひをれば　郭公　夜ふかくなきて　いづち行らむ

伊　勢

見る人も　なき山里の　櫻花　ほかのちりなん　後に咲かまし

**11. 古今集以後**　古今集の撰は、たしかに和歌の興隆促進の氣運を助けて、その後勅撰の歌集は續々撰ばるるに至りました。今この期間に出來た勅撰集と、その撰者とを掲げますならば

後撰和歌集（源順・大中臣能宣・清原元輔・紀時文・阪上望城）

拾遺集（藤原公任）

後拾遺和歌集（藤原通俊）

金葉和歌集（源俊頼）

詞花集（藤原顯輔）

千載集（藤原俊成）

であります。このうち古今・後撰・拾遺の三集を呼んで「三代集」と名づけます。

**後撰集**　は古今集の撰後四十六年を經て、村上天皇の





天暦五年に出來ました。天皇が源順等を召しまして、萬葉集の研究をなさしめられた序に出來たものです。古今集と同樣二十卷、部門もほゞ同樣であります。內容は、やはり古今集にも申した古歌を載錄して、作者もほゞ相似て居りますが、この集は、撰擇の主旨として、歌の姿、卽ち歌詞の整調を重んぜず、心卽ち思想——藝術的——を本とした爲に、體裁は古今集に比して整然たるものがありません。

**拾遺集**　これは一條天皇の朝に、公任が撰んだものと、傳へられて居ります。撰擇の方針は、歌調を主とした所、古今集に倣うたのでありませうが、而も到底古今集には及ばないやうであります。

其他の勅撰集は、何れも大同小異、特にいふべき節もありません。たゞ後の金葉、詞華、の兩集は、ちよつと特長を帶びて、これを總評すれば纖巧かつ中正を得たものが多いと云へませう。撰集の體裁も、作歌の內容も、要するにその時代と共に、たゞ舊態を墨守するに止つたのは、止む得ぬ自然の勢で、次期の新古今集に新人が旗を飜して起つた迄は、たゞ暗中に蠢動しつゝあつた狀態

であります。

古今集以後勅撰集關係の歌人で、特に記すべき人々は

藤原公任　源俊頼　藤原俊成

の三者でありませう。なほこのほかに當時の歌人としては

大中臣能宣　源順　平兼盛　曾根好忠　清原元輔　源經信　大江匡房　藤原顯輔　藤原基俊　源頼政　紫式部　清少納言　和泉式部　赤染衛門　相模　大貳三位　平忠度　西行法師

など多數にあります。

**12. 公任　俊頼　俊成**　三者何れも堂上の出で而も高位高官にあつた人、時こそ違へその境遇も經歴もほゞ相似て居ります。公任は小野宮太政大臣實頼の孫で、四條大納言と呼ばれました。

俊頼は公任と同時の經信の子で、堀河、鳥羽、崇德の三帝に歴仕して從四位上右近衛少將に進みました。俊成は御堂關白道長の四世の孫で、皇太后太夫まで進み、後には髪を削つて釋阿と號した人です。

公任は學、和漢に通じて、諸藝一として通せざるなく、





殊にその筆跡の妙は、今日もなほ渇仰の中心となつて居ります。されば、その歌風は穩健優雅、みやびたる大宮人の典型を窺はしむるものといふ事が出來ます。俊頼は苦吟の人でありまして、熟考又熟考、改刪又改刪して後、はじめて人に示したといふ事であります。着想新奇、歌詞頗る溫雅と評したのは、蓋しよく當つて居ります。俊成は、多少覇氣もあつた人でありませう、又當時——平安朝末——歌壇は全く、形式にとらはれて新進の氣風尠く、時代は院政久しきにわたつて、次の源平兩氏が革進の旗風まさに靡かんとする時でありますから、基俊が定めた舊例古格を守つては居るものゝ、全くこれに泥む事をせず、而も清新の調を一世に叫んで、よくその名をなさしめたのであります。俊成の歌道に於ける修養は、初め六條家の門に學び、のち基俊が尙古の風に憧がれ、更にまた俊頼の革進說に動かされたのでありますから、諸流の長所をよく了解して、萎靡沈滯保守一方の當時に、一道の光明を投じました。

藤原公任

春來てぞ　人もとひける　山里は　花こそ宿の　主なりけれ

こゝに消え　かしこに結ぶ　水の沫の　うき世に住める　身にこそありけれ

源俊頼

世の中は　うき身に添へる　影なれや　思ひすつれど　はなれざりけり

鶉なく　眞野の入江の　濱風に　尾花なみよる　秋の夕ぐれ

藤原俊成

過ぎぬるか　夜半の寢醒の　ほとゝぎす　聲は枕に　ある心地して

浦つたふ　磯のとまやの　機枕　聞きもならはぬ　波の音かな

まれに來る　夜半もさびしき　松風を　たえずや苔の　下にきくらむ

昔思ふ　草の庵の　夜の雨に　なみだな添へそ　山ほとゝぎす

**13. 女流歌人**　公任、俊頼、俊成、のほかに、なほ優れた名作がないではありませんが、既に述べた通り大同小異の趣がありますから、これらは略して、こゝにはたゞ女流の作家を紹介しませう。

和泉式部





春霞　立つや遲きと　山河の　岩間をたゝく　音きこゆなり

いかにせむ　いかにかすべき　世の中は　背けば悲し　住めば住みうし

暗きより　暗き道にぞ　入りぬべき　はるかにてらせ　山の端の月

赤染衛門

歸る雁　雲井遙に　なりぬなり　又來る秋も　遠しと思ふに

かはらむと　祈る命は　をしからで　さてもわかれむ　事ぞかなしき

紫武部

世の中を　なに歎かまし　山櫻　花見るほどの　心なりせば

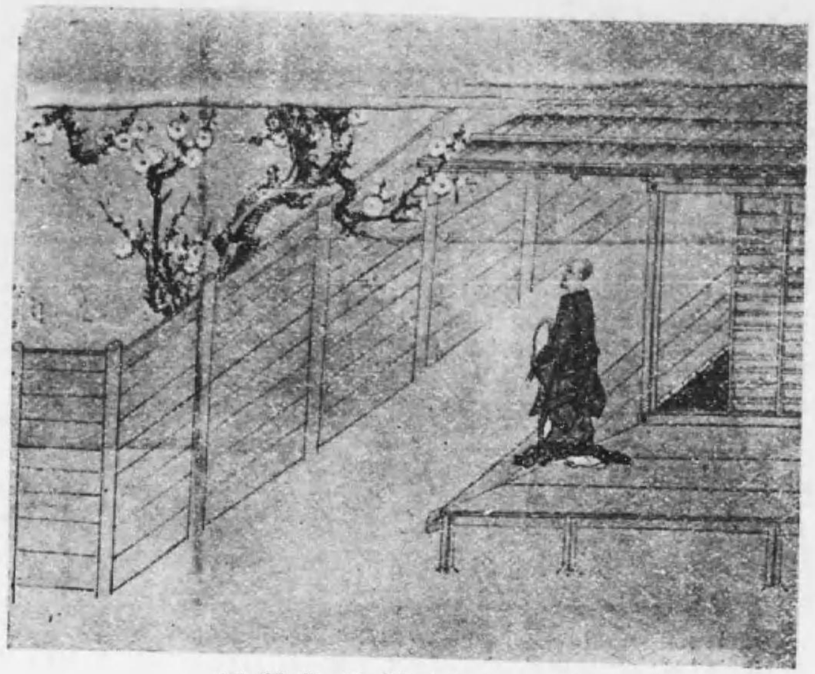
ほとゝぎす　聲まつほどは　片岡の　森の雫に　立ちやぬれまし

清少納言

夜をこめて　鳥の空音は　はかるとも　世に逢阪の　關はゆるさじ

よしさらば　つらきは我に　習ひけり　たのめて來ぬは　誰か教へし

**14. 西行法師**　社會の思想に變動が少なかつた爲



西行物語（繪卷）の一部

に、歌風に新奇の趣があらはれなかつた事は、曩に述べた通りでありますが、これ迄に論じ來たつた諸家は、何れも、その風潮に乘ぜられて、たゞ纔かに、形式上、纖細の技を弄じ、華麗の調を成したに過ぎません。それは同じ時勢に同じ宮殿を中心とした生活の、なす所であります。こゝに全くこれらの人と生活を異にし、物に感じては赤心を吐露し、事に感じては自由自在な詩才を發輝した僧西行があります。西行はもと武門の人で佐藤憲清と稱しましたが、世をはかなんで出家し、一笠一杖風月





を友として、四方を周遊しました。これ既に平安京の小山川に想をやつて居つた堂上者流と相異る所で、その天禀の才は、佛教の素養と相應じて、彼が詠吟は、實に深邃のものがあります。西行の歌集を「山家集」といひますが、これを繙けば、瓢々として世俗を脱した西行の性行は、よく窺はれます。然しながら、西行はもと所謂當時の歌匠ではありません。師匠として立つ心は毛頭無かつたのでありますから、推敲練磨などゝいふ事は、全く顧みなかつたのであります。吾々は「山家集」を讀んで時に景情活躍思はず感吟せしめらるゝものがあると同時に、また頗る平調凡作のものも混淆して居るのを感じます。蓋し、この玉石混淆一長一短が彼れ西行の西行たる所でありませう。

ねがはくば　花のもとにて　春死なむ　そのきさらぎの　望月の頃

吉野山　去年のしをりの　道かへて　まだ見ぬかたの　花を尋ねむ

吉野山　やがていでじと　思ふ身を　花ちりなばと　人や待つらむ

眞菅生ふる　山田に水を　まかすれば　うれしがほにも　鳴く蛙かな

心なき　身にもあはれは　しられけり　鴫立澤の　秋の夕暮

さびしさに　絕えたる人の　またもあれな　庵ならべむ　冬の山里

津の國の　難波の春は　夢なれや　あしのかれ葉に　風わたるなり

道のべの　清水流るゝ　柳蔭　しばしとてこそ　立ちとまりつれ

**15. 散文**　平安朝の散文と見るべきものゝ種類は

物語　歌序　日記　紀行　隨筆　雜史

に盡きます。漢學の奬勵が止んで、假名の流行が廣くなつた平安朝の中期前後は、まさに國文隆盛の時期であります。我國の文章、我邦の文體といふものは、此の時に至つて、はじめて整然たる一體を成したと申しても差支ありますまい。

文體の整理といふ事は、難事業であります。論難提議何れも多少の効果はありませうが、而も歸結する所は、常に文學者——作家——その人の文にあるのでありま





す。明治の初葉、はやく言文一致論が叫ばれましたが、これを大成したのは學者でも政治家でもありません。小說家の手に成効せられたのであります。恰もこれと同樣に、奈良朝以來混沌たる有樣にあつた文脉は、まさに平安朝一流の作家の手によつて、爾來一千年用ひられた和文、そのものを成就せしめたのであります。

物語には、多くの大作がありますが、無名の作家も多いので、うちに源氏物語の紫式部は誰も知る所でありませう。

歌序の筆者としては、古今集序の貫之に優るものはありません。

日記の作者としても土佐日記の貫之。更科日記の菅原孝標の女。紫式部日記の式部。蜻蛉日記の道綱の母。和泉式部日記の式部。

隨筆としては、枕の草子の清少納言。

雜史の著者としては、榮花物語の赤染衞門、大鏡の藤原爲業、などは、平安朝の國文——散文——を論ずる場合に忘れてならぬ人々であります。

和歌の流行、もとより盛大ではありましたが、これは

その韻文としての性質から見る時は、奈良朝否太古から既に我邦に存して居たものであります。たゞこゝに、わが平安朝に至つて物語——小說——總ての散文——を生んで、而もそれが、百花欄漫、後世もはた學ぶ能はずといふ程の產物を持つた事は、實に國文學史上特筆大書すべき事であります。

**16. 語物—竹取物語** 物語のうち、最も古いものは、竹取物語であつて、これが空想を奔せた假作の物語として神話以來、はじめての產物であります。勿論神話とその性質を異にし、萬葉集以來の歌文にも、たまたま小說的の文辭——或はその萌芽——が見えなかつたのではありませんが、こゝにその體をなした、所謂西洋のノベル、ローマンスと比べ得るものは、實に竹取物語がその最初のものであります。竹取物語の大意は、皇族大臣などが、竹の中から產れた月界よりの一美女を娶らうとして、奔走苦心する有樣を描いたもので、滑稽の分子も多く、漢籍・佛典から得た文辭構想もまた少くありません。但しこの時代の物語のうちでは、行文最も簡素。創造時代の產物である事は疑ひなく、その作者も全く不明





になつて居ります。其の一節は

日暮ぬれば、かの寮におはして見給ふに、まことに燕、巢作れり。くらつ麿申すやうに、尾をさゝげて廻るに、荒籠に人を載せて、釣り上げさせて、燕の巢に手をさし入れさせて探るに、物もなしと申すに、中納言、惡しく探ればなきなりと腹立ちて、誰ばかりおほえんにとて、われ上りて探らむと宣ひて、籠に入りて、上りて窺ひ給へるに、燕、尾をさゝげていたく廻るに合せて、手をさゝげて探り給ふに、手にひらめけるものさはる時に、われ物握りたり。今はおろしてよ。翁しえたりと宣ひて、集りてとくおろさんとて、綱を引きすぐして綱絕ゆる。卽ちやしまの鼎の上に、のけざまに落ち給へり。人々あさましがりて、寄りて抱へ奉れり。御目はしらめにて、伏し給へり。人々は御口に水をすくひ入れ奉る。辛うじていき出で給へる。また鼎の上より、手とり足とりしてさげおろし奉る。からうじて、御心地いかゞおほさると問へば、息の下にて、ものは少し覺ゆれど、腰なむ動かれぬ。されど子安貝をふと握り持たれば、嬉しく覺ゆるなり。まづ脂燭さして來。此の貝顏みむと、御ぐしもたげて、御手をひろげ給へるに、燕のまりおける古糞を握り給へるなりけり。それを見給ひて、あなかひなのわざやと、宣ひけるよりぞ、思ふに

違ふことをば、かひなしといひける。

竹取物語については、伊勢物語も、物語の一種ではありますが、既に前に記した通りのものでありますから、こゝには述べない事とします。これに次で出た大和物語も、全く伊勢の體裁に倣うたものであります。

このほか

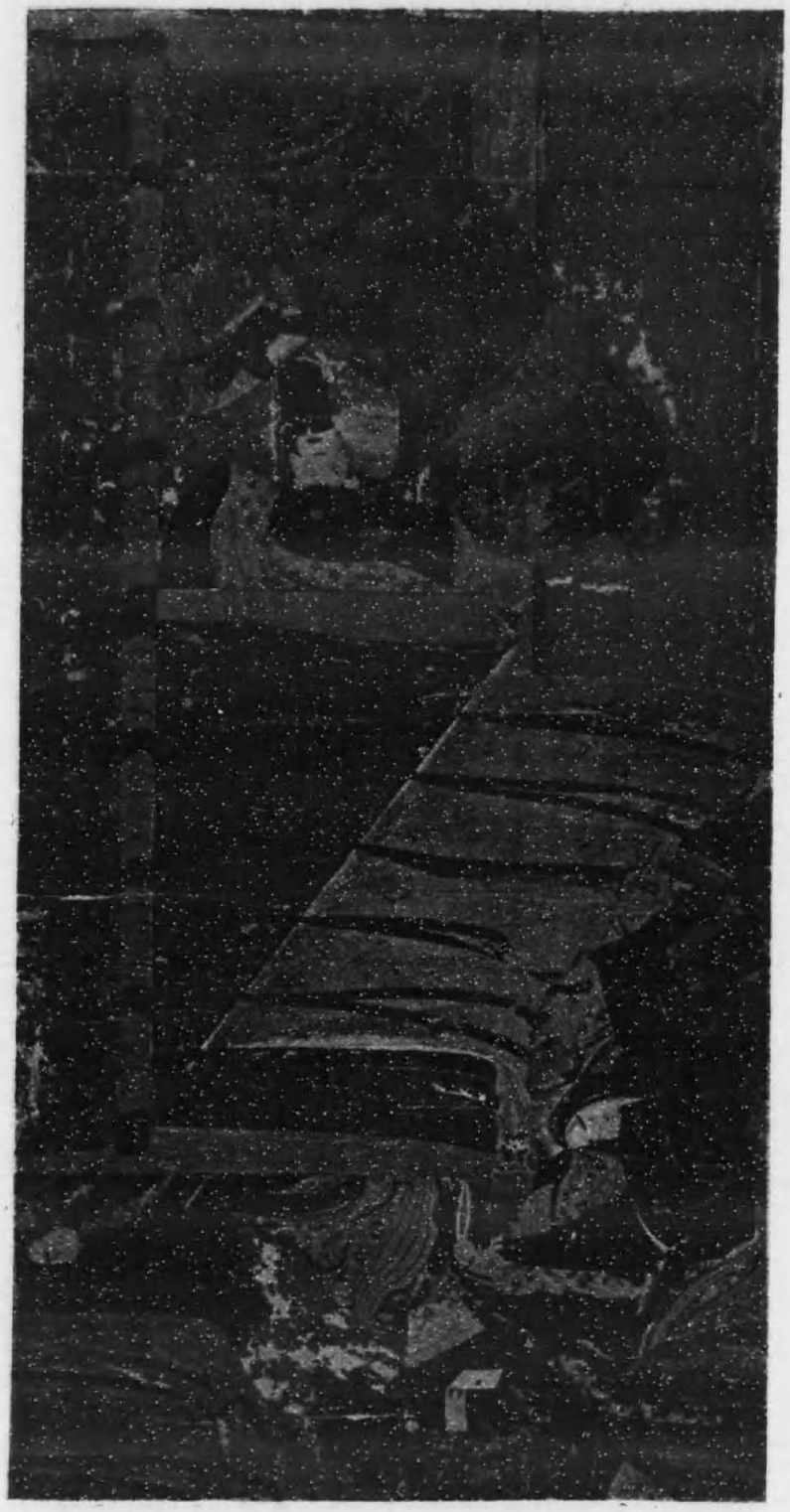
住吉物語　宇津保物語　落窪物語　濱松中納言物語
堤中納言物語　狹衣物語　とりかへばや物語

などもありますけれども、物語中の物語といはれて、國文學中第一位をなすものは、紫式部の源氏物語の右に出づるものはありません。

**源氏物語**　紫式部は、當時の碩學藤原爲時の女で、藤原宣孝に嫁し、一女賢子——世に大貳三位といひます——を擧げました。夫、宣孝の死後、一條天皇の中宮上東門院に仕へて、令名を一世に高くしました。幼時、既に穎敏、强記、長ずるに從つて、漢籍佛書さては在來の國文學一として通せざるなく、その讀書と勉學とは、後に成熟して源氏物語の大作を成したのであります。

源氏物語、五十四帖。その結構は二段に分れて、前の





源氏物語繪卷柏木の一段

四十四帖は、專ら源氏の君と紫の上とを骨子として、ほかに許多の人物と事變とを配合し、後の十帖は、源氏の子、薫大將と匂宮とを主人公として、これに大姫君、中君、浮舟の三女を配して描き出したものであります。この十帖を「宇治十帖」と稱へます。

前の四十四帖は、全編を通じて幸福泰平の世路を寫し後の十帖は主人公の運命や、悲劇的な傾向が描かれて居ります。源氏の君を中心とする幾多の人物の行動は、要するに平安城裡、泰平を謳ひ風雅を盡して、「もの丶あはれ」に世相を律したものであります。この**もの丶あわれ**とは、まことに、平安朝の男女を通じて、世態の標準とかつは處世の標的としたものでありまして、「もの丶あはれ」を解せざれば、全く紳士淑女の仲間入りが出來なかつたのであります。江戸時代に、かの「粋」といふ一の標準が萬事を解決して、これを知らざるものは所謂「野暮」と蔑まれたのと、形こそ變れ、相似た點があります。この思想は源氏物語ばかりではありません、この時代の物語を通じて、よく窺はれる一點であります。

源氏物語、文章の流麗は、實に千古の國文學中匹敵す

る所を見ない程のもので、景物を寫し、事を論ずるに、毎に其の法を具へ其の妙を究むる所は、ほとほと感服せざるを得ない次第です。今參考の爲に五十四帖の名を擧げて、文例に移ります。

桐壺　箒木　空蟬　夕顔　若紫　末摘花　紅葉賀　花宴　葵　榊　花散里　須磨　明石　澪標　蓬生　關屋　繪合　松風　薄雲　槿　乙少　玉鬘　初音　胡蝶　螢　常夏　篝火　野分　行幸　藤袴　槇柱　梅枝　藤裏葉　若菜　柏木　横笛　鈴虫　夕霧　御法　幻　雪隱　匂兵部卿　紅梅　竹河　（以下宇治十帖）　橋姫　椎本　總角　早蕨　寄生　東屋　浮舟　蜻蛉　手習　夢浮橋

須磨の春の一節

須磨には、いとゞ心づくしの秋風に、海はすこし遠けれど、行平の中納言の、關ふきこゆるといひけむ浦波、夜々はげにいと近くきこえて、またなく哀なるものは、かゝるところの秋なりけり。御前にいと人ずくなにて、うち息みわたれるに一人日をさまして、枕を欹てゝ、四方の嵐をきゝたまふに浪たゞこゝもとにたち來る心持して、涙おつともおぼえぬに、枕うくばかりになりにけり。琴(キン)を少しかきならし給へるが、





われながらいとすごうきこゆれば、ひきさしたまひて、

こひわびてなく音にまがふ浦浪は思ふ方より風やふくらむ

とうたひたまへるに、人々おどろきて、めでたう覺ゆるに、しのばれて、あいなう起きゐつゝ、洟(ハナ)をしのびやかにかみわたす。げにいかに思ふらむ、わが身一ツにより、親はらから片時たちはなれがたく、程につけつゝ思ふらむ家を別れて、かく惑ひあへると、おほすにいみじくて、いとかく思ひ沈むさまを、心細しと思ふらむと思せば、晝は何くれとたはぶれ言うちのたまひ紛らし、徒然なるまゝに、いろいろの紙をつぎつゝ、手習をしたまひ、珍らしき樣なる唐(カラ)の綾などに、樣々の繪どもをかきすさびたまへる、屏風のおもてどもなど、いとめでたく見どころあり。人々の語りきこえし海山の有樣を、遙かにおほしやりしを、御目に近くては、げに及ばぬ磯のたゝずまひ、二なくかき集め給へり。このころの上手にすめる千枝、常則などをめして、作繪(ツクリエ)つかうまつらせばやと、心もとながりあへり。なつかしうめでたき御有樣に、世の物おもひ忘れて、近うなれつかうまつるをうれしきことにて、四五人ばかりぞ、つと侍ひける。前栽の花いろいろさき亂れ、おもしろき夕暮に、海みやらるゝ廊に出でたまひて、佇みたまふ御樣の、ゆゝしう淸らなること、所からはまして、この世

のものとも見えたまはず。白き綾のなよゝかなる、紫苑色など奉りて、こまやかなる御直衣、帶しどけなく、うち亂れたまへる御樣にて、釋迦牟尼佛弟子となのりて、ゆるゝかによみたまへる、また世にしらずきこゆ。沖より舟どものうたひののしりて漕ぎゆくなどもきこゆ、ほのかにたゞ小さき鳥のうかべると見やらるゝも、心細げなるに雁の列ねてなく聲、機の音にまがへるを、うちながめたまひて、御涙のこぼるゝを、かきはらひたまへる御手つき、黑木の御數珠にはえたまへるは……人々のこゝちみな慰みにけり。

源氏物語の註釋書は古來數多くありますが

北村季吟　湖月抄

は先づ入り易いもので、近代にも大意を述べたものには手頃のものがあります。

**17. 歌序** 歌序には、歌集の序と長短歌のはしがき——序——との兩種があります。單に歌の序文としては既に萬葉集にも多く載せられてあるのでありますが、然しそれらは、ほとんど漢文を以てせられました。これは未だ國文の發達を見なかつた爲で、この時代は、おほよそ物語に見たと同系の純國文を以て、それが綴られて





居ります。貫之の「大堰川行幸和歌の序」も有名でありますが、次に古今集のものを抄錄して、その一例とします。

やまと歌は、人の心を種として、よろづの言の葉とぞなれりける。世の中にある人、ことわざしげきものなれば、心に思ふ事を、見るもの聞くものにつけていひ出せるなり。花になく鶯、水にすむ蛙の聲をきけば、いきとしいけるもの、いづれか歌をよまざりける。力をも入れずして天地を動かし、目に見えぬ鬼神をもあはれと思はせ、男女の中をも和らげ、猛き武士の心をも慰むるは歌なり。この歌、天地の開けはじまりける時より出で來にけり。しかはあれども世に傳はる事は、ひさかたの天にしては、下照姫にはじまり、あらがねの地(ツチ)にしては、須佐之男命よりぞ起りける。ちはやふる神代には、歌の文字も定まらず、すなほにして、ことの心わきがたかりけらし。人の世となりて、すさのをの命よりぞ三十文字あまり一もじはよみける。かくてぞ花をめで、鶯をうらやみ、露をあはれび、露をかなしぶ心詞多くさまざまになりにける。遠き所もいでたつ足もとより始りて年月をわたり、高き山も麓の塵土(チリツチ)よりなりて天雲たなびくまでおひのぼれる如くに、この歌もかくの如くなるべし……いにしへよりかく傳は

るうちにも、奈良の御時よりぞひろまりにける。かの御世や歌の心をしろしめしたりけむ、かの御時におほきみつのくらゐ柿本の人麿なむ歌のひじりなりける。これは君も人も身を合せたりといふなるべし。秋の夕、龍田川に流るゝ紅葉をば、みかどの御目に錦と見たまひ、春のあした吉野山の櫻は、人麿が心には雲かとのみなむ覺えける。又山のべの赤人といふ人ありけり。歌にあやしくたへなりけり。人麿は赤人が上に立たむ事かたく、赤人は人麿が下に立たむ事かたくなむありける。これよりさきの歌を集めてなむ萬葉集となづけられたりける。……

## 18. 日記—紀行 日記に

蜻蛉日記　和泉式部日記　紫式部日記　讃岐典侍日記

紀行に

土佐日記　更科日記

があります。文體は物語のやうに艶麗な所はなく、歴史の如く謹嚴な所もありませんが、日常の事象と行旅の感想とを叙述して、卒直な中に一種の妙味を含んで居るのはその特長です。

**土佐日記** は、貫之が延長八年に土佐守となつて赴





任し、その地に五ヶ年を送つた後承平四年に任滿ちて、京に還る時の航路の紀行文であります。土佐に失つた亡兒の追懷は全篇を通じて見ゆる所でありますが、風波につけて海賊の難を思ひ、徒然のあまりに滑稽を弄するあたり、輕快にして而も莊重の意を失はざる所は、流石に名家貫之でなくては、よく凡手の及ぶ所でありますまい。

これより今はこぎはなれてゆく、之を見送らんとてぞ、この人どもはおひきける。かくてこぎ行くまにまに、海のほとりに留る人も遠くなりぬ。舟の人も見えずなりぬ。岸にもいふ事あるべし。舟にも思ふことあれどかひなし。かゝれば此歌をひとりごとにしてやみぬ。

おもひやる　心は海を　わたれども、　ふみしなければしらずやあるらむ

かくて、宇多の松原をゆきすぐ。その松のかずいくそばく、いく千年へたりとしらず。もとごとに浪うちよせ、枝ごとに鶴とびかふ。おもしろしと見るに堪へずして、舟人のよめるうた。

みわたせば　まつのうれごとに　すむつるはちよのどちとぞおもふべらなる

とや。此歌は處を見るにえまさらず。かくあるを見つゝ、こぎゆくまにまに、山も海も皆くれ、夜ふけて西東も見えずして、てけの事、楫取の心に任せつ。男も習はねば、いとも心細し。まして女は舟そこに頭をつきあてゝ、音をのみぞなく。……

廿一日、卯の時ばかりに舟出す。みな人々の舟いづ。之を見れば、春の海に秋の木の葉しもちる樣にぞありける。おほろけの願によりてにやあらん、風もふかず、よき日いできてこぎゆく。この間に使はれんとてつきてくる童あり。それが歌ふうた。「猶こそ國のかたはみやらるれ。わが父母ありとしおもへば、かへらや」とうたふぞあはれなる。

**紫式部日記**　紫式部が、上東門院に宮仕した頃の記錄で、中宮御懷姙の頃から、後一條天皇及後朱雀天皇の御誕生の事などが記されてあります。

秋のけはひの立つまゝに、土御門殿の有樣、いはんかたなくをかし、池のわたりの梢ども、遣水のほとりの叢、おのがじし色つき渡りつゝ、大方の空も艶なるにもてはやされて、不斷の御讀經の聲々あはれまされり。やうやう涼しき風のけしきにも、例の絶えせぬ水の音なひ、夜もすがら聞きまがはさる。御前にも近うさぶらふ人々、はかなき物語するを聞しめしつ





つ、惱しうおはしますべかんめるを、さりげなくもて隱させ給へり。御ありさまなどの、いと更なることなれど、うき世のなぐさめには、かゝる御前をこそ尋ねまゐるべかりけれど、現心（ウツツゴコロ）をば引きたがへ、たとしへなく萬忘るゝにも、かつはあやしき。

**19. 隨筆—枕草子**　見聞に從ひ事に感ずるまゝを、折に隨つて、書きすゝめる所謂隨筆なるものも、また、此の時代に特に生れた產物で、而も淸少納言が枕草子は、筆法頗る鋭利、後世の模倣を許さないものです。著者、淸少納言は、歌人淸原元輔の女で、元輔が少納言であつた爲に、その姓と官位をとつて、かく呼んだのでありませう。一條天皇の皇后定子に仕へて居りましたから、一方中宮の上東門院に仕へた紫式部と相對して、兩才媛が宮中に筆の戰を合はす所は、實に花合戰、雪合戰ともいふべきものでした。然し、式部は謹愼內に蓄へておもむろに出し、納言は相手を得るにまかさせて、卽座に之を品評し罵倒し、博識を衒つて才能に誇る傾向さへありました。一は婦人の德を具へて高風に生き、一は寧ろ急進男まさりの氣性を以て男子を瞠若たらしむを痛快事

とした風が見えます。けれども納言の才學は、實に敬服に價するもので、天性また敏捷活潑、枕草子一篇を通じて、いかにも齒ぎれのよい、きびきびした所に、引つけられます。

或は公卿宮媛のふるまひを評し、或は四季の光景を叙し、奇拔な觀察を以て、鋭い筆端に載せ來る所には著者の面目躍如として窺はれます。而もその文をやる事、特に簡潔で、所謂「體言どめ」の法を多く用ゐた所は、流石に清少でなければ出來ない所でありませう。

四　季

春は曙。やうやう白くなりゆく山際すこしあかりて、紫だちたる雲の細くたなびきたる。夏は夜。月の頃は更なり、闇もなほ螢飛びちがひたる、雨などの降るさへをかし。秋は夕暮。夕日はなやかにさして、山際いと近くなりたるに、烏のねどころへ行くとて、三つ四つ二つなど飛びゆくさへあはれなり。まいて、雁などのつらねたるが、いとちいさく見ゆる、いとをかし。日入りはてゝ、風のおと、蟲のねなど、いとあはれなり。冬は雪の降りたるは言ふべきにもあらず。霜などのいと白く、又さらでもいと寒き、火など急ぎおこして、炭もてわたるも、いとつぎつぎし。晝になりて、ぬるくゆるび





もてゆけば、炭びつ、火をけの火も、白き灰がちになりぬるはわろし。

烏　は

こと所の物なれど、鸚鵡いとあはれなり。人のいふらん事をまねぶらんよ。郭公。水鶏。鴨。みこ烏。ひわ。ひたき。山烏は友を戀ひて鳴くに、鏡を見せたれば、なぐさむらん、いとあはれなり。谷へだてたるほどなど、いと心苦し。鶴はこちたきさまなれども、なく聲雲井まできこゆらん。いとめでたし。頭赤き雀。いかるがのを烏。たくみ烏。鷺はいと見る目も見苦し。眼ゐなども、うたて、よろづに、なつかしからねど、ゆるぎの森に獨りはねじと爭ふらんこそをかしけれ。はこどり。水烏はをしいとあはれなり。かたみにゐかはりて、羽根の上の霜を拂ふらんなどいとをかし。都烏、川千烏は友まどはすらんこそ。雁の聲は遠くきこえたるあはれなり。鴨は羽根の霜打拂ふらんと思ふにをかし。鷺はふみなどにも、めでたきものに作り、聲よりはじめて、樣かたちも、さばかりあてに、うつくしきほどよりは、九重のうちに鳴かぬぞいとわろき。……

## 20. 雜史　こゝに雜史といふのは

榮華物語　大鏡　水鏡　今鏡　今昔物語　宇治拾遺物

語

などであります。大鏡は、史記の體裁に倣うて書かれたもので、その純粹な國文は筆路頗る勁拔に見えます。榮華物語も、ほとんど同時に生れたものでありますが、大鏡に比べれば何となく冗漫の點が多いやうであります。兩書ともに、藤原氏の榮華を寫し、關白道長を中心として、その周圍が微細に描き出されて居ります。もとより空想を交へない歷史物語で、この兩書は共に「世繼物語」の別名があります通り、代々の出來事をつぎつぎに書き進んだもので、世繼といふ名詞は、當時、今日の歷史といふほどの意味に用ひられて居たものであらうと思ひます。古事記はしばらく措き、日本書紀以來の國史は、皆漢文を以て記すのが、本體となつて居りましたが、國文流行のこの期に至つて、こゝにはじめて國文體の歷史を得た事は、これまた物語——小說——の場合に見たと同樣、平安朝の文學上にめざめた一特長であります。

**榮華物語** は宇多天皇の寬平年中からはじめて、村上天皇以後の事を錄し、堀河天皇の寬治六年に終つて居ります。卷數凡て四十帖。一帖每に風雅な卷名を附してあ





ることは源氏物語のそれと等しく、著者は赤染衞門と稱して居りますが、分明ではありません。

**大鏡** は後一條天皇の萬壽三年、雲林院の菩提講で、百五十歲になる大宅世繼といふ人と、百四十歲になる夏山茂樹といふ人とが、相會うた事にはじまつて、兩人の談話に事をよせ、文德天皇の嘉祥三年から萬壽三年まで百七十六年間の事蹟を記しました。中に帝王の本紀と大臣の列傳とを分つた所は、曩に申した史記の體裁に倣ふ所があつたといふわけです。

**水鏡** は神武天皇から仁明天皇まで、歷代の變遷を說いたもので、卽ち大鏡以前の、わが國文歷史であります。

**今鏡** 一名續世繼、小鏡——は一條天皇から高倉天皇の朝までを記載しました。水鏡は大鏡に、今鏡は榮華にその體を倣うた迹が見えます。これで國文の歷史は、ほゞ完全になるのでありまするが。その缺けた所を補ふ意味で、同じ體裁に書かれたものは、後德川時代に荒木田麗女がかいた、「月のゆくへ」と「池の藻屑」との二書であります。

**今昔物語** —— 一名、宇治大納言物語——は以上の

諸書とは、全く體裁を異にしまして、隨筆的に見聞を書き集めたものであります。ですから中には、怪談虛說めいたものも多いのでありますが、ともかくも當時の歷史の一部も載せられてありまするから、雜史としてこゝに掲げた次第です。次の

**宇治拾遺物語** は、今昔物語に洩れた逸事などを拾ひ集めたもので、體裁も文章もすべて同じく、兩書ともに斷片的な面白い話に滿ちて居ります。殊に國史ばかりでなく支那印度などに關するものは、また注意すべきでありませう。

これら歷史ものゝ文體に就ては、特にこゝに文例を掲げる程の事はないと思ひます。何れも前出した物語風の文章と同じであります。大鏡を註解したものには

落合直文
小中村義象　著　大鏡詳解

があります。

× × × × ×

これを以て、平安朝の文學を概觀した事と致しますが、なほ詳細に亘つては、論ずべく示すべきものが多い





のであります。但し、その代表的のものに就ては、ほゞ一わたりして來ました。要するに、此の時代は、文學——國文學——の上には花々しい輝を發した期間で、わが國文學史上、江戸時代と平安朝時代とは、まさに兩々相對した空想——藝術的——の時代であります。これは、また現實に卽せず理想の光明に奔せた時代とも申せませう。徒らに過去を追懷してその光榮を顧みた時代とは內容に於て異るものがあり、藝術的の產物は、現在に屈托する時からは、餘り多を產しないものであります。平安朝の文學は、同じ情緖の動いた江戸時代に、最も多く研究せられましたから、以上の各文學を、今日了解せうとするには、勢ひ德川期の學者の研究によらなければなりません。たゞ此の平安朝の文學全體を通じて、これを詳細に論評したものに、

藤岡作太郎　國文學全史　平安朝篇

があります。一層深くこの時代思潮を究めんとする人の爲には絕好の著述と信じます。

# 第五章　鎌倉室町時代

**1. 時代の概觀**　源頼朝が鎌倉に幕府を開いてから、家康が關ヶ原の一戰に、海内を統一するまで。此間また事件を中心にして、自ら區分せらるゝものがあります。卽ち、――源平二氏の鬪爭――鎌倉幕府時代――南北朝――室町時代――戰國時代――を經て織田豐臣に終りました。此の間凡そ四百五十年。恰も平安朝のそれと相似て居ります。

此の時代は、いふまでもなく政治上混亂の時代でありまして、武人のめざめた結果、堂上の公卿がともかくも保守した社會を破壞して、まだ、江戸時代のやうに、整理たる武家制度が確立するに至らず、或は起ち或は破れ、泰平は須臾にして戰亂となる有樣は、政治史に見える所であります。ですから、これを概觀して、上下武事に專念した時代といふ事が出來ませう。朝に兵を談じ、夕に劍を磨くといふ、その世の中に、平和の世を裝飾すべき文藝の事が、どうして發達しませう。鎌倉殊に室町の世を指して、文學の暗黑時代と稱するのは、過言でありま





せうが、これをこの時代の前後、平安と江戸とに比しては、その燦爛たる光彩、到底及ぶべくもありません。とはいへ、戰亂には戰亂の文學が存するもので、世はたゞ武事一面を以ては、決して過ぎゆくべきものでなく、かの東山時代の美術が、鬱然としてわが美術史上に頭角をあらはし、その名遠く海外の諸國に知らるゝまでのものを生んだと等しく、わが文學に於ても、此時代に相當した戰記文の如きは、また他の時代に見ない勇勁の調を、殘したものであります。

こゝに最も注意すべき一事項は、此の期に及んで佛敎の主義が一層甚しく民心に侵入し、當時の上下に崇佛者の頗る多かつた事であります。禪宗は、新に入りました。念佛宗日蓮宗は國内に起つて、日本的佛敎が人の心に入り易かつたのはもとよりの事、明日をも知らぬ戰場の勇士と、その妻子とは、何物にかたよる所が無ければならなかつたのは當然であります。殊に此の期の文學に佛敎趣味の多く見える所以は、文事にうとい武人が、外交重要の事件に、また日常の生活に、漢文を心得典例に明かであつた僧侶を用ひて、所謂秘書役たらしめた爲でもあり

ます。內幕に參加した僧侶は、參謀となつて機密にも參したでせう、時に詩を賦し文を草して、武人の名譽心を滿足せしめた事もありませう。文權は遂に此等緇流に握られたのであります。

ですから、厭世無常の主張は、上下に流布して、和歌を學ぶも、また佛道の奧旨に達する爲の手段であると說き、かの源氏物語さへ、これらの人々には、天台止觀の意を承述せんが爲に記されたもので、いづれも有がたき御法の手引であると見えたのであります。たゞし平安朝に衰へた尙武の氣風は、此の時代に勃然として再び頭をもたげ、武を練り、刄を磨する、日本在來の精神が一世を風靡しました。平安朝時代が文事偏重ならば、此の時代はまた武事偏重の世の中となつたのであります。その武事が、文學を生んで、こゝに佛敎の無常觀が加はつたといふもの、これが鎌倉室町時代の文學の特長であります。

その文體に至つては、當代何等の新奇軸を出したほどのものはなく、寧ろ平安朝に具備した文法を破壞して、混雜を呈した感があります。たゞ漢語佛語が益多く用





ひられて、形容や句法の上に豐富な點は、注意すべきで、平安朝時代の文章に纖弱の傾向があるとすれば、これは剛健雄大の風があり、所謂和文——雅文——の體裁から、近世の和漢混淆の文に至る、その中間の文章が、卽ちこの時代のものであります。

漢文學の方面は、前期に比して衰微した觀があるのは爭はれません。正確な漢文を綴る事が、難しい事となつて、一種異樣な擬漢文體を生じたのは、鎌倉時代に出た

東鑑

を見ても、知る事が出來ませう。そのほか、

台記　人車記　玉海　明月記　山槐記　百練抄　貞永式目

など日記或は法制に關するものも、すべて支那人には讀めない漢文を以て綴られて居ります。室町時代に至つては、其衰微表面的には益甚しく、纔かに五山の僧侶等が、自分達の範圍內のみで、漸くこれを維持したといふ有樣であります。

此の時代の文學の種類は

和歌　物語　雜史　日記紀行

などがありますが、これらの四種は全く在來の舊態を繼承して而も或ものは寧ろ墮落した傾向があります。たゞ、

隨筆

のみは、幾分その外形と內容とを新にしたものがありまして、特に新奇の內容を具へて、その色を明かにしたものは勿論

戰記文

でありました。平家物語は、まさに他の期に得難い、國民詩そのものであります。

連歌

も此期に流行しましたが、これは特に足利時代の遊戯文學で、文學的要素から論ずれば、何程の事もないものです。たゞこゝに

謠曲　狂言

のあるに至つて、此の期末に一道の光明を與へた感があります。更に

お伽草子

が最後に生れたのは、江戸平民文學の萠芽と見るべきもので、淸新革進の氣運まさに動かんとする英氣を窺ひ得





るのは愉快に耐えません。

これを要するに、有職故實の學が起つた點、和歌の道は全く形式に陷つて秘事を事とした點、他人の武勇をのみ談ずる點、何れも過去を追想して、これに憧憬し、これを模倣し、新奇な理想によつて方面を展開せしむるといふ氣風の尠かつた事は、否むべからざる事實であります。

**2. 和歌**　後鳥羽天皇が和歌所を宮中に設けられて、斯道の興隆、奬勵につとめられてから、土御門、順德の二帝はもとより

藤原定家　藤原家隆　僧寂蓮　源實朝　僧慈鎭　式子內親王　一條爲定　二條爲明　宗良親王　頓阿

などの名手が續出して居ります。新進の氣風は殆ど全く和歌の上に及びませんでしたから、徒らに舊態を墨守するばかりで、前時代から引續いた勅撰集の續出は、この傾向をよく物語つて居ります。今、こゝにその有樣を見ませう

新古今和歌集（源道具、藤原有家、同定家、同家隆、源雅經）

新勅撰集（定家）

續後撰集（爲家）

續古今集（爲家、藤原基通等）

後拾遺集（藤原爲氏）

新後撰集（藤原爲世）

玉葉集（藤原爲兼）

續千載集（爲世）

續後拾遺集（藤原爲藤、同爲定）

風雅集（藤原俊成）

新千載集（仁條爲定）

新拾遺集（二條爲明）

新後拾遺集（二條爲遠、同爲重）

新續古今集（飛鳥井雅世）

これに古今集以後の　後撰　拾遺　後拾遺　金葉　詞花　千載　の七集を加へますると、實に二十一集の多きに達します。これを稱して二十一代集と申します。なほ八代集といふ稱もありますが、それは古今集から新古今集までを申すのであります。

かくの如き有樣で、いたづらに勅撰歌集は相次いで編





まれましたが、たゞそれは當時になさねばならぬと信せられた形式の傳承が生んだもので、なかに、たゞ新奇の旗幟を飜して邁進した形の見ゆるもの、また新しき歌風の樹立せられたと思はるゝものは最初に現はれた「新古今集」でありまして、それは定家家隆の詩想に歸するのであります。勅撰の系統をはなれては、長明、實朝、頓阿、宗良親王などが出色の名歌を殘しました。

**3. 新古今集**　この編の體裁は全く古今集に倣うたものでありますが、內容の着想と措辭の新奇とは、餘韻深い句調の流麗と快活とを生じて、秋風落莫の感ある鎌倉文學の中に、楓の霜に色づいた有樣を現出して居ります。古今集以來の歌は、要するに主觀の勝つたものでありましたが、平安朝の末期から客觀の歌があらはれまして、新古今に至つて、それが大成せられた觀があります。新古今は主觀客觀をよく融合して、敍情と敍景との調和をはかり、主客錯交景情一致の文學を成したものです。特に、その敍景の歌に優れたものがあらはれたのは、新古今の內容の特長といふべきでせう。

定家

春の夜の　夢のうきはし　とだえして　みねに分るゝ　よこ雲の空

見渡せば　花も紅葉も　なかりけり　浦の笘屋の　秋の夕ぐれ

大空は　梅のにほひに　霞みつゝ　くもりもはてぬ　はるの夜の月

駒とめて　袖うち拂ふ　かげもなし　佐野の渡りの　雪の夕ぐれ

家隆

かすみたつ　末の松山　ほのぼのと　浪にはなるゝ　よこぐもの空

志賀の浦や　遠がさりゆく　浪間より　氷りていづる　有明の月

風そよぐ　ならの小河の　夕暮は　御祓ぞ夏の　しるしなりける

何れも、客觀叙景の趣味に勝り、たくみに情景を交へたあとを知る事が出來ます。

定家は、俊成の子、名門に人となつて、史傳に通じ、詩文を學び、兼て弓馬の術をも合せたといひますから、多藝多才行くとして可ならざるなしといふ人でありました





たらう、而も進取の氣象に富んで、徒らに退嬰保守を事としなかつた事は、曩にも申した通り、遂に新古今集の名をなさしめました。

家隆は、壬生中納言光隆の子で、爲に壬生二位と稱せられます。同じく俊成の門に學んで奥秘を究めたので、此の人は非常に多數の歌を詠んだといふ事であります。生涯を通じて六萬首と稱せられて居ります。

また、此の頃特に盛んになつたのは、かの歌學歌論の一事でありまして、

定家には　詠歌大概　雨中吟　顯註密勘　僻案抄

などがあり、その頃から以後は、その門に學んで秘傳を授けられなければ、歌人たる能はずといふやうな事になりました。仰、この歌道の門閥といふ事は、既に平安朝末に始られた事でありまして、藤原顯季が六條家といふを稱へ、顯輔清輔と相次いで、其の地盤を堅めました。この時に別に一門を起したのが俊成で、これを二條家と號します。この兩家は各その後繼者によつて、事毎に爭ひ、門戸を張つて、他の侵入を許さないといふことでしたが、この事が此の期に入つて益はげしく、爲家の後の

爲氏は二條家を、爲敎は毘沙門堂家を、爲相は冷泉家をといふわけで、歌學歌論そのものであれば、大に論じ大に議すべきでありませうが、遂には古今集の秘事「三鳥三木」などゝいふ事をいひ出して、愚にもつかない秘傳呼ばはりをしたのであります。されば、歌道の衰頽はもとよりで、自由の天地に高吟してこそ、歌ははじめてその生命を生じ光を放つものであります。

**4. 源實朝** この點に於て、比較的自由の天地に起つた歌人は、右大將源實朝その人であります。歌道の墮落は彼の活眼に映じたのであります。形式の束縛と、歌詞の單なる流麗とは、彼の心に不滿を懷かしめました。卽ち萬葉の風調に憧がれて、詠じ出したその歌風は、群鷄中の一鶴と申しませうか。而もその人は頼朝の二子で、征夷大將軍に任ぜられ、建保七年正月、齡いまだ三十に滿たずして暗殺されたといふのでありますから、いよいよ平凡の歌人でなかつた事を思はせられます。

實朝の歌集を「金槐集」といひます。

もののふの　矢なみつくろふ　小手の上に　霰たばしる　なすの篠原





山はさけ　海はあせなむ　世なりとも　君にふた心　われあらめやも

箱根路を　我越えくれば　伊豆の海　沖の小島に　なみのよる見ゆ

歎きわび　世を背くべき　方しらず　吉野の奥も　住みうしといへり

大海の　磯もとどろに　よる波の　われて碎けて　さけてちるかも

いとほしや　見るに涙も　とゞまらず　親もなき子の　母をたづぬる

時により　過ぐれば民の　なげきなり　八大龍王　あめやめたまへ

## 5. 他の諸家

御鳥羽天皇

見わたせば　山もと霞む　水瀬川　ゆふべは秋と　なにおもひけん

寂蓮法師

さびしさは　その色としも　なかりけり　槇立つ山の　秋の夕暮

鴨長明

石川や　せみの小川の　清ければ　月もながれを　尋ねてぞすむ

後醍醐天皇

都だに　淋しかりしを　雲はれぬ　吉野のおくの　さみだれのころ

身にかへて　思ふとだにも　知らせばや　民の心の　治め難さを

宗良親王

君の爲　世の爲なにか　をしからむ　捨ててかひある　いのちなりせば

慈鎭和尙（今樣）

春の彌生の　あけぼのに　四方の山邊を　見渡せば　花ざかりかも　白雲の　かゝらぬくまぞ　なかりける。

花たちばなも　匂ふなり　軒のあやめも　かほるなり　夕暮さまの　五月雨に　やまほとゝぎす　名のりして。

秋のはじめに　なりぬれば　今年も半は　過にけり　我よふけゆく　月かげの　傾く見るこそ　あはれなれ。

冬の夜さむの　朝ぼらけ　ちぎりし山路は　雪ふかし　心のあとは　つかねども　思ひやるこそ　あはれなれ。

**6. 連歌**　連歌は前期から堂上の間に、行はれて居





たのでありますが、鎌倉の中期後は、一般に弄ばれて、建武二年の二條河原の落書に

事新しき風情なく、京鎌倉をこきまぜて、一坐揃はぬえせ連歌、點者にならぬ人ぞなき。

とあつたといふ程であります。けれども、連歌の道を、興隆せしめて形式を整へたのは、二條良基でありまして、「菟玖波集」といふ連歌集は、良基と救濟との撰で、勅撰に准せらるゝものとなりました。在來一場の遊戯文字であつた連歌は、こゝに位冠を著けたわけであります。然し乍ら、その内容に至つては、至つて貧弱、たゞ辭句の修飾にのみ心して、何等新奇の傾向を生じなかつたのは、これまた時代と人との然らしむる所でありませう。良基は「連歌新式追加」と「筑波問答」とを著して、その法則を定め、宗祇の「吾妻問答」「老のすさみ」、釋心敬の「老のくりごと」「さゞめごと」に至つて、斯の道は大成せられたのであります。連歌が俳諧のよつて起つた源であるのは、曩にも述べた、江戸時代文學の萠芽を、この期に含めて置た事の一證となります。

文明十四年五月廿五日内裏にて百韵の連歌に

露散る風に匂ふ橘
たますだれ軒ばの月にまきあげて　前大納言教秀
すみわびぬるか隱れがの秋
かりにさすいほりあらはに月入りて　後花園院御製
風の聲をざさにのみや殘るらん
太山の月におつる朝露　三品親王堯胤
寢ざめいく夜のあらましの末
行月もたづね入らばや山の奥　權僧正日應
遙けき道の行方知らばや
あけぬまは大空めぐる夜半の月　藤原よしひで
野分の風の吹きやしくらん
山本の村雲しろき月落ちて　智藴法師
おなじわかれの曉の空
山のはを月に幾度うらむらん　藤原正種
（新撰菟玖波集）

しうとの爲め若菜なりけり
澤水につかりて洗ふ嫁が脛
うそをふきふき花をこそ見れ
軒端なる蜂のすはひに梅咲きて





雪まになりぬさけさやの竹
春の野や所々をこがすらん
所のおとな花を見るころ
我程の人はあらじとかすませて
大長刀に春風ぞ吹く
辨慶もけふや火花を散すらん
尤とこそ人は見るらめ
下手の書く花といふ字を夕まぐれ
ひさうの花の枝をこそ折れ
引よせてつぶりはる風我むすこ
春の野にいんぎんかうの始りて
まづつくつくし袴をぞ著る
吹けかし風の吹かであれかし　（犬筑波集）

大篇長詩に乏しい我邦の歌謠に、もしこの連歌が、一篇を通じて一貫した意味を持つものであつたならばと思はせますが、これは句と句との連絡を以て滿足もし、それを技としたものでありますから、後に此の句は獨立して發句の形となつたのであります。

**7. 隨筆**　この期の隨筆は

鴨長明　方丈記

兼行法師　徒然草

を以て、代表せられます。他に「發心集」西行法師の「撰集抄」無住法師の「沙石集」なども、この類に入れて差支ないものでせうが、こゝには前の二書に就て專ら述べる事とします。

鴨長明は、俗名を菊太夫というた人で、壯年の頃は、宮廷に奉仕して從五位下に叙せられたのですが、源平の亂に退いで、山城加茂の社の氏人となりました。其の後、建仁元年に和歌所の寄人に召されたのでありますが、幾程もなく隱遁して名を蓮胤と改め日野山などに籠つて、藏する所は佛像のほかに三五の書藉と筆及琵琶のみであつた事が想像せらるゝ程、極めて簡易な生活に、風月を友とした人であります。方丈記の最初に「行川のながれは絶えずして、而ももとの水にあらず。よどみに浮ぶうたかたは、かつ消えかつ結びて、久しくとゞまることなし。世の中にある人と住家と、又かくの如し」と書き出してある、それを見ても、無常觀——佛敎——の上に立つて、遂に厭世の主義を叙べたものである事がわかりませう。また「其のあるじとすみかと、無常を爭ふさま、





いはゞ朝がほの露にことならず。あるは露おちて花殘れり、殘るといへども朝日にかれぬ。あるは花はしぼみて露なほ消えず、消えずといへども夕を待つことなし」。など一々人生の無常を說いて居りますが、章句の修飾頗る美に、熱涙のこもつた筆致は、讀者をしてひしひしと身に迫まらるゝものがあります。安元の大火、治承の颶風、養和の饑饉、元暦の地震など、記中にあらはるゝ事項、これまたみな長明が實社會を悲觀して、彌陀の光明に急がんとする心を促したものに一致するのであります。今方丈記の一部を揭げてみませう。

大かた此ところに住み初めしときは、あからさまと思ひしかど、今すでに五とせを經たり。假の菴もやゝふる屋となりて軒には朽葉ふかく、土居に苔むせり。おのづから事のたよりに都を聞けば、此山に籠り居て後、やんごとなき人のかくれたまへる數多くきこゆ。ましてその數ならぬたぐひ盡して是をしるべからず。たびたびの炎上にほろびたる家、またいくそばくぞ。たゞかりの菴のみのどけくしておそれなし。ほどせばしといへども、夜ふす床あり。晝居る座あり。一身をやどすに不足なし。がうなは、小さき貝をこのむ。是よく身をしるによりてなり。みさごは荒磯に居る。則ち人を恐るゝが故な

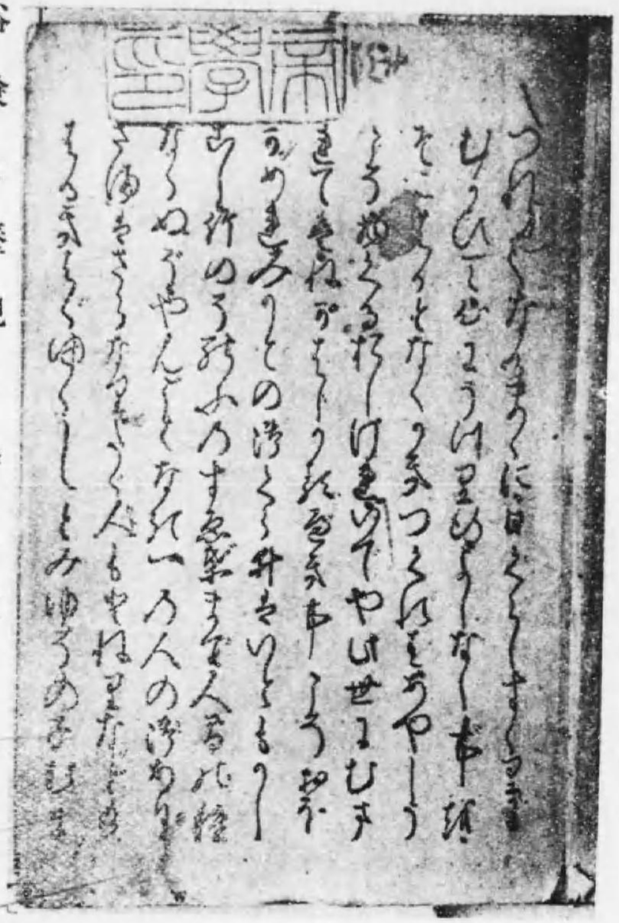
り。我またかくの如し。身をしり世をしれらば、ねがはずまじらはず。たゞ靜かなるを望とし、憂なきを樂とす。すべてよの人のすみかをつくるならひ、かならずしも身の爲にはせず。あるは妻子眷屬のためにつくり、或は親昵朋友のために作る。或は主君師匠および財寶馬牛のためにさべ之を作る。我今身のためにむすべり。人のために作らず。ゆゑいかんとなれば、今の世のならひ、此身のありさま、ともなふべき人もなく、たのむべきやつこもなし。たとひ廣くつくれりとも、誰をかやどし誰をかすゑん。それ人の友たるものは、富めるをたふとみ、ねんごろなるをさきとす。かならずしも情あると直なるとをば愛せず。たゞ絲竹花月を友とせんにはしかず。‥‥命は天運にまかせて、をしまずいとはず。身をば浮雲になずらへて、たのまずまだしとせず。一期のたのしびは、うたゝねの枕の上に極まり、生涯の望は、をりをりの美景に殘れり。それ三界はたゞ心一つなり。心もしやすからずば、牛馬七珍もよしなく、宮殿樓閣も望なし。今さびしき住居、一間の菴、みづから是を愛す。‥‥

兼好法師は卜部氏であつて、其の家は世々神道を以て仕へたのであります。吉田の地に住んだ所から吉田兼好ともいはれます。伏見・後伏見の兩朝に、宮中の瀧口に仕





へ後二條・花園天皇の時に六位藏人・左兵衛尉に任ぜられ又後宇多院の仙洞にも仕へたのでしたが、感ずる所あつて僧となり、俗名をそのまゝ兼好法師と稱へました。諸國を歷遊して世相を觀察したのでありますが、仁和寺の邊の雙ヶ岡といふ地に住した事があります。



つれづれ草活字本　（光悅）

徒然草は、前後の連絡のない長文短篇二百四十ばかりから成つて居ります。兼好が修得した道佛主義を中心として、よく社會の裏面を洞察し、その矛盾撞着の多い所を剔抉した點は痛快を極めて居ります。

蜻蛉のゆふべを待ち、夏の蟬の春秋を知らぬもあるぞかし。つくづくと一年を暮す程だにも、こよなうのどけしや。あかずをしと思はば、千年を過ぐすとも、一夜の夢の心地こそせめ。住みはてぬ夜に、見にくき姿を待ちえて何かはせん。命長ければ恥多し。長くとも四十に足らぬほどにて死なんこそ目安かるべけれ。其程過ぎぬれば、形を恥づる心もなく、人に出で交らはん事を思ひ、夕の陽に子孫を愛して、榮行く末を見んまでの命をあらまし、ひたすら世を貪る心のくみ深ものの哀も知らずなり行くなんあさましき。

というて居るあたり、勿論佛教思想の厭世觀から來ては居るものの、長明に比すれば、一層の皮肉を加へ、穿たざれば止まずの慨があります。

神無月の頃、栗栖野といふ所を過ぎて、ある山里に尋ね入る事侍りしに、はるかなる苔の細道をふみ分けて、心ぼそくすみなしたるいほあり。木の葉にうづもるゝかけひの雫ならでは、露おとなふものなし。あか棚に菊紅葉など、をりちらしたる、さすがに住む人のあればなるべし。かくてもあられけるよと、哀にみる程に、かなたの庭に、おほきなる柑子(カウジ)の、枝もたわゝになりたるが、まはりをきびしく圍ひたりしこそ、少しことさめて、此木なからましかばと覺えしか。





などゝある、詫住を讃して、心ゆくばかりの文辭をつらね、最後に「此木なからましかば」といふ叙述は、兼好獨特の妙技で、如何にも名文と肯かれるではありませんか。

萬の事は、月見るにこそなぐさむものなれ。ある人の「月ばかりおもしろきものはあらじ」といひしに、又ひとり「露こそあはれなれ」とあらそひしこそをかしけれ。折にふれば、何かはあはれならざらん。月花は更なり。風のみこそ人に心はつくめれ。岩に碎けて清く流るる水のけしきこそ、時をも分かずめでたけれ。「沅湘日夜東に流れ去る。愁人の爲に住(トゞマ)る事しばらくもせず」といへる詩を見侍りしこそあはれなりしか。嵇康も「山澤に遊びて魚鳥を見れば心たのしぶ」といへり。人遠く水草清き所にさまよひありきたるばかり、心なぐさむ事はあらじ。

名を聞くより、やがて面影はおしはかるゝ心地するを、見る時は、又かねて思ひつるまゝの顏したる人こそなけれ。昔物語を聞きても、このごろの人の家の、そこほどにてぞありけんと覺え、人も今見る人のうちにおもひよそへらるゝは、誰もかくおほゆるにや。又いかなる折ぞ、只今人のいふ事も、目に見ゆるものも、我心の内もかゝる事のいつぞやありしが

とおほえて、いつとはおもひ出でねども、まさしくありし心地のするは、我ばかりかくおもふにや。

或は謹嚴、或は滑稽。而も激切瓢逸の風あるこれらの文章は、まことに兼好法師その人の性格を語るもので、これらの他なほ有職故實を說き、和歌を論じ、戀愛を論じたものもあります。要するに、徒然草一篇を通じて見る所は、兼好が人生を達觀し時代を超越して、好む所に從つて瓢々生を送つたといふものゝ、一方にはなほ平安朝以來の感情主義を全く脫する事が出來なくて、忘るべからざる溫情を有したので、所謂舊思想たる情緒主義と新思想たる厭世主義とが、併存し融和し、反撥した點にあると思ひます。

**8. 物語 お伽草子** 平安朝の物語風のものは、此期に及んでも、隋性を以て、多少の產がありました。

鳴門中將物語　秋夜長物語　鵜鷺合戰物語　魚類合戰物語

などが、それでありますが、もとより平安朝の雄篇大作とは似つかないもので、たゞ殘骸を見る心持がします。そのほか





義經記　曾我物語

といふものもあります。これは、物語風といふよりも、戰記文に近いものでありまして、史上の材料、英雄の傳記を骨子として、それが文學的に綴られたものであります。「義經記」は源義朝の都落に筆を起して、義經の一代を叙し、「曾我物語」は曾我兄弟が父の仇工藤祐經を討果した快事を、叙述したものであります。物語の內容からこれを見ますれば、後世の歷史小說と見たならば穩當であらうと思ひます。

物語の他に　**消息文**　といふ一種の文體が此期に起つたのは、注意すべき事で、

僧玄惠　　庭訓往來　遊學往來

藤原定家　　定家御消息

藤原良經　　新十二月往來

僧師錬(虎關)　　異制庭訓往來

などがあります。假名を交へず、漢文のみを以て所謂「候文」をものしたものも、假名交り文で今日に行はれるものに近いものも、あります。江戶時代武士の用文は、全くこの消息文の系統のものでありました。江戶時代の

みならず、明治時代にも相當にこの漢字のみの候體が用ゐられたのであります。

足利時代の文體は、殊に多樣でありまして、平安朝式の雅文と候文とがあれば、又他に口語文——狂言——五山の抄物——などもあります。但し今日吾々の　て居る口語は、その源を、多分足利期に發したものでありませう。少くとも文献の徵すべきものでは、此の時代以前に遡る事がありません。

**御伽草子**　は鎌倉時代に流行した繪卷物から發達したものでありませう。ですから、この草子にも必ず繪を挿んで、上流社會の玩物となつたのです。その結構は中古物語に題材をとつて、それを改刪したものが多く

文正草子

鉢かつぎ

などが、最も有名になつて居ります。文正草子は、常陸國鹽燒の里に住んだ文正といふ賤しい男が、鹿島大明神に祈誓してまうけた二人の娘を中心にして、その娘が貴人の妻となり、父文正も宰相の位に上つて、その家は富み榮えたといふに終つて居ります。鉢かつぎの方は、常





に鉢をかぶつて居る片輪の女が、繼母に惡まれて世をはかなく暮して居りましたが、或機會にその鉢が碎けて、中から金銀財寶があまたあふれ出ました。遂に宰相の人に嫁いで、幸福な半生を送つたといふのであります。何れも、これといふ新奇の工風があらはれたのではなく、俗語と佛語とが多いのが、特長と申せませうか。

これに類したものに　淨瑠璃十二段草子　といふのがあります。淨瑠璃姫の事を書いたもので、江戸時代の所謂淨瑠璃は、その名をこれに發したのであります。

彌生なかばのころなるに、楊梅桃李の春の花、木々の梢にさきみだれ、大庚嶺の梅のはな、しげみが枝の花ざかりも、かくやとおもひ知られたり。御曹司はこのもとに立ちしのび、散りゆく花を左右のたもとにうけとめて、古き詩歌を詠めて立ちたまふ。「鶯の聲に誘引せられて、水邊にをる、野草芳菲たり、こうきんの地遊絲繚亂たり、へきらの天」とも詠めて立たれたり。

もえいづる　草のけむりに　末みだれ　おほろにかすむ
はるの夜の月

とながめて立たれたり。をりふし長者の住家より、南のつま戸に當りつゝ、つま音やさしき琴のねの、松ふく風にひゞき

つゝ、りんりんとこそ音づれけれ。御曹司はきこしめし、いかなる人の彈くやらんと、心をとめてあやしく思しめし、琴のねに心をひかれ、尋ねよりて見たまへば、こゝに一つの不思議あり。あるじは誰とも知らねども、七間四面のやかた、八棟(ヤツムネ)づくりに結構し、東西兩門を飾らせて、壺のうちには樹木前栽かずしらず。軒端のこうばい、心も詞も及ばれず。一重櫻に八重櫻、しだり柳にふく春風、いとゞ心もうらみだれ、花も紅葉もひとさかり。南おもての花園には、まがきすいがきまばらにて、月見んためのいほびさし、花みんための八重檜垣、洲濱に池をほらせつゝ……島のうちの結構さは、百種の花をぞうゑられける……嵐に花のさそはれて、汀の波に浮みしを、物によくよく譬ふれば、八功德水の池の面の百千萬種のほうれんげも、いかでかこれに勝るべき。島よりろく地のかよひには、そり橋をかけさせ、池には色々のはちすをはなし、たゆたふ波もゆふゆふとして、汀の前に吹く風も、しんしんと月ちみて、孔雀、鳳凰、桐竹に舞ひ遊びければ、さながら極樂世界もかくやあらんと覺えけり（淨瑠璃十二段草子）

文調、卑俗に近く、雅もなく壯もない有樣は、これに窺はれるでありませう。





**9. 日記　紀行**　これは、鎌倉時代に出たものが多く、室町には、特に擧ぐべきものがありません。

日　記

辨內侍日記——中務大輔藤原信實の女

中務內侍日記——宮內卿永經の女

紀　行

海道記——源光行

東關紀行——源親行

十六夜日記——藤原爲相の母阿佛尼

が代表的のものでありますが、日記は其の體裁殆ど全く平安朝の風を踏襲したに過ぎません。紀行の方には、反つて平安朝に見ない特長と見聞とを發見します。當時政治の中心が鎌倉にあつて、多數の上流社會の人は、京都に住した爲に、東西の交通が切りで、その往復に文學者があつた爲でありませう。この三紀行はいづれも東海道——東くだり——の紀行で、當時の旅行狀態が髣髴されます。

箱根路（十六夜日記）

廿八日。いづの國府(コフ)をいでゝ、はこねぢにかゝる。いまだ夜

深かりければ、

たまくしげ　はこねのまやを　いそげども　なほあけがたき　よこぐものそら

あし柄山はみち遠しとて、箱根路にかゝるなりけり。

ゆかしさよ　そなたの雲を　そばだてゝ　よそになしぬる　あしがらの山

いとさかしき山を下る。人の足もとどまりがたし。湯坂とぞいふなる。からうじてこえはてたれば、ふもとにはや河といふ河あり。まことに早し。木の多く流れるゝをいかにととへば、あまのもしほ木を、浦へ出さんとて流すなりといふ。

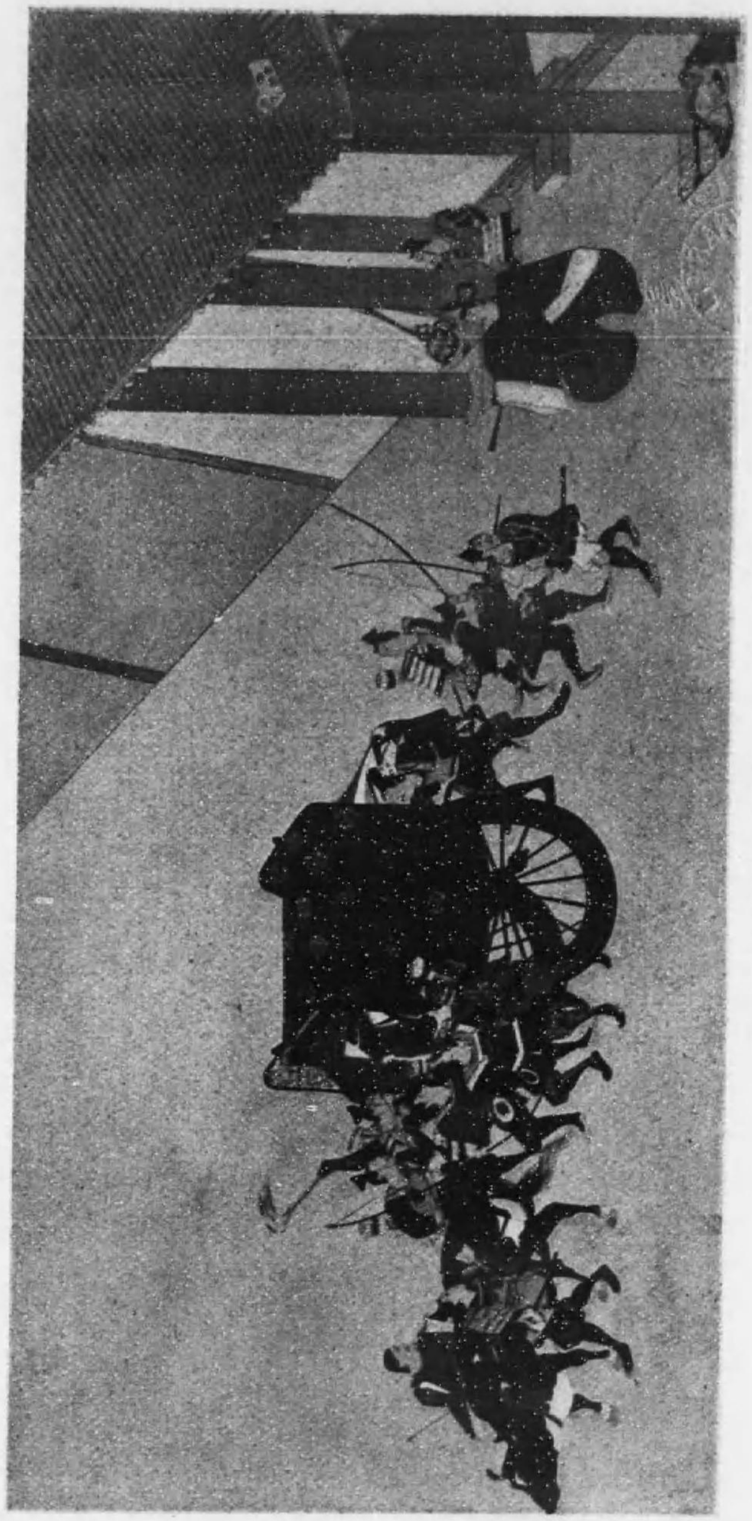
あづま路の　ゆさかをこえて　みわたせば　しほぎ流るゝ　早川の水

湯坂より浦にいでゝ、日くれかゝるにとまるべき所遠し。伊豆の大島までみわたさるゝ海づらを、いづことかいふととへど、知りたる人もなし。あまの家のみぞある。

あまのすむ　その里の名も　しらなみの　よするなぎさに　宿やからまし

まり子河といふ所を、いとくらくてたどりわたる。こよひは酒匂といふところにとゞまる。明日は鎌倉へいるべしといふなり。





平家物語圖會　傳住吉慶風筆

## 10. 戰記文　は鎌倉時代に

保元物語　平治物語　平家物語　源平盛衰記

室町時代に

太平記

があります。鎌倉時代の四は、源平闘爭のあとを記し、太平記は南北の戰亂を述べて居ります。保元平治二書は最初の事件である爲でもありませう、保元平治の亂を描く有樣、文章やゝ質實の傾がありますが、これ迄、所謂優にやさしい世界のみが描かれて居た所へ、こゝに劍戟の巷が書かれたのでありますから、その內容は勇壯活潑編中の人物は、勇怯、正邪の性情があらはされて、方面は一展開されました。また文章としては和漢の故事格言を博く引用して、人物事件を論評するあたりは、著者の博學を偲ばせます。また現世の成敗を見て過去の業報となし、人智の及ばない事に逢うて、不可思議な神佛の功德を說くあたりは、一々佛敎の影響深く民心に入つて居るのを思はせられます。保元物語に爲朝生捕の場を記して

……その中に十四五人選んで、わざと太刀をば持たせず、浴室の中へ亂れ入り、さうなく搦めとらんとす。爲朝少

しも騒がず、つと立て、十人手組して寄る所を、三人掻摑み、押合ひ、ひしひしとしめ殺して捨て、前後左右より續いて寄する二人をば摑んで引寄せ、頭と頭と打合はせ、ひしいで投げ捨て、一人をば湯桁に押當て、首ねぢ切つて投出す。或は拳にて胸をつかれ、のけざまに倒れて死す。或は腰の骨踏折られて、這々逃げければ、續いて入る者なし。湯屋の内震動して、男女周章(アハ)て迷ひ、走り出づ。さらば湯屋に火懸けて燒殺せとのゝしりければ、爲朝湯屋を蹴破りて出でけるが、柱を一本引拔いて折かつき走りければ、大勢追ひ來る。立歸つて打殺し、敲き殺し、散々に振舞ひけれ共、重病日數積つて合期ならぬ時分なかりける間、暫しこそ有けれ、敲手すくみ力弱りて、走り倒れけるを、者共走り寄り、是彼取附く程こそあれ、打重り摑み附く。暫しこそ拳にて打のけたれども次第に力疲れ、心は猛く思へども、おめおめと生捕られけり

……

とあるのは、ほんの一例でありますが、平安朝時代には決して見る事の出來ない事件であり、かつ筆致も頗る異つたものであるのに氣が附きませう。けれども保元平治の物語は、こゝに見た文章からいうても、どうも平家物語より先に出來たものではないやうにも思はれます。今





だゞ疑を存して、他日の研究に待つ事とします。

平治物語も大體これに近いものでありますから、進んで、**平家物語**　にうつります。

これはいふ迄もなく、平安朝末期に起つた源平の爭亂を描いたもので、結局平家が西海に落ち行いて、海底の藻屑と化した物語。一篇の悲劇であります。作者に就いては、古來いろいろの說もありますが、要するにわかりません。勿論佛學の深かつた、或人の筆になつたものでありませうが、そのあらはされた思想は、全篇を通じてよく當時の人心を物語つて居り、かつまた、その文調が頗る諷誦に便なものでありますから、遂に一種の謠物となつた程で、一面からは、この物語を國民詩と見る事も出來やうと思ひます。ともかくも文學としては、戰記文中第一位を占むべきであります。

壽永の天地を舞臺として、時代の力が生んだ、この活歷史は、實に小說よりも奇なものを演んじて、それが沈痛活達な筆に描かれたのでありますから、吾々の感興をそゝるのも、無理がありません。描かれた事實は、歷史上空前の事柄であります。藤原氏の衰運に乘じて、或一

氏がこれを倒したなら、それ程でも無かつたでせうが、一時平家が立ち更に源氏が覇を稱する迄、兩々相對して、互に養ひ來つた潜勢力を一時に活動させたのでありますから、多くの悲劇を生じたのはもとより、又そこに勝利者の勇壯もあらはれて、花紅葉の綾を彩つたといふ有樣であります。

これに加へて、これ迄に隆盛となつた所謂物語——想像の天地を描いた——泰平の樂天地を描いた——とは、全然その趣を異したのでありますから、事件も文致も、共に吾々の心をそゝるものが多いのであります。平家物語は決して純然たる歴史——史實を中心とする——でありません。平家物語は史實にあらずと論せられた事もありますが、それは當然の事で、作者の想像も交りましたらう、傳說の誤つたものもありましたらう、而もそれが文學的の價値を一層深からしむるであります。

時代が生んだ文學。そして、その時代そのものが、悲慘でありますから、これを文學化したものは、更に人の心を引つけるに十分なものがある筈であります。まことに清盛の一生こそ、この一編を通じて、舊社會を覆滅し





新社會を樹立せんとしたもので、習慣的勢力——藤原氏の——に反撥して起つた清盛は、徹頭徹尾自己の威力に信賴して、獅子奮迅の大活動を續けたのであります。六十余州は今や、彼れ清盛の手に新光明を見んとしたのでありますが、時代の勢力は、一層彼の力よりも優つたものがあつたと見えて、更に再度の爭亂を生じて一門の榮華は、一夜の夢となつたのであります。榮枯盛衰、生者必滅——南無阿彌陀佛——と稱へる、佛家の見とこの事件とは、こゝに全く符合したのであります。

「祇園精舍の鐘の聲諸行無常の響あり」

と平家物語に書き起したのは、實にこの兩者が合した自然の叫でありませう。こゝには、一例として「小原御幸」の一段を抄錄します。

かゝりし程に法皇（後白河）は、文治二年の春の頃、建禮門院の小原の閑居の御住居、御覽ぜまほしく思し召されども、二月三月の程は、嵐烈しく餘寒も未だ盡きず。峯の白雪絕えやらで、谷の氷柱も打解けず。かくて春過ぎ夏立ちて、北祭も過ぎしかば、法皇夜をこめて、小原の奥へ御幸成る……遠山にかゝる白雲は、散りにし花のかたみなり、青葉に

見ゆる梢には、春の名殘ぞ惜まるゝ。卯月廿日餘のことなれば、夏草の茂みが末を別け入らせ給ふに、始めたる御幸なれば、御覽じ馴れたる方もなく、人跡絶えたる程も、思し召し知られて哀なり。

西の山の麓に、一宇の御堂あり。卽寂光院是なり。ふるう造り成せる泉水木立。よしある樣の所なり。甍破れては霧不斷の香を焚き扉落ちては月常住の燈を掲ぐとも、かやうの所をや申すべき。庭の若草茂り合ひ、青柳絲亂りつゝ、池の浮草波に漂ひ、錦を曝すかとあやまたる。中島の松にかゝれる藤波の、うらむらさきに咲ける色、青葉まじりの遲櫻、初花よりも珍しく、岸の山吹咲き亂れ、八重立つ雲の絶間より、山郭公の一聲も、君の御幸を待ち顏なり。法皇是を叡覽ありて斯くぞ遊ばされける。

池水に　みぎはの　櫻散りしきて　波の花こそ　盛なりけれ

古りにける岩の絶間より、落ち來る水の音さへ、ゆゑよしある所なり。綠蘿の垣、翠黛の山、繪に書くとも筆に及びがたし。

さて女院の御菴室を叡覽あるに、軒には蔦、蕣這ひ懸り、しのぶ交りの忘草、簞瓢屢空し。草、顏淵が巷に滋し。藜藿深





く鎖せり。雨、原憲が柩を濕ほすともいひつべし。杉の葺目もまばらにて、時雨も霜も置く露も、洩る月影に爭ひて、溜るべしとも見えざりけり。後は山、前は野邊、いさゝ小笹に風騷ぎ、世にたへぬ身の習とて憂きふし茂き竹柱、都の方の音づれは、間遠に結へるませ垣や、僅に言とふものとては、峰に木傳ふ猿の聲、賤が妻木の斧の音、是等が音づれならでは、正木の葛、青蘿、來る人も稀なる所なり。

法皇「人やある人やある」と召されけれども、御いらへ申す者もなし。稍ありて老い衰へたる尼一人參つたり。「女院はいづくへ御幸なりぬるぞ」と仰せければ、「此上の山へ花摘みに入らせ給ひて候ふ」と申す。「さこそ世を厭ふ御習とはいひながら、左樣の事に仕る奉る人も無きにや、御いたはしくこそ」と仰せければ、此尼申しけるは、「五戒十善の御果報盡きさせ給ふによりて、今かゝる御目を御覽ぜられ候ふにこそ、捨身の業に、何かは御身を惜ませたまひ候べき……とぞ申しける。この尼の有樣を御覽ずれば、身には絹布のわきも見えぬものを、結び集めてぞ著たりける。あの有樣にても、かやうのこと申す不思議さよと思し召して「抑汝はいかなるものぞ」と仰せければ、此尼さめざめと泣きて、しばしは御返事にも及ばず。やゝありて涙を押へて「申すにつけて憚覺え候

へども、故少納言入道信西が女、阿波内侍と申すものにて候ふなり。母は紀伊の二位、さしも御いとほしみ深くこそ候ひしに、御覽じ忘れさせ給ふにつけても、身の衰へぬるほど思ひ知られて今更せん方なくこそ候へ」とて、袖を顏に押し當てゝ、忍びあへぬ樣、日も當られず。法皇「實にも汝は阿波内侍にてある。ござんなれ。御覽じ忘れさせ給ふぞかし。何事につけても、只夢とのみこそ思し召せ」とて、御涙せきあへ給はねば、供奉の公卿殿上人も、不思議の事申す尼かなと思ひたれば、理りて申しけりとぞ、各感じ合はれける。

さてかなたこなた叡覽あるに、庭の千草露重く、籬に倒れかゝりつゝ、外面の小田も水越えて、鳴立つひまも見え分かず。女院の御庵室に入らせおはしまし、障子を引あけて叡覽あるに……女院の御歌とおぼしくて、

思ひきや　み山の奥に　住居して　雲井の月を　よそに見んとは

さて傍を叡覽あるに、御寢所とおぼしくて、竹の御竿に麻の御衣、紙の衾など、懸られたり。さしも本朝漢土の妙なる類、數を盡し、綾羅錦繡の裝、さながら夢にぞなりにける。法皇御涙を流させ給へば、供奉の公卿殿上人も、まのあたり見奉りし事ども、今のやうにおぼえて、皆袖をば絞られける。





やゝあつて、上の山より濃き墨染の衣著たりける尼二人、岩の岨路を傳ひつゝ、下り煩ひたる樣なりけり。法皇「あれはいかなるものぞ」と仰せければ、老尼涙を押へて「花筐臂にかけ、岩躑躅取り具して持たせ給ひて候ふは、女院にて渡らせ給ひ候ふ。妻木に蕨折り添へて持ちたるは、鳥飼の中納言維實が女、五條の大納言國綱が養子、先帝の御乳母、大納言の典侍の局」と申しもあへず、泣きにけり。法皇御涙を流させ給へば、供奉の公卿殿上人も、皆袖をぞ濡されける。女院は世を厭ふ御習といひながら、今かゝる有樣を見え參らせんずらん恥しさよと、消えも失せばやと思召せどもかひぞなき。宵々毎の閼迦の水、結ぶ袂もしをるゝに、曉起の袖の上、山路の露も滋くして、しほりやかねさせ給ひけん。山へも返らせ給はず。又御庵室へも入らせおはしまさず。あきれて立たせましましたる所に、内侍の尼參りつゝ、花がたみをばたまはりたり。

中略した所もありますが、大概の筆致は窺ひ得ると思ひます。後の謠曲「小原御幸」などゝ比べて讀めば、一層興趣の深い事でせう。

平家物語と何れが先か後かといはるゝものに

源平盛衰記

があります。その前後はわからないと申した方が穩當でありますが、內容は平家が簡明で、盛衰記が詳細であります。けれども、その行文の流麗所謂文學的價値にいたつては、盛衰記は到底平家に及ばない所と思ひます。勿論盛衰記というても立派な作で價値の無いものではありませんが、こゝには、たゞ平家の悽惋を推して終りませう。

**大平記**は、作者また不明。花園天皇の御世から後村上天皇の御時に及んで南北朝の分裂、各所の戰況、烈士の物語などを記載して、その體は平家盛衰記に倣うて居ります。文體は一層雄大で、絢爛の風がありますが、餘りに華麗に過ぐる誹もあります。平家に比して、世の中の急轉直下といふ程の事がなく、一旦戰亂を味うた民心が、更に再び異體の戰亂、而も甚だ長期のにえきらない戰爭が續いた爲に、源平のそれほど人心を刺戟しなかつた事が、恰も平家と太平記との行文の上にもあらはれて居ります。

**11. 謠曲 狂言** これは全く室町時代に發達したもので、委しくは「猿樂の能」といふ所謂「能樂」に用





ゐられた歌曲であります。昔からこの能樂は神事に用ひられて來たのですが、足利將軍義滿殊にこれを好んで、他の舞樂と調和せしめ、樂師をして新しい曲も作らせて舞と共に文學として新に起つたのであります。その結構の大樣は、先づ幽靈があらはれて、往事を語り、高僧の回向によつて、成佛するといふのが多いので、佛敎の影響はもとより、詞句には古文辭を多く補綴してありますが、それがよく和諧して、珠を轉ばすやうな調子に富んで居ります。恐らく足利時代は支那——明代——との交通再び頻繁となりまして、僧侶も多く支那に渡航し、宋元の文化を傳へた所から、かくの如き舞樂といふものも、自然と勃興して、元(ゲン)の戲曲に學んで、この謠曲が新作せられたのでありませう。謠曲の材料には平安朝の戀物語と鎌倉時代の武勇物語とが最も多く、これを後の淨瑠璃の世話物時代物と區別するのに比べる事が出來ます。

**狂言**は能樂の間に演ぜられた一種の滑稽劇で、謹嚴な能樂と、酒脫人の顏を解かしむる狂言とは、武家一日の淸き消閑となつたのであります。その構想は、多く、罪もない失敗談で、中にも迂愚な大名を中心としたものが

多く、たゞ千篇一律の點が文學的には最も惜しい所であります。

謠曲　松風の一節

汐汲車わづかなる浮世に廻るはかなさよ。波こゝもとや須磨の浦の月さへぬらす袂かな。心づくしの秋風に、海は少し遠けれども、彼行平の中納言關吹き越ゆると詠め給ふ浦曲の波の夜々は、實に音近き海士の家、里はなれたる通路の、月より外は友もなし。實にや浮世の業ながら、殊に拙き海士小舟の、渡りかねたる夢の世に、住むとや云はん、うたかたの汐汲車、よるべなき身は海士人の袖ともに、思を乾さぬ心かな。かくばかり經がたく見ゆる世の中に、羨ましくも澄む月の、出汐をいさや汲まうよ。影はづかしき我姿、忍び車を引く汐の跡に殘れる溜水、いつまで澄みははつべき。野中の草の露ならば、日影に消えも失すべきに、是は磯邊に寄藻かく海士の捨草、いたづらに朽ちまさり行く袂かな。

狂言の作例は、こゝにはぶいて、これを讀みたい人には

大和田建樹　謠曲通解　狂言詳釋

などをすゝめます。

**12. 雜史**　國文で書いた雜史類には

十訓抄　古今著聞集





などがあり、首尾一貫した歴史ものには

神皇正統記　增鏡

があります。十訓抄と古今著聞集とは、斷片的の事實を集めて。教訓の材としたものもありますが、著聞集は、また當時の世相を知るに、有益な文字に富んで居ります。

神皇正統記は北畠親房の著。親房は花園天皇の御世に出でゝ朝に仕へ、諸官に歴任して、後村上天皇の正平六年、三宮に准ぜられた南朝の忠臣であります。常に南朝の恢復を謀り、報國の志厚く、遂にこの歴史を書かしめたのでありますが、その主旨とする所はもとより國體の所以を明にし、神器の相承から南朝の正統を論じた事はこの書名にもあらはれて居る所であります。

增鏡は一條冬良の著とせられて居りますが、これも確かな事はわかりません。後鳥羽天皇の朝から後醍醐天皇の隱岐還幸頃までの事を述べてあります所から見れば、建武中興後ほどなく書かれたものでありませう。編述の體裁は大體「大鏡」「今鏡」に似て文章も優美莊麗であります。「水鏡」「大鏡」「增鏡」をあはせて三鏡といひます。

これ等の文體としては、特にこゝに掲げる程の事はないと思ひます。增鏡を讀むには

和田英松　佐藤球　　增鏡詳解

が便利であらうと思ひます。

× × × × ×

これを以て、鎌倉室町時代の文學を通覽したのでありますが、要するに、平安朝とは民心一轉、平安京の狹い範圍を脱して、文化が關東といふ方面に發達した爲に、文學の世界もやゝ廣くなりまして、堂上の文學は全滅といふ程の事もなく、一方武士の文學が比較的庶民にも及びまして、この期の末には江戸時代、文華の絢爛たる苔をふくんで、まさに南風の來るを待つといふ風情があつたのであります。

## 第六章　江戸時代

**1. 時代の概觀**　慶長元和以來明治以前まで凡そ二百六十年の間、政治の實權は武門に存し、文化の指導者としても武人が其の任にあたつたのですが、その武人は鎌倉武士の無骨一片なのとは、全く異つて居たのであり





ます。德川家康が、初期に當つて、文敎の興隆に意を注いだのも、勿論その因となつたでせうが、此の期を通じて文運は益隆昌に趣きました。

德川幕府、施政の大方針は、道德主義——儒敎から出た——でありましたから、從つて漢學の興隆は、鎌倉室町の衰微時代を經て復び平安朝も及ばない盛況を呈したのであります。卽ち儒學攻究の學者間には治國の要を說くもの、修德の道を講ずるもの、訓詁を專らにするもの、詩文を究むるものなど各方面の大家が輩出しまして、而も其間自ら分立相競ふ有樣を呈するほどに至りました。要するに、曩にも述べた通りの道德主義でありましたから、その文藝も多く勸善懲惡を旨とした傾向は、前期に於ける厭世主義中心の傾向と相似た點があります。

儒學の興隆と共に、愕然として眼ざめたのは所謂國學であります。これは國體の尊嚴と斯學の主張とを調和せしめて、純日本の叫をあげたのであります。一體これ迄に觀て來た、國文學の各種には哲學的分子を含んだものが、殆ど稀で、佛敎の因果觀、或は儒敎の宗敎的乃至哲學的思索も相當に國民間に流布して居りましたとはいふ

ものゝ、この二を除いた純日本の哲學的思索のあらはれといふものは、文藝上に見なかつたのであります。勿論それに類した或ものはあつたでありませうが、佛儒二敎に刺戟されて段々複雜になつた生活は、こゝにはじめて日本人の內的思索に及ぼうとしたのであります。これが國學勃興の中心でありまして、これには古典の研究が必要でありますから、自然前時代の文學が、此の期に至つて、大に愛せられかつ闡明せられたのでありませう。國學者のなかには古歌古文の研究に從ふもの、神道、國史の研究に從ふもの、制度、考證、語學の研究に從ふもの、各皆國體の發揚を基としました。

德川時代は殊に階級制度のやかましい世の中でありました。武士の家に生れゝば、生涯二本指と株がきまり、町人の家に生れゝば、終世算盤をはじく運命であつたのであります。上流——武士——の間に行はるゝ文學は、町人輩の近づくべからざるもの、下流——町人——の遊戲文學は、武士の顧みもせぬものとなつて居たのでありますが、この階級といふものも、末期に及んでは段々箍がゆるんで、これを打破つたのが、明治維新であります。





この氣運は、町人の意氣よく腰拔武士を飜弄した所に、あらはれて居るので、情事に事よせて助六が、鳥居新左衞門をやつつける芝居は、今日までもなほ民衆の喝采を受くる所で、武士の政府が武士の恥められる芝居を禁止する勢力さへ無くなつてしまつて居たのであります。

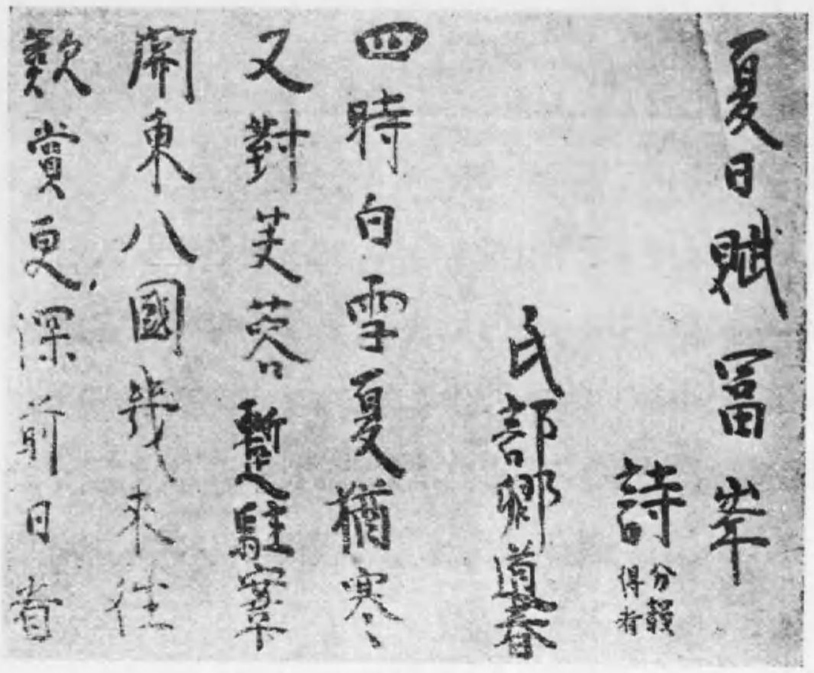
印刷の術が文化の進運に、非常な助をなすものである事は、各國の歷史が物語つて居ります。奈良朝時代旣にこの術が傳はつて居た事は、述べましたが、其後この事は他の物質文明と並行して進步する事なく、纔かに經文の印刷に應用せられて居た程でありました。所が家康が文敎を重んじた心から、朝鮮の活字に學んで、活版の術を興さしめました。これが西洋活版術のやうに、便利に行かなかつた爲、進步は一旦止みましたが、他に木版——整版——の事が、中期以來盛になりまして、文運の進步には非常な貢献をなしたものであります。單に文字を印刷するばかりではなく、繪畫にも及んで、艶麗な版畫——浮世繪——を生ずるに至りました事は、我邦の文學史——文明史——を通じて、殊に此の時代に注意せねばならない一事であらうと思ひます。

江戸幕府時代のうち、文藝上の區分を申しますれば、前期、卽ち元祿享保の頃を中心にしては、京坂の地が榮えました。所謂上方文學であります。それに次で、後期卽ち文化文政を中心にしては、江戸に文學の花が咲いたのであります。これを江戸文學といひます。この二は自ら性質の異ふ點もありますが、こゝにこれをいふのは、所謂新興の文藝に就ていふのでありまして、舊來の文學——研究としての文學——は勿論江戸幕府の周圍にあつたのであります。ですから、江戸期の文學を見る時は、一に傳來の文學と他に新興の文學とを、先づ區別して、見て行く事が必要であります。

**2. 漢學** 曩にも平安朝とこの期とは、日本文學史中最も文學の榮えた時であると申しましたが、この期の文藝復興の魁をなしたものは、先づ漢學であります。藤原惺窩と林羅山とは斯界の先驅者であります。惺窩は冷泉家の出で、はじめは、佛門に入り五山の間にその名が高かつたのでありますが、後儒敎に志して遂に僧門を脫しました。家康の伏見城に聘せられて經史を講じた事があります。惺窩の着眼廣大な事は、政治家家康の心を養






夏日賦富岩
詩 分韻得者
氏部卿道春
四時白雪夏猶寒
又對芙蓉暫駐顏
關東八國幾來往
歎賞更深前日看

林羅山(道春)の筆蹟

うたものが、多かつたに相違ありません。然し、惺窩は後、門下の羅山を推擧して、幕府の帷幄に參せしめ羅山は江戸に下つて、その律令制度の制定に參與しました。それから後は、林家は代々大學頭といふ事になつて、儒學を以て幕府に仕へました。この林家の學といふのは、朱子學でありまして、朱子學は旣に南北朝の頃から我邦に入つては居りますが、德川時代を通じて大に興隆の氣運に向ひました。この朱子學のほかに陽明學もまた盛でありました。有名な中江藤樹は近江聖人と稱せられるほ

どで、實踐躬行を勵み、主として孝經を講じ、近隣皆その德に服したといふ事であります。また、熊澤蕃山は、この門から出て備前侯に仕へ、大に治績を擧げました。かくの如く、朱子學、陽明學は、此の期を通じて、上下に行はれたのでありまして、これが卽ち前に申した道德主義の世の中を形成したのでありませう。漢文そのものとしては、復興の氣運と共に立派な文章が書かれ詩が賦せられました。鎌倉時代の變體的漢文は衰へて、其の殘影をとゞめたに過ぎません。

なほ元祿に下つては、將軍綱吉が漢學を好んで、しばしば儒者を引いて經書を講ぜしめた事がある爲に、各諸侯も爭うて儒者を聘するといふ風になり、漢學は頗る熾になりまして、學者一時に輩出しました。當時幕府には羅山の孫鳳岡が居りました。京都の人木下順菴は江戸に出て一家をなし、其の學博通不偏を以て、きこえましたが門下に雨森芳洲、新井白石、室鳩巢、祇園南海など著名の士が多くあります。また、京都に伊藤仁齋が起つて、朱子學は孔孟の眞意にあらず宜しく古にかへるべしというて、別に古學を稱へました。これを復古學派といひま





す。その子の伊藤東涯もまた博覽の學者で、よく父の道を祖述した人であります。

この時、江戸には、荻生徂來が出ました。等しく朱子學を駁しましたが、これは六經を重んじて、古文辭學を立て、復古學派に對して、東西相對峙の姿となりました。徂來の門人、太宰春臺は經義に精しく、服部南郭は詩文に長じて居ります。

元祿の世は、漢文に國文に、研究に創作に、何れの道にもみな、大きな發展をしたのであります。漢文界の興隆は大體、以上のやうな有樣です。

**3. 歌謠** 和歌は奈良朝以來我國民に離るべからざる文學で、此の期にも平安朝の系統を帶びたものと別に萬葉の古風を悅ぶものと、互に競うて流行しました。室町時代に和歌から生じた連歌は、俳諧となり、此期には俳句——發句——となつて非常な流行を見ました。發句といふ詞は俳句のはじめの句といふ意味で、最後の句を揚句といひました。そこで「揚句の果」といふ詞が今日も普通に用ひられて居ります。なほこれに類するものでは狂句——川柳——などもありまして、その諷刺と滑稽と

は滑稽文學の面白さを味はせます。謠曲狂言に似たもので、物語草子の系統をも合せた戯曲——淨瑠璃——の發達は、所謂上方文學の大產物でありまして、特に此の期に注意すべきものである事は、既に普く人の知る所であります。

**和歌** は別に新機軸を出したほどの事は、全體を通じて無いのではありますが、隆盛は隆盛でありました。そのはじめ、細川幽齋と、木下長嘯子（勝俊）とは、斯界の人物でありまして、幽齋は古今傳授の繼承者を以て有名になつて居ります。ともかくも戰亂の間に、前時代の歌道歌學を傳承した効は傳統的思想の勝つた、この時代としては、大事件でありましたでせう。其後、下河邊長流、釋契沖、賀茂眞淵、本居宣長などから香川景樹其門下、熊谷直好などまでを概觀しますと、少々づつは、風の變つた詠歌もあります。今その代表的なものを掲げて見ませう。

下河邊長流

夏の夜の　深草山の　郭公　伏見のゆめの　おとになくなり

釋契沖





初瀬のや　里のうなゐに　宿とへば　霞める梅の　立枝をぞさす

賀茂眞淵

見渡せば　天の香具山　畝火山　あらそひたてる　春霞かな

本居宣長

里遠み　たどる末野の　夕ぐれに　しるべうれしく　立つ煙かな

小澤蘆庵

山かげに　一木のこりて　古松の　吹雪にむせぶ　聲ぞかなしき

加藤千蔭

おほ空を　霞も霧も　へだてねば　夏こそ月は　見るべかりけれ

村田春海

面影も　見し世に似たる　秋なれば　月の鏡も　むつまじきかな

清水濱臣

美酒に　我ゑひにけり　かしらゑひ　手ゑひ足ゑひ　我ゑひにけり

香川景樹

殘りなく　松の姿は　あらはれて　いまだはなれぬ　山の端の月

熊谷直好

打ちしきる　麓の里の　鳥が音に　明けこそわたれ　三保の松原

木下幸文

鳴きつづく　道の長ての　蟲の音に　折々まじる　水の音かな

中島廣足

星まつる　庭の燈火　またたきて　更くる夜涼し　秋のはつ風

大隈言道

親泣けば　子さへ泣くなり　世の中の　せんすべなさも　何もしらずして

橘曙覽

荒駒の　草かむ音に　何がしの　宿直する夜と　人もしりけん

太田垣蓮月

はらはらと　落つる木の葉に　交り來て　栗の實ひとり　土に聲あり





このほか、長歌も所謂萬葉學者古學者の間に多少は、行はれましたけれども、短歌に比して、流行盛大と申すわけには至りませんでした。和歌と形の上では、全く同じものに、狂歌があります。

唐衣橘洲

菜もなき　膳にあはれは　知られけり　しぎやき茄子の　秋の夕ぐれ

大屋裏住

うぐひすも　蛙も同じ　歌なかま　經よむもあり　歌よむもあり

手柄岡持

金なきと　際のなきとに　かへてまし　病ある身と　苦勞ある身と

智惠内侍

ねぶりねぶり　どううつゝやら　空蟬の　抱子もぬけの　から衣かな

蜀山人

生醉の　禮者を見れば　大道を　横すぢかひに　春は來にけり

山吹の　はな紙ばかり　金入に　みの一つだに　なきぞかな

しき

宿屋飯盛

歌よみは　下手こそよけれ　天地の　動き出しては　たまるものかは

多くは古歌をもじつたものでありますが、前時代には決して見なかつた文學の一で、これは當時他の滑稽ものと等しく、こんな氣風が町人の間に起つたのでありませう。武士に頭のあがらなかつた町人。和歌は上流の專有とあつた時代。町人の心の中には、こんな洒落や滑稽に世の中を茶にして見たい氣分もあつたのでありませう。

**4. 俳諧　發句**　連歌から一轉して俳諧を生み、再轉して發句を生むに至りました。守武、宗監などが、連歌の餘りに規則づくめとなつて清新の氣風がないのを慨して、俗世間的な調を稱へたのが、形は同じでありますけれども、これを俳諧といひました。然しその後に出た貞德（松永）は、更にこれを古にかへして、古風を稱へ、卑俗にのみ流るゝ傾向を一層ひきしめたのであります。貞德は幽齋に和歌を學んだ人でありますが、和歌は到底その技ではありませんでした。次に出たのが西山宗因で





此の人は舊格を墨守することなく、好んで世の諺、漢字、字あまりなどを用ひ、寧ろ放縱に近い一體を創めて、これを壇林風と稱し、大阪を中心に、かなり勢を得たのであります。「油糟」といふ書物は貞德の著。今その一部を抄錄してみませう。

秘藏の花の枝をこそ折れ
正月の餅で泣く子をすかしかね
十王堂に秋かぜぞふく
六波羅の月やむかしを思ふらん
人間萬事いつはれる中
わが君の正直さにもうちこみて
變らじとさらば誓紙を下されよ
内證で年はいくつと聞かまほし
粟津の原の茶こそ苦けれ
桃食ひし口は後まであまくして
あまり煙の立つぞ悲しき
玉鹽釜の景よきうらに月出でゝ
淋しくもあり淋しくもなし
そろそろと隣のできる草の庵
人丸の歌の味のうまさよ

ほのぼのと赤くなりたる柿むきて

といふやうなものであります。そのほか貞德にはなほ「淀川」「御傘」の著などもあります。

**5. 芭蕉** 貞德の門に野々口立圃、安原貞室、北村季吟などが出て、各主張のもとに立ちましたが、宗因の壇林風が、一時はその名を專らにしまして、宗因門下の井原西鶴、田代松意などが出た頃は非常な勢で他はみな壓倒された有樣でしたが、漸々またその弊も認められて、何か他に新しいものを望むの風がありましたとき、卓絶の才を以て、天下の俳風を一變したものは、實に松尾芭蕉その人でありました。芭蕉は、

松尾芭蕉像





一に桃青と號しました。この號のよつて來る所は、彼の崇拜措かなかつた支那一世の大詩人李白に對したものと、傳へられて居ります。ですからその人と爲りも、また相似たものがありますので、歌人西行を心の友として、芭蕉の足蹟は全國に至らざるなしと云はれるほどであります。今日到る所に芭蕉塚のあるのは、誰も知る所でありませう。

古池や　蛙飛こむ　水の音

に至つて、芭蕉は果然解悟の境に入り、人生の奥秘を得たといはれて居りますが、文學の極致が、かういふ風に見られて來た事は、確かにこの時代でなければ見られない現象で、人生の複雜になりゆくと共に、其所に哲學的思索の觀念が啓けて來たのでありませう。芭蕉が、技巧はそもそも末、中心の感情が基であると稱へ來つた、平素の主張は、この一句に自信を得たと傳へられます。仰、芭蕉の俳句は、そのはじめ多く漢語を用ゐて絢爛の調を主としたものから、中頃花も實も並せ得んとして苦吟した時代、終には切磋琢磨の功を得て、平易の中に反つていふべからざる情趣を探知し得たといふ、この三轉を經

たものであります。玉石混淆は天才詩人の常でありまして、西行に見たと同樣、芭蕉もまた興に乘じ機に應じて、大小併せなし、淸濁併せ呑むといふ氣風が、ありまして、其所に芭蕉の大を認むる所以もあります。「不易流行」といふ事と「さびしをり」といふ事は芭蕉が俳壇に立つてその門下に箴言としたものであります。不易とは萬代不變の美、流行とは時を逐うて推移するの美を指したもので、俳人は、すべからく、不變の美に併せて時流の現象を逸すべからずと說いたものであります。「さびしをり」とは「さび」と「しをり」とであつて、心は幽寂に、姿は瀟洒ならざるべからずと說いたのであります。畢竟、芭蕉は禪門に遊んで不立文字の奧義を窺ひ、その大悟と共に文學上の活眼が開かれ、これを以て文學的の態度としたものでありませう。

夏草や　つはものどもの　夢のあと

荒海や　佐渡に横たふ　天の川

塚も動け　我泣く聲は　秋の風

かけ橋や　命をからむ　蔦紅葉

猪もともに　吹かるゝ　紅葉かな





おとろへや　齒にくひあてゝ　海苔の砂

ほろほろと　山吹散るか　瀧の音

白露を　こぼさぬ萩の　うねりかな

飲みあげて　花いけにせん　二升樽

麥飯に　やつるゝ戀か　猫の妻

三井寺の　門たゝかばや　今日の月

奈良七重　七堂伽藍　八重櫻

花の雲　鐘は上野か　淺草か

古鄕や　臍の緒に泣く　年の暮

これらは、その一部でありますが、餘韻溺々、十七文字の小に、よく大景を含ましめて、人生の秘密に觸れざれば止まぬといふ態度が窺ひ得るではありませんか。

芭蕉の門下に

榎本其角　服部嵐雪　森川許六　各務支考　越智越人　向井去來　內藤丈草　河合曾良　志田野坡　立花北枝

の十哲がありまして、よく師の風を傳へ、なほ他にも岩田涼菟　山口素堂　天野桃隣　大淀三千風　のやうな名匠が出まして、この一派は遂に俳壇を乘り取つたのであります。これを正風といひます。

安永天明の頃に至つて、俳風の改新を圖つたものに、谷口蕪村　大島蓼太　加藤曉臺などがあります。横井也有　加賀の千代なども同時代の人で、下つては、天保の頃、成田蒼虬　櫻井梅室　田川鳳朗　などその頃の三俳人として世に知られた事もあります。

谷口蕪村畫並詠

榎本其角

鶯の　身をさかさまに　初音かな

夕納涼　よくぞ男に　生れたる

夕立や　田をみめぐりの　神なれば

明月や　疊の上に　松の影





鐘一つ　賣れぬ日はなし　江戸の暮

服部嵐雪

梅一りん　一りんづつの　あたたかさ

文もなし　口上もなし　粽五把

黄菊白菊　そのほかの名は　なくもがな

向井去來

應々と　いへどたゝくや　雪の門

元日や　家に讓の　太刀はかん

湖の　水まさりけり　五月雨

内藤丈草

取りつかぬ　力で浮む　蛙かな

春雨や　ぬけ出たまゝの　夜著の穴

各務支考

牛叱る　聲に鳴立つ　夕かな

そこもとは　凉しさうなり　峯の松

谷口蕪村

鶯の　なくや小さき　口あけて

春水や　四條五條の　橋の下

春の海　ひめもすのたり　のたりかな

御手討の　夫婦なりしを　更衣

以上に述べたこの俳味を以て文を綴つたものを俳文といひます。芭蕉の「奥の細道」は實にその魁をなすもので、横井也有の「鶉衣」また斯道の名著であります。

和歌に出た狂歌と同樣に、俳句に出た**狂句**——川柳——も等しく滑稽、皮肉、諷刺のものでありまして、川柳といふのは柄井川柳といふ人が、江戸に點者をした爲に起つた名であります。その集を「やなぎだる」といひまして、今百數十篇を存します。

大屋から　勅使をうける　月見をし
人の尾を　大みそかには　狐が見
去つた翌日　ものを探すに　かかつて居
唐人も　二十四いろに　子をいぢめ
末長く　いびるさかづき　姑さし
わらぢくひ　までは能因　氣がつかず
風ふけば　どころか　女房あらしなり
何とも　申しかねぬから　かりに來る
船頭の　居所にこまる　たから船
居候　三ばいめには　そつと出し
ねがはくば　娘の死水　とる氣なり
よつ引いて　ひやうとはなさね　案山子かな





**6. 淨瑠璃　脚本**　元祿の世は、束縛と傳統とを脱して、自由に活んとした時であります。卽ち個性發輝の時で、徒らに古人の糟粕を嘗めない氣風のあつたのは俳句に芭蕉を見出したと同じく、戯曲に於ては實に、近松門左を得たのであります。近松は巢林子と號し、名聲一時に高く、その作物も、或は英國のシユークスピヤに比べられるほどでありますが、その傳記は至つて不明。生國もわからず、終焉の地も知る由がありません。そのはじめ井原西鶴に學んだと傳へられますが、近松は西鶴の下流に立ち難く、方面を別にして、遂に淨瑠璃を大成したのであります。京都にあつては、縉紳一條家に仕へて位階までも授けられたといはれますが、後、都人士の間に評判の高かつた歌舞伎の脚本を、都萬大夫座の爲に書いた事もあるといひます。これも餘り面白くなかつたのでせう、終に大阪に出て、道頓堀に竹本座を持つて居つた、操人形芝居の太夫——竹本義太夫(筑後椽)——と相結んで、その淨瑠璃に筆を執りました。其以前宇治加賀椽、井上播磨椽の爲にも書いた事があるのでありますが、貞享年間竹本座の座附作者となつて以來が、專ら門

左の門左たる才能を發揮した頃であります。今日の東京に於てさへ、淨瑠璃を呼んで義太夫と通稱するほどでありますから、當時大阪の義太夫が美音の名手であつた事は疑ありません。これに巢林子の靈筆が加はつたのでありますから、當時の大阪市民が、新藝術の妙に醉はされて、喝采又喝采の大入を續けたのも無理のない事であります。近松の作は全體を通じて、人情の微を穿つて、その文中にあらはれる人物が一々眞に迫る有樣が、他に見られない特長であります。近松の作を大別すれば時代物と世話物とになります。時代物といふのは、世界を史上の事實又は人物にとつたものでありますが、元祿の世は現實主義でありましたから、作中に出て來る武士、義經も辨慶も、その當時の人物に等しい口調を以て綴られ、あらはされて居るのは面白い事であります。世話物といふのは、眼の當りの事件を捕へて、早速淨瑠璃に作り上げあやつりにかけて、市民の喝采を博せんとしたものであります。この兩種は勿論同時に行はれたのでありますが、當時人形芝居の本體といふものはやはり、時代物にあつたのでありまして、世話物は二番目ものとして、餘





興の爲にせられた傾向があります。近松自身も、その最も意を注いだ所は、やはり時代物にあるので、當時の人々も、またこれを迎へて、國姓爺合戰、曾我會稽山などには寢食を忘れてうつゝを拔かしたのでありませう。然し曾根崎心中、天の網島のやうな人情ものは、なほ全然舊習の束縛を脫する事の出來なかつた當時の人には、これらが不朽の大作である事は、まだ認められなかつたのであります。

巢林子の文章は、實に自由自在でありまして、その詞藻の豐富な事は、古語、漢語、佛語、或は西洋語に及び一度筆を執つて紙面に向へば、千言萬語立どころになるといふ有樣であります。初期の作物は、題材を謠曲にとつて、その文辭さへ、そのまゝを用ひたものがありますが、彼の天才は、作の進むに從つて圓轉、莊重、また洒脫、實に端睨すべからざるものとなりました。蓋し、我邦に生じた大文豪を以て許すに、誰人も吝ならざる所でありませう。

國姓爺合戰の一節

かゝる所に勢子のもの、群り來る其中に、大將とおほしきも

の、大音擧げ

「ヤアヤアうぬはいづくの風來人、我高名をさまたぐる。其虎は忝くなくも主君右將軍李踏天より、韃靼王へ獻上の爲狩り出したる虎なるぞ。早々渡せ。異議に及ばず打ち殺さん。しやぐわんしやじぐわん」

と喚きける。李踏天と聞くよりも、願ふ處と笑壺に入り。

「ヤア餓鬼も人數、しほらしい事ほざいたり。身が生國は大日本、風來とは舌長し、左程欲しがる虎ならば、主君と賴む李踏天とやら、石花菜(トコロテン)とやら、こゝへつき出し詫事させい。直に逢うて用もある。左もない內はいかなこと、ならぬならぬ」

と睨め付くる。

「ヤア物ないはせそ。打ち取れ」

と、一度に劍をばらりと拔く。心得たりと護符を虎の首にかけ、母の側に引き据うれば、繫ぎし如くに働かず。オヽ心易しと、太刀差し翳し、群る中へ割つて入り、八方無盡に割り立て割り立て、撫で捲る。引卒(セコ)の大將安大人、官人引き具し立ち歸り、おのれ老耄餘さじと、一文字に切りかゝる。猶も神明擁護の驗、神力虎に加つて、勃然(ムツク)と起きて身慄(ブルヒ)し、敵に向ひ齒を鳴し、猛りうなりて飛び蒐る。這は適はじと安大人、引





卒のものが差いたる劍、かり鉾、數鎗(カヂヤリ)手にあたるを幸に投げつけ投げつけ、打ちかくる。虎は神力自由を得、劍を宙に引つ喰へ引つ喰へ、岩に投げ當て微塵になす。刄の光玉散る霰氷を碎くに異らず。打物盡くれば官人ども、色めき立つて逃げ迷ふ。後より和藤內、どつこい遣らぬと顯はれ出でゝ、安大人が素首を摑んでさし上げ、クルクルと振り舞はし、エイヤッと打ちつくれば、岩に熟柿を打つ如く、五體ひしげて失せにける。此勢に官人原、後へ戻れば惡虎の口、先へ行けば和藤內、二王立につつたちたり。「アゝ申し御堪忍、御免御免」と手を合せ、土に喰ひつき泣きゐる。

和藤內虎の背を撫で

「うぬ等が小國とて侮る日本人、虎さへ怖がる日本の手練を覺えたか。我こそ音に聞えたる鄭芝龍老一官が忰、九州平戸に生長せし和藤內とは我事なり。先帝の妹宮、栴檀皇女に巡り逢ひ、三世の恩を報ぜん爲、父が故鄕へ立ち歸り、國の亂を治むるなり。サア命惜しくば、味方につけ。否といへは虎の餌食、否か應か」

とつめかくる。

「喃何の否で御座りませう。韃靼王に從うも、李踏天に從うも、命が惜しさ。向後お前の御家來ども、お情賴み奉る」

と、地に鼻つけて畏る。

「オヽ出來した出來した。去りながら我家來になるからは、日本流に月代剃つて元服させ、名も改めて召使はん」

と指添の小刀はづさせ、是も當座の早剃刀。母も手々に受取つて、竝ぶ頭の鉢の水、揉むや揉まずに無理無體、片端そるやらこぼつやら、絲鬢、厚鬢、剃刀次第、瞬く暇に剃りしまひ、二櫛半のばらけ髪、頭は日本、髭は韃靼、身は唐人、互に顔を見合はせて、頭冷つく風引いて、嚏々(クサメ)村さめさめと、涙を流すぞ道理なる。

親子ドッと打ち笑ひ、揃ひも揃うた半廻、名も日本に改めて何左衞門、何兵衞、太郎、次郎、十郎、まで面々國所、頭字に名乘り、二行に立つてほつたてろ。承り候ふと、お先手の手振の衆ちやぐちう左衞門、東蒲塞(カボチヤ)右衞門、呂宋(ルスン)兵衞、東京(トンキン)兵衞、暹羅太郎、臼城(チヤボ)次郎、ちやるなん四郎、ほるなん五郎、うんすん六郎、すん吉郎、もうる左衞門、ぢやが太郎兵衞、さんとめ八郎、英吉利(イギリス)兵衞、今參のお伴先、跡に引馬、虎斑の駒、母を助けて孝行の名を取り、口取り國を取る、譽は異國本朝に、踏み跨げたる鞍鎧、虎の背中に打ち乘つて威勢を千里に顯せり。

**天の網島の一節**





福德に天滿神(アメミツカミ)の名を直に、天滿橋と行き通ふ、所も神の御前町、營む業も紙店に、紙屋治兵衞と名をつけて、千早振るほど買ひに來る、かみは正直、商買は所がらなり老舗なり。良人が炬燵にうたゝねを、枕屏風で風防ぐ。外は十夜の人通、店と内とを一締に、女房お三の心配り、日は短し夕飯時、市の側まで使にいて、玉は何してをる事ぞ。此三五郎めが戻らぬこと、風が冷い、二人の子供が寒からう。お末は乳を呑みたい時分も知らぬ。阿呆には何がなる。辛氣な奴ぢやと獨言、母樣(カヽサマ)ひとり戻つたと、走り歸る兄息子。

「オヽ勘太郎戻りやつたか。お末や三五郎は何とした」

「宮に遊んで乳呑みたいと、お末のたんと泣きやりました」

「左樣こそ左樣こそ、これや手も足も釘になつた。父樣(トヽサマ)の寢てござる炬燵で、あたつて暖まりや。此阿呆めどうせう」

と、待ちかね見世に駈けいづれば、三五郎、只一人、のらのらとして立ちかへる。

「こりや愚鈍(タハケ)。お末はどこに置いて來た」

「アヽホンニ何處でやら落してのけた。誰ぞ拾つたか知らんまで、何處ぞ尋ねて來ませうか」

「おのれまあまあ大事の子を、怪我でもあつたら、擲ち殺す」

と喚く處へ下女の玉、お末を脊中に

「ォヽォヽいとしや。辻に泣いてござんした。三五郎守するなら、ろくにしや」

と喚き歸れば

「ォヽ可愛や可愛や。乳呑みたからうの」

と同じく炬燵に添乳して、

「是玉その阿呆め、覺えるほど擲(クラ)はしやくらはしや」

といへば、三五郎かぶりふり

「いやいやたつた今、お宮で蜜柑を二つづゝ食はせ、私も五つ食うた」

と阿呆の癖に輕口だて、苦笑するばかりなり……

詞藻の豐富と輕妙の筆致、俗に入つて俗ならざる近松の妙趣は、この一例にも窺ひ知る事が出來ます。

門左衞門の後に、淨瑠璃の作も數多く出ましたが、何れもこれに及ぶものはありません。こゝには元文寛保から寶曆明和にかけての作者と著作とを、次に掲げて參考とします。

竹田出雲、假名手本忠臣藏　菅原傳授手習鑑　義經千本櫻

並木千柳、一谷嫩軍記

紀海音、八百屋お七歌祭文





三好松洛、御所櫻堀河夜討　平假名盛衰記

近松半二、奥州安達原　伊賀越道中雙六　本朝二十……四孝

平賀鳩溪、神靈矢口渡

などは、今日の淨瑠璃語りにも、演劇にも、屢々我々の耳に眼に觸れる所であります。淨瑠璃は操人形の衰ふると共に、作もまた餘りに出なくなりまして、これに代つて同系統のものがあらはれたのは脚本であります。

脚本は演劇——歌舞伎——芝居——のせりふをはじめ舞臺の模樣、俳優の動作、服裝などまで記したもので明和安永頃から文化文政頃、所謂歌舞伎芝居の發達と共に、多く作られました。

櫻井治助　名譽仁政錄　碁盤忠信

並木五瓶　五大力

鶴屋南北　四谷怪談

などは有名なもので、其後河竹新七、瀨川如皐なども、この脚本に筆を執りました。

**7. 散文—和漢混和文**　江戸時代の散文を概觀しますれば、漢學者が假名を交へて漢文から出た國文を